君と僕の壊れかけの世界

蒼井青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と僕の壊れかけの世界

【Ｎコード】
Ｎ５８４５Ｖ

【作者名】
蒼井青

【あらすじ】
はらり、はらりと黒く濁った空から白い雪が降り続ける。
今はもう三月。少し遅れた寒波が僕が住むこの町に訪れた。
中学最後の１日を友人みんなと、この時間まで卒業式の２次会と称し、遊んだあとみんなと別れ一人家路を急いでいた。
その道中、一人の幽霊と出会う。
それは、雪の様に白い肌をしていた。
それは、一本一本が極上の絹の様な黒く長い髪をしていた。
それは、長い間探し続けていたモノを見つけた様な表情をしていた。

そして、僕は意識を手放した。
世界は回る。
記憶は廻る。
意識と共に掴みかけた記憶を僕は手放した。
そして、それとともに＞ぼく＜は僕に戻った。

平成２１年３月。僕はこの出会いを後悔することになるだろう。

プロローグ

―ｐｒｏｌｏｇｕｅ―

はらり、はらりと黒く濁った空から白い雪が降り続ける。

今はもう三月。少し遅れた寒波が僕が住むこの町に訪れた。

中学最後の１日を友人みんなとこの時間まで卒業式の２次会と称し、遊んだあとみんなと別れ一人家路を急いでいた。

もちろん、中学３年生ということはまだまだ成人するには早い１５歳。２次会といってもカラオケで今の時間は夜は夜でもまだ８時前だった。

「まったく、来月から新しい学生生活が待っているっていうのに、こんなに寒くて桜咲く入学式を迎えられるのかよ」

記念だと言われ友人に制服のボタンを全てとられ、この寒空の中まったくの無防備で懐の中へと寒気を招き入れてるこの状況も相まって一人ぶつぶつと愚痴をこぼす。

「つーか、百歩譲って制服のボタンはよかったとして、あいつらコートのボタンまでももってくかよ、寒すぎだろ。早く帰ってこたつに――――ん？」

駅から僕の家までは駅前の賑やかな繁華街を抜け、さらに閑静な住宅街を抜けたそのまた奥の駅から徒歩３０分という素晴らしい立地条件をもっている。

件（くだん）のカラオケ店は駅前にあることからその３０分の道のりをとぼとぼと歩いていたのだが、ちょうど住宅街のエリアを抜けると突然に人の気配がなくなった。

気配というと語弊があるかもしれないが、本当に世界には僕一人だけしかいないのではないかという錯覚を覚えるほどの強烈な違和感が襲ってきた。

そう。あまりにも良く知っている感覚だ。

「あれ？ウソだろ…。最近めっきりなかったのに」

唐突だが僕には霊感がある。と言っても“見える、話せる、触れる”といった強力なものではなく、“なにかそこにいる”程度の普通の人に毛が少し生えたくらいの可愛いものだった。

そう、“だった”のだ。

そのはずなのに――――そうしてたはずなのに。なんだこの今までに感じたことのない強烈なものは！！

「駄目だ…。そちらに引っ張られては拙い。あの時の様になる。あの時？ちょっと待て。何を言っているんだ俺は・・・俺？あれ？僕は誰だ？」

朦朧（もうろう）としてくる意識の中、自分の記憶であるはずなのにまるで覚えていない＞それは＜第三者の記憶であるかの様に僕の頭を駆け巡る。

「知らない。こんなの知らない…。僕は僕だ。僕なんだ！！」

全身に張り付いたこの嫌悪感と倦怠感を綺麗にミキサーにぶち込んだものを無理矢理引き剥がすために僕は叫んだ。

「僕は…」

薄れ掛ける意識の中、道の先に白くとても綺麗な女の人を見た。＞それ＜は本当に浮世離れしていて、この降り積もる雪のように白かった。その顔にはとても穏やかな笑顔を張り付かせ一人僕のことを優しく見つめていた。

「あぁ、君はそこにいたんだ」

そして、僕は意識を手放した。

世界は回る。

記憶は廻る。

意識と共に掴みかけた記憶を僕は手放した。

そして、それとともに＞ぼく＜は僕に戻った。

平成２１年３月。僕はこの出会いを後悔することになるだろう。

1章（1）　真夜中の一幕（前書き）

はてさて、蒼井青（あおいあお）と言います。
新規すぎて、投稿の仕方すら良く分からない感じで、見切り発車しました。
恥ずかしい駄文の数々ですが、読んでいただけると幸いです。

1章（1）　真夜中の一幕

一章――？

真夜中。丑三つ時。人里はなれた森の中僕は走る。なんで？理由は単純明快追われてるからだ。誰に？そいつは――――

「良平！来るぞ！何をちんたら走ってんだこのグズ！ノロマ！」

「んなこと言われたって、これが一般人の限界なんだよ！うわ、追いつかれる！」

女の罵声になんとか言い返し、走りながら後ろを振り返る。夜の暗さに目が慣れてきているとは言え、周囲は暗闇の中ほとんど何も見えないはずなのに森の奥から凄まじいスピードでこちらに向かってくるものを“視る”。

「もう少しであやつの道具を仕掛けた所にでる！急げ！」

馬鹿野郎！こっちはとっくに限界振りっ切ってんだよ！

それでも無我夢中でひたすらに走り続ける。

途中、木々の根っこに躓きそうになりながら呼吸することすら許されない状態が続いていることに流石に辟易させられる。

すると森の中真っ暗闇だった辺りが急に明るくなった。四方どこを見ても木々に囲まれたこの場所で事前に見つけた唯一動き回れる広い場所。

森の中ぽっかりと開いた木々から月の光が差し込んできているのだ。

まるで人為的な程に丸く広がる草原。

「今だ！雪燈！」

「よし来た！やっと、私の出番だな！観念しろ！このド腐れ三下幽霊が！」

無我夢中で彼女の名前を呼ぶ。それに対し、女性にしては少し――――いや、かなり相応しくない言葉づかいで応(いら)えがくる。月明かりのお陰で周囲に光が差し込み、視野がはっきりとし“それ”が視認

できる。
　地面から浮き、全身透明感を持ち、少し青白く発光している。それはまさしく一般に幽霊と呼ばれるものだった。
　それと同時に四方から勢い良く光る鎖が伸び、“それ”を縛り上げた。
「はぁ、はぁ。い、いやマジで。今回も疲れたわ。なんだよちくしょう！毎回毎回！なんで僕がこんな目に会わなきゃなんないんだよ。僕は普通の高校生だぞ！真夜中に幽霊と鬼ごっこする高校生がどこに居るって言うんだよ！くそっ、これも全てあの人が原因だ！」
　＞仕掛け＜が上手くいったことで緊張の糸が解け、地面に崩れるように座り込む。
「ぼやいてる暇があるなら、さっさと始末しろ！！」
「わかってるよ！くそっ！自分の運命を呪うぞ」
　また、どこからともなく聞こえる女性の罵声が僕を立ち上がらせる。
　少しは休ませろよ！
　ほんと、普通だったら自分が置かれているこの現状に絶望して、全てを投げ出し裸足のまま逃げ出してるところだが、そうできない“理由”が僕にはある。
　なぜなら原因の一端はあの胡散臭い男が担っているが、それ以外の全てを僕自身にあるいっても過言ではないからだ。
　全ては自分の為に。
　あぁ、そんなこと頭ではわかってるんだけど、流石に自分の置かれてる現状に嫌気が差すよ。まったく。
　ふと現実逃避さながら、僕の人生の歯車が盛大に崩れた去年の春先のことを思いだしていると目の前の“それ”が暴れだした。
「おい！早く私を使え！！このままでは鎖がもたないぞ！」
　わかってる。
「今更ビビってんのか！お前がお前でいたければこの先もずっとこうやって戦わなきゃなんないんだぞ！」

わかってる・・・。
「良平！！！」
「わかってんだよ！！！！！」
雄叫びと共に蒼白く輝きだす己が左手をがむしゃらにそれへと叩きつける。
「吹き飛べーーー！！」
真夜中の暗闇の中、森の一角だけ一瞬眩い光に包まれた。

1章（2）　白昼夢

一章―？

暖かな日差しが照らす花畑の中で少女は嬉しそうな顔でこちらを向く。

そして彼女の口から歌声のように僕の名前が紡ぎ出される。

「しーちゃん。見て！この一面の景色を！」

あぁ、見てるよ。

「しーちゃん。聞こえる？鳥の声が！」

あぁ、聞こえるよ。

彼女が何をそんなにはしゃいでるのか呆れつつも、彼女のその笑顔に僕の表情も自然と笑顔になるのがわかる。

「しーちゃん。こっちへ来て。私を捕まえて。」

あぁ、今行くよ。

頷（うなづ）きと共に彼女の元へと足を踏み出す。

「！？」

しかし、その足は地面に張り付いてしまったかの様にまったく動こうとしない。

「あれ？あれ？」

「しーちゃん。早く来て。先に行っちゃうよ？」

待ってくれ！今行くから！

なんで動かないんだよ！早くしないと彼女が行ってしまう！

どんどん小さくなる少女を掴むように腕を伸ばす。

「早く私を捕まえて。そして、思い出して」

待って！何を思い出せって言うの？

僕をおいてかないで！

「…」

何？聞こえないよ！

「……！」

あの人たちみたいに置いてかないで！
「起きろ！椎名！！！！！！！」
「は、はい！」
優しい彼女の声から、最近よく耳にするようになった厳しい声へと変わり、僕は現実に引き戻された。
勢い良く立ち上がり、飛び込んできた景色は何人もの生徒がこちらを注目しており、目の前にある黒板の前には鬼のような恐ろしい顔をした女性が立っていた。
あれ？ここは、僕の教室で…今のはなんだったんだ？
「まだ、寝ぼけてるのか椎名！そんなに私の授業は子守唄にしか聞こえないのか？」
「い、いえ。すいません！」
鬼のような女性の一喝で段々と意識がはっきりとしていく。
そうだ。今は確か5限目の数学の授業中のはずだ。昼休みに悪友と昼飯を賭けたジャンケンに勝って、いい気になって食べ過ぎた後だったし、昨日は夜明け頃やっと家に着いてまともに睡眠とってなかったから眠くなってしまったんだ。
ふと、前を見るとその数学の授業を受け持つ先生であり、僕らのクラス1年2組の担任でもある矩境あきほ先生がこちらを睨んでいた。余談だが、三十路の足音が迫ってきている28才である。
「どうした？ぼけっとつっ立ったままで。そんなに廊下に立っていたいのか？」
「い、いま座ります」
「よし。じゃあ、授業を再開するぞ」
あわてて自分の席に腰を据え、落ち着くとこちらを注目していた生徒たちがまた黒板へと目を戻す。
なんのことはない何時もの授業風景の一つだ。
しかし、なにをそんなに嬉しいのか隣の席のバカ・・・いや、頭がかなり弱い男だけが未だににやにやとこちらを見ていた。
「なんだよ。浩市」

「いやー、よく寝てるとは思ったけど、傑作だわ。くくく」
「うるせーよ。わかってたなら起こしてくれても良かったろ、バカ野郎。お前の所為で怒られたろ。唯でさえ、お前とつるんでいる事であきほちゃんから警戒されてんだからさ」
「まぁまぁ、昼の仕返しだと思えよ。しかし、あきほちゃんの声が目覚ましなんて、逆に羨ましい限りじゃん」
「馬鹿」
僕のおかげで一瞬止まった授業も再開し、いつもの様に教鞭を振るうあきほちゃんを見る。
僕らの担任である矩境先生は生徒から良くちゃん付けで呼ばれるほど生徒との関係は良好で、皆から親しまれている。
まぁ、本人もそう呼ばれることに関しては嫌ってないのでいいのだろう。
いい先生ではあるよな。まぁ、少し怖いけど。それよりもまずはこいつだな。
そして、この隣の席に座る奴が昼飯を賭けた勝負に負けた負け犬もとい、中学からの悪友だ。しかもおまけに4年連続同じクラスという腐れ縁ときている浅井浩市である。
「勝負を持ちかけてきたのはそっちだろ。負けんのが悪いんだよ。起こしてくれるかどうかは関係ないだろ」
「おっと、逆恨みはよしてもらおうか。しかし、それでもよくもまぁスヤスヤと嬉しそうな顔して寝てたな。好きな女の夢でも見てたのかよ？」
「阿保。ゆめ？夢…」
しかし、何の夢を見てたんだっけ？突然起こされたからなのか、綺麗に記憶から抜け落ちてしまったみたいだ。
あれ？なんか大事な内容だった気もするけど思い出せないや。
「おいおい。大丈夫かよ？まだ、寝惚けてんじゃないのか？それと起こさなかったのは彼女も同じなんだから責められるのは俺だけじゃないぞ」

「彼女？」
「なんだよ。まだ、寝ぼけてるのか？」
そっちそっちと示すように顎で指された方向――――浩市から見ると僕の後ろ。つまり僕から見て浩市とは反対方向の窓へと振り向くと目の前に女性がいた。
いや、正確に言うと女性の“顔”があった。
しかも上下逆さまの顔が目の前に浮いてたのだ。
「うあぁぁぁーーーー！！！！！！！！！」
「また、椎名か！何度私の授業を妨害すれば気が済むんだ！廊下に立ってろ！」
僕の悲鳴とあきほちゃんの怒号が学校中に響き渡った。

1章（3）　彼女と僕（前書き）

ストックがあるうちはちょろちょろ更新できるけど…
ちょっと一回の文字数が少ないかな…

1章（3）　彼女と僕

一章―？

まったく本当に廊下に生徒を立たせるなんて何時の時代の教育だよ。

授業中。誰もいない廊下で一人、両手にバケツという冗談じゃないかと思いたいくらいの格好で立たされているこの現状に腹が立つ。

「しかも、教室から出るときの浩市の野郎、大爆笑しやがって…思い出したらまた腹が立ってきた」

一人妄想の中、悪友の顔を原型がなくなるくらい殴り続けることで怒りを静める。

あんなバカでも神様はひとつは取り柄を残してやり、中学の頃空手の全国大会に出場した経歴を持つ。

まぁ、試合当日に寝坊して不戦敗したのはあいつらしいけど。

だから、現実では逆立ちしても喧嘩に勝てないから妄想の中で憂さ晴らしを続ける。

僕、弱いしね。

「てか、よくよく考えてみなくてもお前も原因の一つじゃないか」

少し頭が落ち着き、冷静になってきたことで怒りの矛先を隣に立つ女に向けた。

「ご、ごめんなさい！」

隣に立つ女は年齢は俺と同じか少し上といった感じで、黒髪長髪。その長い髪をワンサイドアップ？というのか片方を結んだ髪型をしている。顔は僕個人の判断になるがそうそういないくらい綺麗だと思う。

まぁ、プロフィールを書かせる機会があれば必ず性格に多少の難ありと入れてやりたいところもあるが、それよりもなにより他と異なるのが彼女の身長はこの前聞いた話では１５５センチらしいのだが、今現在俺を見下ろした形で会話をしていることだ。

何か足場やら台の上に乗って話しているわけじゃない。足元をみると彼女の足から廊下のテカテカの長尺シートまでの約３０センチの空間には“何も”ないのだ。
そう、もう一度正確に言えば、彼女は浮いているのだ。だから先ほどの“立っている”という表現はこの場合不適切と言える。
僕自身ありえねーって思ってんだから、未だに認めたくないけど、こいつは俗に言う“幽霊”ってやつだ。
名前は雪燈（ゆきほ）。上の名前は知らん。というか本人がそれしか覚えていないらしい。
生前の記憶は曖昧で、何故に僕なんかにとりついているかはまた後の話で。
異論は却下。僕もそこに一票入れたいところだが、いるものは仕様がない。
だから大人しく現実を受け止めよう。
「つーか、話しづらいし首痛いし、もうちょい目線の高さ合わせてくんないかな」
そう言うと俯きながら、彼女の足元から廊下の高さが１５センチくらいに縮まった。
別に女性に見下ろされるのが嫌だとかちっちゃい男の子のプライドとかじゃないから邪推しないように。断じて違う。
「んで、授業中に寝てた僕も僕だけど、なんで起こしてくれなかったのさ？」
「そ、その…。あまりに気持ちよさそうに寝てたから。それに昨日寝ていないので疲れていると思い、起こすのも悪いかなぁって思って…」
うーん。そう言われると怒りづらいな。
「そ、それに立たされているのは私のこと見て悲鳴を挙げた良平君が悪いです！未だに私のこと見て驚くってなんですか！流石に傷つきますよ」
「悪かった、悪かった。落ち着けよ。つーか、誰だって寝惚けた頭

であんなの見たら驚くわ」
やっぱり、どうこう言っても寝てた僕自身の責任であることだし。それよりも早く授業終わんないかなぁ。地味に辛いんだよなこの格好。
自分の状態を忘れるため現実逃避する様に意味も無い思考に陥る。
「そ、それに…寝顔が…可愛かったので…」
腕つりそうだし…。もうこのバケツ置いちゃおうかな。別に律儀に持ってる必要ないよな。うん、ないない。反省だけは十分にしたし、あきほちゃんも許してくれるだろう。
「見てて、こっちも嬉しくて…」
あぁ、そういえば今日はあの人の所に行かなきゃ行けないんだった。うわぁ、すげー面倒だな。今日は早く家に帰ってたっぷり惰眠を貪りたいところなのにな。
よし！とりあえずはもう教室に戻るか！
「そ、その…。やっぱり私は…君のことを…す…す、す「なぁ」」
「は、はい！」
「そろそろ終わるし、教室戻ろうぜ」
さっきから何をぶつぶつ言っていたのか知らないが、こっちはこんなところで残り少ない体力を無駄遣いしたくないのだ。
「え、あ」
「ほら、何やってんだ？置いてくぞ」
「うぅ。もういいです。良平君なんて一生そのまま立ってればいいんです」
「雪燈さん？なんでいきなり怒ってらっしゃるのですか？」
あれ？僕なんかしたか？
「知りません！ほら、良平君は私の話を聞きたくないほど教室に戻りたいのでしょう？なら、行きましょう」
あれ…独り言じゃなかったのか。

1章（4）　僕の日常

一章――？

「――――では、これで今日のホームルームを終わりにしたいと思う。最後に最近下校時に生徒が巻き込まれる事件が増えてるらしいので部活などで帰りが遅くなる生徒は気を付けるように！以上、また明日！」

矩境先生の毎度恒例の男らしい帰りの挨拶を聞き終えた僕は帰りの準備を始めていると毎度の如く、浩市が話しかけてきた。

「よー。やっとめんどい授業も終わったし、今日は部活もないからこの後どっか遊びにいかねーか？てか、考えたらお前が授業中に居眠りすんなんてめずらしーよな。なんでそんなに今日疲れてんだよ？まさか！俺に抜け駆けで夜更かしして、青少年は見てはいけないものを見てたわけじゃないよな！」

いきなり勝手に自分で作り上げた妄想を鵜呑みにして、鼻息を荒げて僕に詰め寄ってきた。顔が近い！

こいつのこのコロコロと話題が変わっていく話し方は４年の付き合いを経た今でも疲れる時がある。

…馬鹿だ。馬鹿だと思っていたがこーゆうのを見るとやっぱこいつは馬鹿なんだと逆に安心してしまう。

「馬鹿言ってんじゃないわよ！」

「ぐへっ！！」

一人こいつの馬鹿さは偉大だなと感傷に浸っていたら、何処からか同意の声と共に突如浩市の頭がスパンッと心地いい音を鳴らし、そのまま沈んだ。というか後ろから教科書で思いっきり殴られただけなんだが――――痛そうだな。

そして叩いた張本人に目を向ける。

「今日もナイス突っ込み。でもあんまやりすぎるとこいつのすずめの涙ほどの脳みそが壊れちゃうからほどほどにしとけよ」

「バカにはこれくらいがちょうどいいのよ」
うーん。僕も人のこと言えないけど、こいつも大概、浩市に対して酷いよな。
浩市を殴った凶器である教科書を片手に、まったく悪びれもしないでそう嘯くのは、同じクラスでたぶん僕の人生の中で一番付き合いが長い巴茜（ともえあかね）だった。浩市との４年目というのはこの狭い街では中学・高校とエスカレート式に進学する奴等が多いため良くある話だが、こいつとは小学５年の時に僕がこいつの通う小学校に転入してからだから、なんと６年目の付き合いだ。
叩かれた浩市はそのまま机に突っ伏し、叩いた本人はそんな些細なことは忘れたと言うかの様に自分の胸の前で腕を組んでいる。
しかし、相変わらず可哀そうになるほどの絶壁だな。誰か分けて…
「あによ」
「い、いや。なんでもない。ないです」
やべー。目が据わってますよ、茜さん。というか、僕の心の声を聞かないでください。
「いってー！！！」
あ、復活した。
叩かれた頭を押さえ浩市が勢い良く起き上がる。
「それより、今日なんか用事あんの？ないならこのあと付き合ってよ！昨日駅前のお店でセールしてて、可愛い服があったのよ！」
スルーされた！
「どうなのよ？」
「殴っといて無視かいっ！！」
今のはお前に賛成だ！
「あによ！煩いわね。今、良平と話してるんだから邪魔しないでよ！」
「俺が先に話してたんだよ！」
この人やっぱ僕よりひでーぞ！
いつの間にか僕の席の前でいつもの如く言い争いもとい夫婦漫才

が勃発したのを見ながら呆れつつ、ちょっと面倒になってきたしこのまま帰っちゃおうかなと本気で考えているといきなり標的がこちらに移ってしまった。
「「で、どっちと帰る（んだよ！）のよ！」」
「ちょ、ちょっと落ち着けよ。んー、さっきの浩市の質問から返すと眠いのは昨日、あの人の仕事の手伝いをさせられてて、寝てないんだよ。それで、その事後報告として今日このあとあの人に会わなきゃなんないんだよ。そういう訳だから、悪いけど今日はお前等２人と遊んでられないってのが現状です」
　そう。こいつらとは付き合いが長いことから“あの人”でそれが誰を指しているのかが理解してもらえる。しかし、僕とあの人の関係の捉え方は２人とも異なるのだけれども。
「あぁ、暁良（あきら）さんの所へ行くのか。んー、じゃあ仕様がないか。んでも、あんま無理すんなよ。お前の体がもたねぇからよ」
「また、あの人の手伝い！？ほんと、なんで良平がそこまでして働かなきゃなんないの？もうやめたら？別にバイトするなら他にもあるでしょ。それにあの人なんか胡散臭いのよね。なんだったら私がなんか紹介してあげようか？なにがいい？なんだったらうちにくる？」
「いや、確かにまぁ、お金には困っているし、お前の親父さんがやってる喫茶店で働くってのは魅力的だけど、大丈夫だよ。それに認めたくないけど僕が好きでやってることだから」
「あんたもほんと変わり者よねー。」
　前者の浩市はある程度、僕とあの人の関係を理解している。それというのも雪燈が見えることからわかる様に、こいつにも霊感がある。というか僕より強いんじゃないのか。
　しかも実家は寺というサラブレッドである。
と言うことは将来は禿になるのか――――楽しみだな！そうなったら写真撮って、プリントアウトして町中に張りまわってやる！そんでもって…おっと話が逸れた。

――――閑話休題。

それらから雪燈のことを追求され、彼女を無事に祓うため、あの人の所で仕事をしていると伝えてある。まぁ、嘘ではないが、真実でもない。中途半端な話だ。

親友と呼べる人間にすら全てを話したと言うわけではないという所が自分に嫌気がさしてしまう。

後者の茜にいたっては霊感０の彼女だからこそ、知り合いのおっさんの手伝いをやらされている程度の認識しか持っていない。

実家は喫茶店を営んでいることから彼女自身もお小遣い稼ぎで手伝っているらしい。

しかし、彼女はこれでいい。

知らないのであればこちら側に来る必要はないのだから。隠しているという後ろめたさよりも、彼女の日常を守るためにはこれでいいのだと自分に言い聞かせる。

体の良い言い訳であるとは本人の僕自身が良くわかってはいるけどさ。

「まぁ、そういうことだから悪いけど、僕はもう行くよ。どうせなら2人で遊んでくればいいんじゃないか？」

「「なんでこいつと！！」」

「あはははは。息はピッタリじゃないか。じゃあ、また明日な」

いつになっても変わらないでいてほしい僕の日常を横目に教室をでて、僕の日常をぶち壊した恩人の下へと足を向ける。

全く、憂鬱だよ。

1章（5）　探偵（前書き）

1章（5）　探偵

一章――？

ここで“あの人”久世暁良（くぜあきら）という人物について少し触れておこうと思う。ちなみにこの名前すら本名かどうか定かではない。

体の線は細く、腹が立つほどスタイルはいいのだが、気が向いたときにしか髭を剃らない為、無精髭は伸びたい放題、いつも決まって同じ黒のスーツに黒のネクタイという不衛生で陰気臭い服装という見るからに怪しい外見を持っている。

そのためにか実年齢はこの前聞いた話では二十六歳とのことらしいのだが、どうみても三十路に片足突っ込んでんじゃないかと思えてしまう。

超の付くほどの愛煙家で、事務所の空気はいつも真っ白である。そんな日常の中で関わりたいとは微塵にも思わない人物と、なぜ僕が知り合いなのかというとそれだけで本一冊書けるのではないだろうかというほど長い話になってしまうのだが、端的には僕の方からそちらに歩み寄ったという表現が正しいように思える。原因は僕にあり、要因は雪燈にあり、結果にあの人がくる構図である。

なぜこんなに曖昧な表現しかできないかというと、僕自身この話に関しては全てを知らないのである。あの人から直接聞いた話で補完した記憶なのである。可笑しな話ではあるが事実だ。僕の記憶はぼろぼろに抜け落ちているのだ。

つまりは記憶障害。記憶喪失。

小学5年生より前の記憶と中学3年生の最後の1日だけ僕には記憶がない。

残されたのはそれ以外の記憶と霊感とこの隣でふわふわ浮いている女の子だけだった。

んで、何故にこんな怪しい幽霊に取り付かれたままにしているというと…。

「なぁ、今更な話なんだけど、お前はなんで僕なんかに取り付いてんだっけ？」
「そ、それは私も記憶を失ってしまったからわからないの。でも、お互い過去になんらかの関係があったからこそ、私は君のもとに現れたわけだし――――そして、それはとても重要なことだと思うの。それに、私の記憶は堕ちたことが原因での喪失だけど、君自身の記憶の欠如はその過去に原因があると思うの。だ、大丈夫。あの人が言うように私といれば私の記憶も良平君の記憶もいずれ思い出すことができるはずだから」
だそうだ。僕の十歳より以前の記憶と彼女とは深い関係があるらしく、どうやらそこら辺の出来事が原因で彼女は三ヶ月前、僕のもとに霊となりながらも現れたらしい。堕ちたというのは其のままの意味で悪霊になったということらしい。まぁ、彼女が僕にとってどのような存在だったのかはわからないんだけど。
幼馴染？将来を誓い合った仲？はたまた親の仇？と荒唐無稽な妄想はさておき、彼女といればその記憶を取り戻せるというのがあの人の答えだった。そして、もう一つの記憶の欠落である中学三年の最後の日に僕は悪霊となりかけた（久世さん曰く、完全には堕ちてなかったらしい）彼女と出会い――――憑りつかれた。
それを解決するためにあの人のもとへとたどり着いたという話だ。そこで彼の助力のお陰で彼女は正気に戻れたのだ。今はもう無事に？単なる幽霊になっている。
まぁ、守護霊的ななにかだと思ってくれて良いだろう。
しかし、僕の一日と彼女の一生の記憶は欠落し、僕と彼女の関係は変わらないままだった。
解決するなら、こんな中途半端じゃなく、大円団にしろよな。
「なーに、心配いらないよ。君らの記憶の欠落は一時的なものだよ。それに君らが出会ったのも何も偶然というわけじゃないんだよ。彼女といれば君の記憶もいずれ戻るだろうし、彼女のためにも君と一緒にいた方がいいだろうと考えて、完全に彼女を祓うのはやめとい

たんだよ」
だそうだ。この町に引っ越してきてから約六年。いままで平凡で今後も代わり映えのしないはずだった僕の平穏な日常はこうやって音もなく崩れたのだった。
平凡で凡庸な昔に還りたいよ、まったく。

1章（5）　探偵（後書き）

ルビとか入れてないですけど（入れ方わかってないだけ…）
ここらで出てきた人の名前をちょっと書いときます。

椎名良平（しいな りょうへい）
雪燈（ゆきほ）
浅井浩市（あさい こういち）
巴茜（ともえ あかね）
久世暁良（くぜ あきら）
矩境あきほ（くざかい　あきほ）

登場人物紹介とか別に作った方がいいのか、
作らないといけなくなる自分の文章力を嘆くべきか…

2章（1）　依頼

二章―？

自称“探偵”久世暁良の事務所は、僕の家とは駅から正反対の繁華街の一角に建つ寂れたビルの一室にある。看板もなく、ただ入口のドアに『久世探偵事務所』と書かれた札がぶら下がっているだけである。

恥ずかしげも無く、その下には“この世のこととは思えないこと、現実では在りえない事などの問題をずばっと解決”などと書かれている。

ここに訪れるたびに、よく僕はあの日ここに行き着いたものだと不思議に思う。

「失礼しまーす」

「いらっしゃ…、なんだ、君か」

扉を開けた先には、皮の椅子にだらしなく座った久世さんの残念そうな顔だった。

「あからさまにがっかりするなよ！あんたが今日来るように言ったんだろ！」

「いやー、飛び込みのお客様だと思って、ついね」

あはは。と笑いながら、口に咥えていた煙草を灰皿に押し付ける。のっけから、失礼な対応だな。

「で、なんで来たんだっけ？」

「あんたが昨日の依頼の事後報告聞きたいから次の日に顔出すように言ったんだろ！」

「あぁ、そうだった。そうだった。で、どうなったの？」

まったく、この人と話すのは疲れる。

「別になんの問題もなく祓いましたよ。そこら辺に良くいる低級霊だったし」

ちょっと強がってみる。別に他意はないよ。うん。

「そうかい。そうかい。そりゃ結構。やっぱり君には退魔の才能があるのかもねー。どうせならうちで正式に働かないかい？」
「嫌ですよ。どうせ給料安いだろうし、毎回危険と隣合わせの仕事なんて。今回だって生活費の足しにするために手伝っただけですし。それにそもそも霊を祓う力があるのは僕にあるんじゃなく、雪燈にあるだけですよ」
「彼女の力を使えるということも一つの君の才能じゃないかな」
滅多に見せない真剣な表情で僕を見る。
な、なんか気持ち悪いくらいに褒めるな。
「煽ててもなにも出ませんよ。それより、昨日の依頼料の半分くださいよ。このあと近所のスーパーでタイムセールがあるんですよ」
「あぁ、依頼料ね。依頼料。ないや」
「ないならないと…はぁ！？今日依頼者から振り込みがあったはずですよね？」
おい、この人今なんて言ったんだ！？ないだって？
「いやー、それがお金下ろしに銀行行った帰りによく働いてくれる君のために少しでも色を付けて、給料渡そうと思ってね」
あははーっと両手を広げる。
「あんたまさか全部パチンコに注ぎ込んだんか！！」
「出ると思ったんだよねー。新しい台だったし。ま、まぁ次の依頼料で挽回するからさ！」
「そうゆう問題じゃねーー！！！！じゃ、じゃあ今回タダ働きってことですか？今月厳しいんですよ！」
これでもかというくらいに体全身を使って、絶望感と現状の慌てた様子を表現する。
「そこら辺は大丈夫！依頼だけは山ほどあるから！だから、君が正式にうちで働けば何も問題ない！君は生活費を稼げる！僕も煙草が買える！黒猫さんも御飯にありつける！万事解決！みんな幸せじゃないか！」
くっそ！妙に煽てると思ったら、そういうことか！しかも当初の

問題を有耶無耶にしようとしているし！
　しかもこんな寂れた探偵事務所に、そうそう仕事が舞い込むことなんてないだろ！
「はぁ…。もういいです。次からは僕が直接銀行に行かせてもらいますから。ところでその黒猫さんはどこへいったんです？」
「次の依頼料出るまで御飯無しって言ったら、怒って家出しちゃった。まったく一緒にこの状況を打破しようと協力してくれてもいいのに。薄情だよねー」
「いや、そこは全てあんたが悪い。それに猫にまで頼ろうとしないでくださいよ」
　黒猫さんとはこの事務所で飼っている黒猫だ。
　もちろんこんな安直でセンスの欠片が一つもないような名前を恥ずかしげなくつけたのは当の飼い主である久世さんだ。全身綺麗な黒毛で覆われ、金と蒼のオッドアイという変わった雌猫である。
　なぜだかわからないけど、僕は彼女に嫌われてるっぽい。それにどこか人間臭いんだよな、あの猫。
「で、その依頼はなにがあるんです？」
「お！やる気になってくれたかい？やっぱり、君は頼りになるなぁー」
「嫌々ですよ！それに、たまには自分で仕事すればいいじゃないですか！」
「いやー、これでも僕忙しいんだよね。それに依頼には出てこないけど君に頼めなくて、この町に影響を与えるほどの問題なんかは僕はちゃんと解決してるんだよ」
「本当ですか？」
「ほんと、ほんと。これでも僕はこの町が嫌いじゃないからね」
　好きとは言わないんだな。
「まぁ、いいですよ。で、依頼はどんなのがあるんですか？」
「んー、君向けだとここら辺かなー」
　つい3日前に掃除したはずの机は、今は目も当てられないほどの

混沌具合になっており、そこの一角に積まれている書類の束からＡ４サイズの用紙を３枚出してきた。ちなみに掃除したのはもちろん僕だ。
「なになに。白樺町か、隣町じゃないか。寺の住職からの依頼で自分の所の墓に住み着いた霊を如何にかしてほしい…。自分でやれ！本職だろ！霊がいるのわかるくらいの力があればなんとかなんだろ！次！」
「結構高額な依頼なのに…」
「次は三丁目に住む依頼人からで…小学生の女の子からかよ！なになに、飼っていた犬のジョンが先月亡くなったのですが、今でも夜中にジョンの鳴き声が聞こえます。どうにか無事に天国に行ってもらいたいです。お願いします…」
「で、どうするんだい？」
ニヤニヤこっちを見るな。なんだその見透かしたような目は。
「とりあえず、これは保留として…」
「受けるんだ！あはははは！やっぱり、受けるんだその依頼」
「まだ、保留としか言ってないですよ！」
「いやー、やっぱり君は優しいなぁー。それとも小さい女の子にだけ優しいのかなぁ」
「人の話を聞けよ！」
と言っても癪に障るが受けることになるんだけども。しかし、この人に僕がロリコンだと勘違いされるのは納得がいかない！…だって可哀想じゃないか。
「とりあえず、次！清稜中の校長からの依頼か。ん？僕の母校じゃないか！内容は下校時に生徒が失踪する事件が今月に二度起きているため、何らかの事件に巻き込まれた可能性があるのでは…おいおい、マジかよ。普通に事件じゃないか。こんな寂れた探偵事務所よりもまずは警察に連絡した方がいいんじゃないのか？」
「あぁ、その事件ね。それ、そこの中学の校長が警察に依頼して、そこで知り合いの刑事から僕に依頼が来たんだよ。その人自身は霊

感とかないんだけれど、第六感というのか直感が優れていてね。それで今回の事件は僕等向けのものじゃないかと考えて依頼してきたんだ。これでも僕は顔が広いんだよ。それと寂れたは余計だよ」
この人の人間関係とかほんと謎だよな。総理大臣と知り合いとか言われても驚かないぞ。
「だから、この依頼も結構お金がいいんだよね。と言っても少し君には荷が重たいかもしれないけど…」
「やる」
「お、珍しくやる気だね。やっぱり若い子がしん…」
「違いますよ！ここは僕の母校だ。それに妹の通う中学でもある。こんなの知ってしまって知らない振りができるほど僕は器用じゃない。できるできないじゃないし、やるかやらないかだけのことですよ。なんかわかったらまた来ます」
そう言って、机の上に置いてる紙を手に取り、僕は勢い良く事務所を後にした。

「いってらっしゃーい…。やっぱり君は優しいよ。見てて面白いほどに。さて、僕は僕で今日も今回も楽しませてもらうとしますか――ん？」
また一人に戻り静寂が帰ってきた部屋に開いたままだった窓の隙間から小さな同居人が帰ってきた。
全身闇のように深い黒。
金と蒼のオッドアイ。
「あれ？おかえりー。ちょうどさっきまで椎名君が来てたのにすれ違いになっちゃったね。それにしても案外短い家出だったねー」
にゃー。と応えを返し、彼女のこの部屋においての定位置である本棚の上に飛び乗り丸くなった。
「あらら。なんだよ、まだ怒ってんの？仕様がないなぁー。じゃあ、いい具合に闇が広がってきたことだし、僕もそろそろ出かけますかね」

パタン。とドアが閉まり部屋から人はいなくなる。そして、また部屋に静寂が戻った。

2章（2）　接触

二章――？

事務所を出て、家路へと急ぐ。思いのほか長い時間事務所にいたらしく、町には日が落ちかけている。そのため、とりあえず今日のところは家に帰り妹に状況を聞いたほうがいいだろう。

「なぁ、雪燈。本当に今回の話、霊関係の事件だと思うか？」

――――蛇（じゃ）の道は蛇（へび）というわけではないが、彼女の意見も気になるところだ。

「――――」

「ん？どうした？」

期待とは反対に彼女の無言の反応を不思議に思い歩みを止め、後ろを振り返ると2、3メートル後ろのほうで彼女は立ち止まっていた。

いや、正確には浮いていた。心配になり彼女に近づいていく。

「おい、どうしたんだよ？」

「――――い」

あれ？様子がおかしいぞ。

「――さい」

ていうか、僕なんか大事なこと忘れてるような…。

「雪燈さーん？」

「うるさーい！！！！！！！」

「う、うわぁ！」

「なにがどう思う？だ！あやつの話を聞いている時点で、私に意見を求めるのが筋だろ！私がいなければ祓う力もないくせに！それを今更遅いわ！だいたい、依頼を受けた動機が妹が心配？はん！片腹痛いわこのシスコンが！」

「お、落ち着け！僕が悪かった。」

しまった！あの人との話ですっかり忘れていたけど、もう日が暮

れてしまっている。
突然だがこいつは昼と夜とでは人格が異なる。一つの入れ物に対して、二つの心が存在してるのだ。所謂、二重人格。
しかし、これらは別物というわけではなく、どちらも彼女の人格を形成するものらしい。
本来の彼女の人格から相反する心が分離した形で、昼の彼女も夜の彼女も記憶の共有はなされているし、互いのことを認識してすらいる。
昼と夜。陽と陰。静と動。
なぜこんな面倒な状態に陥っているかというと、これもまたあの人が絡んでいる。
堕ちた彼女を救い上げる際に、僕と彼女の間にできた糸は複雑に絡み合いお互いがお互いの人格に負荷をかけ、このままでは二人とも存在する力を失う危険があったらしい。それらを解決するために僕は彼女との糸を残し、一日分の記憶を代償に――――彼女は存在を二つに別け一生の記憶を代償にして壊れかけた存在をこの世界に定着させたそうだ。
正直、なるほどよくわからんって感じだけど。あの人の説明はいつだってそうだ。
手放しで感謝すべきところなんだが、その為の代償は僕等二人にはあまりにも大きかった…。
「おい！人の話を聞いてるのか！」
「ご、ごめん」
「ほんとに悪いと思ってるのやら…まぁ、いい。で、事件についてだな」
「あ、あぁ。どう思う」
「今の時点ではなんとも言えんが…まずはやはり小娘に話を聞いてからでも判断するのは遅くはないだろ」
「やっぱ、そうなるか。なら、わざわざこんな時間まで町にいる必要はないよな。さっさと帰って情報を集めないと…」

「椎名！」
それは突然だった。
彼女を宥めるために後ろを向いていた僕は彼女に名前を呼ばれ、その視線の先つまり僕の後ろを見た。その瞬間世界は回転した。
まさに文字通りに。
そのまま吹き飛ばされ、民家の塀へと盛大にぶつかることで停止する。
「――――っ！う、うあ。くっ！いってー！」
一瞬遅れて痛みが全身を走る。そうしてやっと自分が頬を殴られたのだと理解した。
「大丈夫か！」
雪燈には珍しく慌てた声で僕に駆け寄る。
「な、なんとか。でもちょっと普通の人間には動けないや」
「馬鹿者！とっさに私が境界を作らなければ死んでいたところだぞ！」
「そりゃあ、ありがと。しかし、いきなりですか」
殴られたことにより、脳が揺れたのか吐き気と眩暈を我慢し、霞む視界で殴った犯人を捉える。所々ボロボロの制服を身に纏った少女がそこにはいた。
あれは僕の中学の制服だ。
「はは。どうやらビンゴみたいだ」
「そのようだな。どうする？立ち向かうにしても逃げるにしても動けるか？」
「いや、まだ動ける気配すらしないよ。脳みそがシェイクされたのか、酷い状態だ」
「くるぞ！」
「くっそー！まだ休憩中だっつーの！」
一瞬――――クラウチングスタートの様に低い姿勢をとると少女は飛ぶように突っ込んできた。
と言うか――――正しく飛んでる！

ジャンプしたまんま突っ込んできやがった！
「おいおい、あっちからこっちまで15メートルくらいあんだぞ！」
「椎名！逃げろ！」
無理！！
なんかないのか！なんもないのか！もう一発あのパンチくらったら、流石に死ねる！
「昨夜の護符は残ってないのか！」
あわてて自分の制服の胸ポケットを探る。
あった！！
酷く見っとも無いが半ベソを掻きながら、ポケットから出した1枚の札を地面へと叩き付ける。すると———昨夜の如く、少女を囲む様に四方から光る鎖が伸び、目と鼻の先で彼女の体を捕らえ地面へと張り付ける。
「はぁ、はぁ。やばい、今のはやばかった。今回ばかりはあの人の道具に感謝するよ」
取り敢えずの処置ができたことに、力が一気に抜ける。
少女に目を向けると、光の鎖から抜け出そうと抗おうとも、鎖はがっちりと少女を縛り上げている———なんか字面からしたら、いやらしい表現だな。
しかし、あんなボロボロになって可哀そうに———ほぼ半裸じゃないか！
なんだ？最近の中学生はあんな際どい下着を身に着けるのか！？けしからん！こんど妹の箪笥をチェックしなければ！
「おい」
「は、はい。ど、どうしました？雪燈さん」
目が怖いですよ。
「お前今ろくでもないこと考えてたろ」
「いやだなぁー。雪燈さん。こんなピンチ、もう絶体絶命、危機一髪みたいなシリアスな時に、僕が最近の中学生の下着事情について考察しているわけがないじゃないですか———あ！」

「死ね！お前は！こんな時に何考えてんだ！」
仕方ないじゃないか！高校1年生としては健全な反応と思考だ！
いかんいかん。突然の襲撃で、パニックになりそうな思考を落ち着かせるために、冗談を織り交ぜて、平静を保つ名付けて良平テクニックを使用してたら、話が変な方向に行き過ぎた。
――――閑話休題。
間違っても僕の人間性が疑われることがないための言い訳じゃないのであしからず。
もう一度少女をよく見る。顔は蒼白で目も虚ろ――――あれは完全に憑かれてるな。
それにボロボロの制服から覗く肌は所々傷だらけで、長い時間あの状態であることが容易に把握できる。あれじゃあ――――
「あれは、綺麗に祓うのは難しいな」
「ちょうど僕もそこに行き着いた所だよ。理想と願望としてはどうにか彼女を助けたいけど、現実問題ちょっと無理かな？」
「あれだけ長い時間霊と定着しているのでは祓う際に彼女の精神ごと壊れてしまいかねないな」
先程の僕と雪燈の時みたいに人間の魂と幽霊の魂は酷く癒着しやすい。しかし、実際のところ異なる相容れないもの同士なために最終的には人間の魂は幽霊の魂に負けて消滅してしまうのだ。
その癒着を取り払うのが除霊ということだが、無理に剥がそうとするとこれまた同じく人間の魂ごと傷つけてしまうのだ。
まったくどうしてこう世界は優しくないんだろうかな。あんな普通の子がこんな目に平気で会ってしまうなんて。
普通にこれからも当たり前に続くと思っていた日常が理不尽に壊される――――そんなの糞くらえだ。
「雪燈」
「どうした？」
「どうにかならないか？」
「ふん。私はいつもの様にいつもの如く、お前の望みのためにただ

力を貸すだけだよ。あとはお前次第だ」
「ありがとう」
さてと、それじゃあやってみますか。
よいしょ、となんとか立ち上がる。
まだ靄(もや)がかかりはっきりとしない視界で彼女を“視る”。
「しかし、憑依型ってのは厄介だな。元は普通の女の子のはずなのにあの怪力とスピード…あの人の言う通りというのは少し不満だけど、今回は本当に僕だけじゃ太刀打ちできなかったな」
「ふん！今頃、私の有り難味がわかってきたのか、グズめ」
「相変わらず、口だけは酷いな！まぁ、そうなんだけど…さて、憑依型が其方さんだけの専売特許じゃないってとこを見せないとな」
眼を瞑(つむ)り、精神の先を雪燈へと伸ばす。彼女自身の魂との定着を捉え、自分の中へ落とし込む――――霊側に一方的に体を預ける、もしくは今回の女の子の様に奪われる“憑依”ではなく、それとは一段上の自分の意思の元に霊の力を引き出す“憑依”。
これは僕と雪燈との精神の繋がりを残した副産物らしい。
先程、説明した様に本来、人と霊とは相容れないもので対消滅を起こしてしまうものだ。
ただ希に人側か、霊側どちらかにその素養があるか、2人の間の魂のレベル――――意識する、認識することができないほどに深い位置にある精神領域において歪みなく重なるとき、両方の意思をもって、消滅することなくこの“世界”に定着できる。
領域と領域の間。
本来、それが重なり合う所が境界となり、世界に歪みを生み出す。それは反発力となり、正そうという外力が生まれるらしいのだが、それを誤認させるのだ。
全て久世さんからの請負だけど、単純に言ってしまえば、本来有り得ない事象を無理矢理に有り得ることにしてしまうのだ――――当然、そのための負荷はとてつもないものになる。それに対して、耐性があるものだけが使用することができる。

言わば裏技。
「最近は慣れてきたけど、やっぱ霊を自分の中に取り込むのは負担が大きいな」
「昨晩と今日と立て続けの憑依だ。あまり長い時間この状態はお前の体に毒だぞ」
裏技だからこそ、そのための制約や枷は大きい。僕らの場合、彼女に素養があったことと残された繋がりがあるからこそできるのだ。
つまりは僕はただの受け皿。
仕様がないじゃないか、僕はただ霊感が多少あるだけの平凡な高校生だったのだから。
そのため、この状態のままいられるのは今の所一五分が限界――――それ以上定着していれば、目の前の彼女の様にどちらか、あるいは両方の精神が壊れてしまうことになる。
まぁ、そうなる前に無理矢理定着が剥がれちゃうんだけど。今回はちょっと無理してるし、五分がいいところかな。
「んじゃあ、時間もないことだし、さっさと祓うとしますか！」
「あぁ！」
威勢の良い掛け声とともに光りだす自身の左腕――――彼女の霊としての力を僕の体をパイプとして、世界に生み出す。
それは世界の理を歪めるモノを祓う力。久世さん曰く、彼女には生前、除霊の力があったらしい。
それでも僕等自身その抜け道を通って、手に入れてる力なのは、皮肉で矛盾で笑えてくる。
久世さんが言うには“世界”というのは、気分屋で自分勝手で我侭――――子供の様なものだそうだ。まったく、罰当たりな捉え方だが、なるほど的は得てると思える。
「さっさと彼女から離れろ！」
少女の下へと辿り着くと片膝をつき、彼女の額へと左手を当てる。
「――――っ！うぅ！うあぁ！！！！」

咆哮とともに彼女の全身を左手から額へと伝わった光が包み込む。多少の腕への痛みが生じるが、構わず続ける。
果たして彼女の体から霊症が消え、霊が無事に彼女から消え去ったのがわかった。
「除霊完了！」
「…案外呆気なかったな」
少女を救えたことに自然と右腕を上げ、ガッツポーズをとってしまう。しかし、中の彼女はいまいち納得のいかない雰囲気である。
「なんだよ」
「いや、あそこまで永い時、悪霊と存在を同じくしていたのだから、祓うのに相当力を使うと思ったんだが――まぁ、何事も無事に済むのはいいことだ。悪い、考えすぎだな」
「そうそう。うまくいったんだから――ところで雪燈さん？」
「なんだ？」
「僕、そろそろ限界だわ…」
「お、おい！椎名！」
急激な眠気と足への力の伝達が遮断され、ガクンと膝から崩れ落ちる。それとともに、僕の体から彼女の意識が離れたのがわかる。そのまま地面に大の字になる形で寝そべってしまった。
「だめだぁ…これぽっちも動かないや」
「寝るな！椎名！彼女はどうするんだ！霊を祓ったと言ってもすぐに病院なりどこかでゆっくりと休ませなければまずいんだぞ！」
「僕もまずいかも…」
「しっかりしろ！おい！」
「浩市を呼んで来てくれ――」
最後にそう言って、僕は深い闇の中に落ちていった。

2章（3）　僕と妹

二章――？

花畑の中を歩く歩く。隣には何がそんなに楽しいのか、笑顔の少女が着いてくる。

「ねぇ、しーちゃん」

「何？」

「楽しいね！」

「そうかな――――こんなの唯の散歩じゃないか」

「わかってないなぁー。唯の散歩だから楽しいんだよ！こうやってしーちゃんと普通に当たり前に、散歩できるのが嬉しいんだよ」

「そうゆうもんかなー」

あぁ、これは夢だ。

よく夢を見ながら、余りにも現実からかけ離れていると、それが夢であると夢の中にいながら認識できることがあるが、正しくそれだった。なぜなら普通で当たり前だったこの日々は、もう戻らないのだから。

この記憶は夢の中だけだ。何度も見て、何回後悔したのか忘れてしまったけど、目を覚ませばまた俺は少女のことを忘れるのだろう。　何度も。何度も。

立ち止まり、隣を歩く彼女を見る。

「俺、もう行かなくちゃ」

「――――うん。またお別れだね」

「一日でも早く君を思い出すよ。この記憶とともに。だから今はバイバイ」

その言葉とともに彼女と周りの風景が薄れていき、急激に現実へと意識が引っ張られていくのがわかる。

「ん、あれ？ここは――――」
目を開けるとよく見慣れた天井だった。てか、僕の部屋だ。
「どうして――――あぁ、あそこでぶっ倒れて、雪燈に浩市を呼ぶように頼んだのか」
次第に脳の覚醒と共に記憶が甦ってくる。
外の様子を見るからに日が昇っていることから、どうやら次の日だと予想できる。
「自分の部屋でこうやって寝てるってことは浩市がうまくやってくれたのか。学校で会ったらお礼言わなきゃな――――あ！学校！つーか今何時だ！？」
寝ぼけていた頭が急激に醒める。慌ててベッドから飛び起きようとしたことで体の異変に初めて気付く。
「あれ？動かない？なんで――――」
指の一本すら動かないこの状況に慌てるも、唯一動く目を自分の腹に向けると、そこにはスヤスヤと気持ちよさそうに雪燈が寝ていた。
――――金縛りかよ！
「あ、あのー雪燈さん？いきなり金縛りというのは冗談きついですよ」
「うふふー。お腹一杯だよー」
寝ぼけてらっしゃる！
「僕は昨日の昼からなんも食べてないから腹ペコだよ！ぬぉー！いい加減寝ぼけてないで起きろよ！そしてどいてくれ！いや、どいてください！」
「やだやだー」
まるで子供がごねる様にイヤイヤと顔を僕の胸へと擦り付けてきた。と言うか押し付けてきたと言った方がいいかもしれない。それとともにはだけた服から、彼女の胸元が嫌がらせかの様に主張してきた。
「ば、ばか！す、擦り寄ってくるな！いくら零体だからといっても

この状況は健全な高校生には毒だぞ！だぁー、くそ！動けねー！」
「おにーちゃん？」
「伊織！？」
　この状況から抜け出そうと必死の叫びをあげたところで、起こしに来てくれたのだろう一つ下の妹の伊織（いおり）が部屋に入ってきた。朝からベッドの上で喚き散らす兄の姿を見た妹は呆然としている――――僕もこんな兄貴いたらヤダ。
「やっと起きたと思ったら、大きい声上げていきなりどうしたの？」
「い、いやなんでもなくはないけど、なんでもない！」
「ほへ？よくわかんないけど起きたんなら早く下降りてお昼御飯作ってよー」
「あぁ、ちょっと待ってろこの状況を打破したら直ぐに下に――――昼？昼御飯ってどういうことだよ。それに僕はこれから学校に行かなきゃいけないし…」
「もー。まだ寝惚けてるの？もうとっくに１２時回ってるよ！それに今日は休日で学校はお休みだよ」
「は？」
　ちょっと待て！なんか僕の認識と違うぞ。倒れたのは木曜日の夜――――ということは今は金曜日じゃないのか？
「えーと、ちなみに今日何曜日？」
「今日は土曜日だけど――――ほんとに大丈夫？寝すぎて頭呆けちゃった？」
「ということは僕は２日間寝続けてたのか！？」
「そうだよー。もう！浩市さんが意識無くしたお兄ちゃん運んできてくれた時は、ビックリしたんだから！まったく、浩市さんと組手やって、脳震盪になったって聞いたよ――――喧嘩の弱いお兄ちゃんが全国大会出場経験のある人に勝てるわけないじゃん。浩市さんが寝かしとけばいずれ目を覚ますって言ってたから、寝かしといたけど中々起きないから心配したんだよ！」
　理由は兎も角、浩市がうまく言い訳してくれたのか。しかし、丸

二日寝てたというのは正直驚いたな――――それは腹も減るってもんだ。
「ごめん。心配させたみたいだな。うん、もう大丈夫だよ。あいつに思いっきり殴られたとこがまだ少し痛むけど」
「ならいいけど…」
安心させるように言葉をかけても、伊織の表情は暗い――――本当に心配してくれてたんだな。
「ほんと大丈夫だって。よし！今日の昼はお前の好きなオムライスとシーザーサラダを作ってやるよ！」
「ほんとに！」
「あぁ、だから用意したら下降りるから、先にリビングで待っててくれよ。」
「わかった！！」
急にパーッと暗い表情が明るくなり、元気に部屋から出ていき、外から微かに聞こえるトタトタという階段を下りる軽快なリズムを聞きながら、単純な奴と自然に笑みが零れる。
妹の反応からわかるように彼女には霊感の素養はない。だから金縛りから抜け出そうと必死になっている兄を見ても、ただの奇行としか思ってないだろう――――あれ？なんか自分で言ってて泣きそうだ。
そもそも椎名家で霊感を持っているのが僕だけしかいないというのが救われないよな。
親父もお袋も病院で寝ている僕の姿を見ても僕の心配だけで、それだけだったしな。
隣には雪燈が立っていたのだが。
伊織に霊感があって、雪燈のことも見えるんだったら、今の僕のこの状況もなんらかの進展があったのに――――僕と彼女が幼少のころに出会っているのであれば、生まれた時から一緒に住んでいる妹が知らないことはないだろう。妹に僕と彼女のことを聞けば一発なのだから。

まぁ、全ては無いものねだりか。
「さて、僕も早く下に降りな――」
「むぅー。騒がしくて寝てらんないよー」
「おい」
「あ！良平君起きたんですか？お早うございます」
胸元から聞こえた能天気な声に自然と声が厳しいものとなるが、そんなの気にならないマイペースな挨拶が返ってきた。
「お早うじゃねーよ！起きたんなら早くどいてくれ！お前が上に乗ってるせいで金縛りが治らないんだよ！」
「へ？――あ！ごめんなさい！」
現在の二人の体勢及び状況を理解すると慌てて、僕から離れる。すると今まで指一本動かせる気がしなかった体が嘘みたいに軽くなった。
「ふー。やっと動く」
やれやれ。と体を起こし、固まった体をほぐす様に、ゆっくりとストレッチをする。
「あ、あのー体はもう大丈夫なの？」
「ん？あぁ、寝すぎたせいかちょっと体が鈍ってる感じがするけど、概ね問題ないかな」
「よかったぁー」
「お前にも心配かけたみたいだな」
「ううん。私の方こそ連日の憑依で体の限界がきてたのわかってあげられなくて、ごめんなさい」
まぁ、どっちももう一人のお前なんだけどな。
「ぶっ倒れたのは自己責任だよ。それよりなんで朝から僕の上に寝てたんだよ」
「昨日まで心配で傍にずっといたんだけど、疲れちゃって、昨日の夜そのまま寝ちゃったんだ。ごめんなさい」
ん？昨日の夜から？なんか引っかかるけどまぁいいか。
「とりあえず事後処理はなんとかなったんだろ？」

「う、うん。あの後急いで浩市君の気配を探って、駅前の商店街を歩いているところを呼び止めて、事情を説明して来てもらったの。そのあとは浩市君が病院に連絡して、救急車が来る前に良平君を背負って家まで連れ帰ってくれたの」
「んで、伊織にウソの説明をして、今に至ると」
「うん」
「そっか。明後日学校で会ったらお礼言わなきゃな。まぁ、彼女も無事だろうし依頼完了ってところだな」
「そうだね」
「んじゃあ、記憶補完したところで――――飯にしよう」
それからリビングに降りていき、急いで妹の好物で固めた“ご機嫌取り”の昼飯を作り、二人で少し遅い昼御飯を食べる。
土曜の昼間という時間帯に、家にいるのが僕と妹だけという事実からわかるように、現在この家の住人は僕と妹の2人だけだ。まぁ、正確には雪燈も入れれば3人だけど。
別に家の不幸とかではなく両親二人とも健在だ。ただ、今年の4月に僕が高校に上がるとともに父親の急な出張で海外に行かなければいけなくなり、そこに母親も付いて行ったというわけだ。まだ成人してない子供2人を置いてというのは正直どうかと思うが――――それに片一方は卒業式の夜に倒れて入院までしたのにだ。
まぁ、僕自身雪燈のこととかあって一杯一杯になっていたし、幼少の記憶がないことを隠すのは、それなりに両親に対して引け目を感じていたし、いいタイミングだったとも思える。
「どうも僕は独りだな」
「ん？なんか言った、お兄ちゃん？」
「い、いやなんでもない！そ、それより僕は今日この後出かけちゃうけど、伊織はどうする？そんなに遅くはならないとは思うけどさ」
どうやら考え事をしていたら、うっかり声に出してしまったらしい。慌てて話題を変えるために今日の予定について妹に話をふる。
「んー。今日の予定は特になんもないから家で宿題やって、ごろご

ろしてーみたいな感じかな。お兄ちゃんはどこ行くの？」
「んじゃあ、留守番頼むな。僕はまぁ、ちょっと野暮用かな」
「ふーん。あ、にしし。お兄ちゃん、彼女とか？」
「違うよ！それに彼女なんかできたことすらないよ――――ほしいけど」
語尾に本音が出てしまう。
「へー、いないんだ？ほー」
「なんだよ」
「いやいや、なんでもないですよ。あ、明日は私の友達が家に遊びに来るから、お兄ちゃん家にいてよ」
「ん？そこはだから家にいないでよ。みたいなのが普通なんじゃないのか？一般的な兄妹の会話としては」
「いいの！それにタダで若い子と話せるんだよー。役得じゃん！」
「若い子って、お前はどっかのオヤジか！それに僕と一つしか年齢変わらないじゃないか」
「細かいことは気にすんなって！中学生っていうフレーズがいいんじゃん！で、どうなの？」
お兄ちゃんはお前の将来が心配だよ。
「わかったよ。まぁ、明日は部屋でゆっくりしてるよ。んじゃあ、用意したら僕は出かけるからな」
「ほーい！」
ご馳走様といつもの様に2人だけの食事を終え、流しにお皿を片付け自分の部屋へと戻る。途中、後ろで雫が電話をしながら「裏は取れました。オーバー？」とブツブツなんか話していたがそのまま〇〇と共に部屋に入る。
「さて、どうするかな。」
「ねぇ、野暮用ってなんですか？」
「ん？あぁ、久世さんに事後報告だよ。次こそはちゃんと依頼料もらわないとな。それにちゃんと昨日の少女が無事なのか確認しときたいし、病院にも行かなきゃな」

「そうだよね、ちょっと心配かも」
「それじゃあ、ちょっと出かける準備するから――――」
２日間寝てたせいか、はたまた金縛りにあったせいか体が汗で気持ち悪いんだよな。
着替えの服を取り部屋を出て、下に降りようとしたところで気配から後ろを振り向くとニコニコした笑顔で雪燈が後ろから付いてきていた。
「なんでついてくんだよ！」
「え？だめですか？」
なんで然も当たり前みたいな顔してんの！
「シャワー浴びてくるから、ここに居てくれってことだよ！」
「嫌だなー。そんな恥ずかしがらなくてもいいですよ。私は気にしませんよ」
「僕は気にするんだ！いいな！部屋から出るなよ！」
「もう！それくらい一緒に生活してるんだし――――」
「返事！」
「はーい」
まったく、僕の安楽の場所はこの世界にはないのか！
僕と彼女の関係は憑かれているといっても、従来の人と霊の関係みたく常に背中にいるわけではなく、もっと自由度が高く、お互いの意思が繋がる場所であれば離れていることはできるのだ――――久世さん曰く“精神の領域と領域が重なる”位置とのことらしいが、どこまで離れられるのかなどいまいち意味がわからんけど。つーか、あの人の話は今一分かり難いところが在るんだよな。
まぁ、それで今回も浩市を呼ぶのに彼女が駅前まで探しに行けたというわけだ。
だから本来、風呂やトイレ――――まぁ、あとは男子特有の問題など一人になりたければなれるのだが、なぜか常に僕から離れようとしないこの状況は正直言って疲れる。

2章（4）　始まりの場所

二章――？

「あっちー」

昼過ぎまで寝ていたといってもまだ二時を少し回った程度で、六月の湿気交じりの茹だる様な天気は未だに猛威を振るっている。

「これじゃあ、シャワー浴びた意味がないよなー。まったくこれからもっと気温が上がると思うと憂鬱だよ」

「ほら！元気出して！」

動く屍の様にグダグダと歩いていると隣で涼しい顔して雪燈が死体に鞭を打つことを言ってくる。なにが嬉しいのかニコニコと笑顔でついてくる。

「お前はいいよなぁー。あれだろ、暑さも寒さも感じないんだろー。たくっ、人の気も知らないで無茶言うなよ。」

「うん。ごめん」

あれ？なんか、地雷踏んだか？

「なんだよ。急に大人しくなって」

「・・・うん。汗だくになるほど“暑い”って感覚も、肌が震えるほど“寒い”って感覚も普通の人には当たり前に感じられるものが、今の私には感じられないものなんだなって思って」

「わ、悪かったよ！今のは俺が悪かった！」

自分の失言に気づき、慌てて後ろを振り返ると、笑顔のままの彼女がそこにいた。

「あれ？――――お前！騙したな！」

「へへーん。騙される方が悪いんですよー」

「まったく、言っていい冗談と悪い冗談が――――」

「でも、嘘じゃないよ」

「うぐっ」

彼女の鋭い切り替えしに息が詰まる。

「ねぇ、手をつなごう」
「はい？」
「いいじゃん！手をつなごうよ。折角のお散歩だよ」
「散歩って言ったって、ただ病院を目指してるだけじゃないか」
そう。家を出る前に浩市に電話し、一昨日のお礼と少女の入院先について話をして、現在その少女が入院されているであろう病院に向かっているのだ。流石に少女の名前までは浩市も分からなかったらしいが、そこは雪燈に病院内を探してもらえば大丈夫だろう。なので別に散歩という訳ではないのである。
「わかってないなぁー、こうやって歩いてるだけで散歩になるの。それに、良平君と普通に当たり前に散歩できるのが嬉しいんだよ」
「え？」
「あれ？なになに照れてくれてるんですか？」
「違うよ！そういう態度とってると一生手なんて繋いでやんないぞ」
「あわわ、嘘です嘘です。ごめんなさい」
「まったく。ほら」
ぶっきら棒に左手を彼女へと差し出す。そこへ嬉しそうに彼女の右手が重なる。別に彼女の体温や手の感触が伝わってくる訳ではないが、“そこ”に彼女の手があると感じることはできる。
「あれれ。今日の良平君は機嫌が悪いようで、なんかいつもより優しいですね」
「バカ言ってると離すぞ」
「冗談です。冗談です」
別に優しさとかじゃない。一瞬悲しそうな彼女の顔が、見たこともない少女の顔と重なり、その顔を見たとき何故か懐かしさと少しの痛みを感じ、そうするのが――――いや、そうしなければならないと感じてしまったからだ。ただの気まぐれだ。
しかし、この格好、見えない人にはただの高校生が独り言喋りながら歩いてる図に見えるんだよなぁ。
唯の電波少年じゃねーか！誰にも会わないことを祈るぞ！

「はぁ。ほら行くぞ」
「はい！」
単純にも雪燈はぱーっと、満開の笑顔になる。
まったくこの笑顔を見れたからいいと自分に言い聞かせるとしよう。
それから歩くこと三十分――――人通りの多い道は避けながら歩いていたら、思いのほか時間がかかってしまったが、なんとかこの街で一番大きいであろう総合病院に辿り着いた。
「やっと着いたぁー」
「バスに乗れば早かったんじゃないですか？」
「なるべく経費削減で行かなきゃなんないんだよ！今月ほんとやばいんだからな――――まったくあの人たちも子供のこと忘れてんじゃないのか！」
最近、通帳への振り込みが無くなってきている両親への悪態が口につく。
「さてと。それはさておき一昨日の少女が無事だか探してきてくれよ。僕は待合室で少し休んでるからさ。流石に疲れた、もう限界です」
「まったく体力がないですね！それじゃあ、ちょっと探してきますね」
一般人はこれが普通なんだよ。と適当に返事をし、クーラーの効いた待合室のソファーへと体を預ける。
雪燈が帰ってくるまで何もやることがなくなった僕は、漠然と休日の病院の風景を流し見る。
「そういえば、小学校の時もあの冬の日も目を覚ましたらこの病院だったんだよな」
どちらも記憶を失って、目を開けるとこの病院の無機質な白い天井が一番最初に見た光景だった。中学三年の雪燈との出会いの時は幽霊自体に驚きはしたものの、記憶を失ったことに対してはこの天井を見たとき、またかと自分の不幸を呪えるほど落ち着いていたが、

小学五年の最初の記憶の喪失は酷いものだった。まぁ、一日分と生まれてからの１０年分という大きな違いはあったのだが。
何が何だかわからない――――わからないということがそれほど怖いものはこの世にないと初めて体験した日だった。
喚き散らし、泣き叫びながら自分という存在はなんなのか必死にその小さな両手で取り戻そうと考えに考えて、そして――――世界に絶望した。
それからは少しずつ家族を含めた“他人”から得た椎名良平という人物像を必死に演じ続けた。そして現在に至る。
もしかしたら今も演じ続けているのかもしれない。さらに言えばそれは本来の椎名良平とは違う役なのかもしれない。
「――――僕は大丈夫だ」
一言、自分に言い聞かせるように呟く。この場所は僕の原点というわけではないが、毎回来るたびに喪失感に襲われる。でも今は世界に対してただ絶望し、何もできなかった小学五年生の僕ではない。隙あらば世界に対して右ストレートを打ち込む気合いくらいはある。
「大丈夫だ――――」
瞳から零れる様に落ちた雫を拭き取ると共に僕は目を瞑った。
「良平君！」
「うわぁ！」
突然の大声で飛び起きる。どうやら彼女を待っている間にいつの間にか寝てしまったらしい――――丸二日間寝た人間の行動としては我ながらどうかと思うが、慌てて声のした方を振り向くと案の定、雪燈が膨れっ面でこちらを見ていた。
「もう！人に仕事押し付けといて、自分は呑気に昼寝ですか？というかどんだけ寝るんですか！」
「ご、ごめん。ちょっと考え事してたら、いつの間にか寝ちゃったらしい」
「あぁ、ここは私と良平君が出会った思い出の場所ですからね」
ぐるりと周りを懐かしそうな目で見渡す。

「思い出の場所かどうかは疑問だけど、まぁそんなようなことを思い出させられたよ。ところで、どうだった？」
「えぇ、首尾良く見つかりましたよ。まだ目を覚ましてないようでしたけど、お医者さんの話を盗み聞く限りでは問題ないようですよ」
「それは、良かった…。んじゃあ、今すぐに久世さんの所に向かおうか」
「ん？」
待合室に居る人達の刺すような視線に気づき、そこから先程の普通の音量で話していた自分に思い当たり、慌ててソファーから腰を浮かし、逃げる様に外へと向かう。
その際に待合室の時計を見ると四時を回ったことがわかる。どうやら一時間ほど寝てしまったらしい。
病院の外に出ると太陽はまだ健在で、多少気温は落ちたといっても、猛威を振るっていた。
「んー、このまますぐに事務所に行っていいんだけど、できれば実際に戦った方のお前を連れてった方が話も早いだろうし、ちょっとゆっくり行こうか」
「そうですね。今の私では客観的に見ていたにすぎないので、夜の私に切り替わってから久世さんの所に行った方がいいかもしれませんね」
それにこのまま行けばもう一人の雪燈さんに後でどんな目に会うかわからないしな。
「よし！そうと決まれば駅前でちょっと時間潰してから行きますか」
「了解です！」

2章（5）　報告ー1

二章――？

街が昼の顔から夜の顔へと変化した頃、通いなれた廃ビルへと辿り着く。その足取りは重たい。何故かと言うと――――

「さて、行きますかね」

「私はどうもアイツが好かんのでな、さっさと終わらして帰るぞ」

「はいはい。別に事後報告だけだし、すぐに終わるだろう」

駅前で時間を潰し、雪燈が入れ替わった所で事務所に向かいだしたのだが、その道なりで、散々久世さんへの愚痴を聞かされたからだ。

何故だかわからないけど、久世さんと夜の時の雪燈は仲が悪い。まぁ、一方的に雪燈のほうが嫌っているという表現が正しいのだけれども、今回みたいな時はやはり実際に戦った、今の時間の彼女でなければ意味がない。

階段を上り、錆びれたドアをノックも無しに開ける。

「やぁ、いらっしゃい。久しぶりだね」

いつもの様に毎度の如く、自称探偵久世暁良は椅子に深く身体を預け、煙草を口に咥えながら、第一印象としては最悪であろうにやけ面で僕を迎えた。

この人いつも僕が来る時は必ず事務所にいるよな。仕事してないんじゃないのか。

まぁ、この人の連絡先なんて知らないから、居てくれなきゃ困るのは僕なんだけどね。

「久しぶりって、一昨日会ったばかりじゃないですか」

「いやいや、男子三日会わざれば刮目して見よって言葉もあるじゃないか」

「だから、最後に会ったのは一昨日ですって。三日前じゃないでしょ！」

「あれ？そうだっけ？」
　まったくこの人との会話は本当に疲れるよ。
「まぁ、細かいことはいいじゃないか。それで今日はどうしたんだい？」
「この前の依頼の事後報告に来たんですよ」
「あぁ、君の母校の校長からの依頼だっけ？なんだ、もう解決したのかい？」
「えぇ、ちょうど一昨日ここを出た後、悪霊に憑かれた少女と偶然鉢合わせになったんですよ…なんだって、別に早く解決して悪いことはないでしょう？」
「それはそれは。本当に偶然なのかな。全く君は霊達から見たらご馳走にしか見えないんじゃないかい？」
「気味悪いこと言わないで―――」
「これは私のだ」
　僕の言葉を遮り、きっぱりとした口調で空気をぶった切った相手は、僕の隣でとても冷たい視線で久世さんのことを見ていた―――いや、これでもかってくらいに睨んでいた。
　だから何故にそんな喧嘩腰なんだよ！
「あ、あぁ。それは失言だったね。ごめんごめん。椎名君は雪燈ちゃんの物だったね」
「おい！僕の意見とかはないのか！というか人を物みたいに言うな！」
　いきなりの彼女の言葉に流石の久世さんも驚いたのか一瞬言葉に詰まるが、すぐに僕の人権を無視した発言をしだした。
「まったく。昼の雪燈はともかく今のお前は僕のことなんだと思ってるんだ。もう少し僕に優しさというものをだな―――」
「お前ごときにくれる優しさなど持ち合わせていないわ！」
　ぐっ！こいつやっぱ僕のこと嫌いなんじゃないのか。扱いが人以下な気がするぞ。
「やっぱり昼と夜とでギャップが激しすぎるぞ、お前！はぁー。も

う、いいや。二日間ぶっ倒れるは朝から金縛りに会うわ、最近の僕に対して世界は冷たいよ」
「金縛り？」
「あぁ、僕が意識を失って倒れてる間ずっと心配してくれて傍にいてくれたらしいんだけど、疲れちゃって、昨日の夜そのまま僕の上で寝ちゃったらしく、そのまま朝起きたら金縛りになってたんですよ」
　昼の方が僕に対して優しいよなーと一人感傷に耽っていると久世さんが急に笑い出した。
「どうしたんですか？」
「いやー。ごめん。でも、椎名君気づいてないの？」
「何を？」
「夜中に寝て朝起きたらその状態だったってことは今の雪燈ちゃんの人格で君の上に寝たってことになるのに。いやー、なんだよ雪燈ちゃんも可愛いとこあるじゃない」
「ちょっと待てくださいよ。つまりどうゆう――――」
「貴様！その口を閉じろ！二度と喋られない様にするぞ！」
「うわ、いきなりどうした！落ち着け雪燈！勝手に僕の身体を使うな！」
　久世さんの言葉に急に雪燈が慌てだし、勝手に僕に憑依し、久世さんに向かって襲い掛かった――――つーか、霊圧が一昨日の比じゃないぞ！雪燈のやつマジで久世さんを殺す気だ！
「だからー、昼の雪燈ちゃんも夜の雪燈ちゃんも同じ存在なんだよ。二重人格に近いのかな。だから、表面的な性格が異なっていたとしても根っ子の部分では同じなんだよ。ということは――――」
「うわぁあぁぁーー！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！」
　久世さんも器用に僕（彼女）の腕から右へ左へと逃げながら話を続ける。それとともに何故か雪燈の怒りもヒートアップし僕の身体を動かす速度を上げる。たまに久世さんの張る障壁とぶつかる感触

が僕の腕に伝わる。
や、やばい！僕の腕が壊れる！
「馬鹿！これ以上は僕の身体が限界だ！いったいなんなんだよ！さっきから意味わからないし、なんの嫌がらせだよ、これ！」
軋み出す身体に限界を感じ、投げやりに叫ぶ。すると嘘みたいにピタッと自分の身体が止まる。
「と、止まった」
そのまま床に座り込み、激しく乱れた息を整える。そして、周りを見ると僕から憑依を解いた雪燈と先ほどまで人間離れした動きを見せていた久世さんがこちらを見ていた。
どちらも呆れた視線で。
あれ？僕なんか間違ったこと言ったのか。
「はぁー。何というか———今、ちょっと雪燈ちゃんのこと同情しちゃったよ」
「それ以上何も言うな」
先ほどまで殺し合い———雪燈の一方的なものだったけど。を繰り広げていたというのに何故か久世さんが彼女のことを慰めだしていた。
まったくなんなんだ？

2章（6）　報告ー2

二章―？

なんとなく納得のいかない形ではあったが、雪燈と久世さんの乱闘が無事に終わったことで話を戻そうとしたのだが、もともと散らかっていた事務所はさらに荒れたい放題となり、いつもの様に毎度の如く僕が後片付けをさせられていた。

彼女は何がそんなに気に入らないのか、部屋の隅で未だに僕に冷たい視線を向けてくるし、久世さんは久世さんでにやけ面で自分の椅子に腰かけ、煙草を吸いながら、頑張れー。と適当なことを言ってくる。

あれ？なんで、毎度毎度僕が掃除しなきゃなんないんだ！散らかしたのは雪燈と久世さんだろ！…まぁ、体は僕のだったけど。

ある程度一段落し、古い食器棚から埃を被っていないカップを二つ見つけ、インスタントではあるが、僕と久世さんの分のコーヒーを淹れ、自分もソファーに座ることでやっと一息入れる。

雪燈も多少機嫌が直ったのか僕の隣に座る。

「じゃあ、とりあえず話を戻そうか」

「変な方向に持ってったのは自分っていう自覚はあるんですか？」

「まぁー、いいじゃない。で、無事に除霊して解決したんだっけ」

「それは間違いないと思います」

「私の目からもあれは完全に祓うことができたと思う」

二人して同意する。

「ふむ。まぁ、無事に何事もなく解決することはいいことだね。とりあえず、お疲れ様とだけ言っとこうか」

表現しづらいけど、なんかいつもの久世さんらしくない話し方だな。

「それで、報酬はいつ振り込まれるんですか？」

「そうそう。報酬ね、報酬。大丈夫、振り込まれたら今度はすぐに

君に連絡するよ」
「本当ですか？」
前回もこの人の口車に乗って、タダ働きさせられた記憶は今も新しい。
いっそのこと彼の住まいまで乗り込んでもいいのだが、この寂れた事務所以外に彼との接点がないのも事実だ。
「なんだよ。僕のことそんなに信用できないのかい？」
「信用できないから、疑ってんですよ！」
久世さんは困ったなぁと頭を掻きながら口元に持っていった煙草に火をつける。
「それじゃあ、今日僕の方から連絡を入れとくから、明日は日曜で学校はお休みだろうし、明後日学校が終わったら依頼人のところに君が直接話をつけてくるというのはどうだい？依頼人は君の中学時代の校長先生なのだし、知らない仲ではないだろう？うん、我ながらなかなか良い考えだと思うけどね」
「それはいいですけど…」
校長かぁ、在学時代はそんなに会話した記憶がないし、生徒にとってはあまり親しみやすい存在ってわけじゃないんだよなぁ。
「まぁ、それしか良い案がでないでしょうし、わかりました」
よし！決まりだね。と確認をとると椅子から立ち上がり、依頼人の情報が載っているのであろうファイルを本棚から引っ張り出す。
それじゃあ、僕はそろそろ家に帰って夕飯の支度でもしようかなと考え、残りのコーヒーを飲もうとカップを持ち上げたところで隣から厳しい声が上がる。
「話は終わったのだろう？ならばこんなところさっさと出るぞ」
こいつやっぱ機嫌直ってねぇ！
久世さんもファイルを開く手を止めこちらを苦笑しながら見る。
「あらら。嫌われてるなぁー。そんなにイライラしていると折角の美人な顔が台無しだよ。それに、僕は君等のこと大好きなのになぁー」

「男に言われても嬉しいセリフじゃないですよ、それ」
というか気持ち悪いわ！
「ふん！貴様もそうだが、あの黒い猫も私はどうも気に入らないんでね。あやつが戻ってくる前にさっさと帰りたいのだ」
そういえば、今日も黒猫さんいないなぁ。やっぱ僕、彼女に嫌われてるのかなー。僕自身は猫とか動物は全般好きなのに――と他愛無いことをふと考えていると、お怒りの声がまた上がる。
「こら！このグズ！ノロマ！なにをちんたらしている。早く行くぞ！」
「わかったよ！それじゃあ、今度は依頼料貰ったら来ますよ」
慌てて返事し、久世さんに別れの言葉を告げ、出口へと急ぐ。
「りょうかーい。まぁ、君等の関係みたいに喧嘩するほど仲が良いと言うし、雪燈ちゃんと黒猫ちゃんもみんな仲良くといきたいところだね」
じゃあね。と最後までニヤケ面のまま、僕等に手を振る久世さんを背に、機嫌悪く先に歩く彼女を宥めながらドアを閉める。
階段を下り、道に出ることで人混みに入り、自然と小声で雪燈に話しかける。
「なぁ、何をそんなにイライラしてるんだよ。あんな人だけど流石にあの人に失礼だろ」
「知るか」
素気なく応えを返すとこちらを振り向くことなく、どんどん先へと進んでしまう。
ほんとに機嫌悪いなぁ。僕なんかしたかな。
「なぁ、待ってて」
「お前が歩くのが遅いだけだ、ノロマ」
取り付く暇のない返答に、まったく。と苦笑してしまう。
夜の彼女はほんと口は悪いし、すぐに機嫌悪くなるし、こっちは大変だよ。昼の雪燈は逆に素直で優しいし、少しは見習ってもらいたいところだよ。まぁ、それでも今のこいつはやっぱ頼りになる

し、昼の場合はちょっと天然だから疲れるし、それぞれ長所と短所はあるんだけどな。
足して二で割ればちょうどいいのかな。もともと同じ存在ってことは本当の雪燈は意外と僕と合ってるかもしれないな…。
待てよ。
彼女の後をついていきながら、つらつらと下らないことを考えていると自分の思考の中に違和感を感じる。
あれ？そういえば久世さんも言ってたけど、昼と夜は“同じ存在”で根っ子が一緒ならば昼のあいつが喜ぶようなことを言えば今のあいつも機嫌が直ったりするのか？
「まさかねー」
「どうした？」
流石に荒唐無稽な自分の結論に否定の言葉がつい口に出てしまう。
「いや、ご機嫌取りってわけじゃないけど、今日は一緒に寝ようかって思ったんだけど、雪燈さんがそんなんで喜ぶわけないし…」
あはは。と誤魔化すように苦笑する。
「まったく、お前はいきなり何を言い出すんだ！」
「ですよねー。いや、ごめん。今の無し無し。悪いけど、忘れてくれ」
「ちょっと待て」
「ん？」
こちらを振り向かず、彼女が立ち止まる。
「べ、別に今のを無しにしろって言ったわけじゃない。ただ、いきなり何を言うんだと言っただけだ」
「へ？」
「だ、だから！お前がどうしても私と寝たいというなら、仕様がないが私とお前は対等でありながら主従関係でもあるのだし、その望みを叶えてやるために私が我慢すればいいだけだしな。」
あれ？
「雪燈さん？」

「そ、そうだ。だから、私は別に構わんぞ。い、嫌なんだがな！本当は嫌なんだぞ！まぁ、お前がどうしてもと言うから仕様がなくな！いやー、私は宿主の望みを叶えるためとはいえ、なんて寛大なんだろう」
「う、うん」
あれ？なにこれ？
もしかして本当に機嫌直った？つーか、もしかしなくてもデレたってやつですか？
流石にテンプレすぎるだろ。

良平が自分に憑りついた幽霊との付き合い方に光が見えたような気がしている頃、その状況を事務所の窓から久世暁良は眺めていた。
「いやー、やっぱり仲がいいね。あの二人は。表層上でも、もっと深い領域においてもね。――ねぇ、黒猫ちゃん」
独り言であるかのように呟いた言葉はいつのまに部屋に戻ったのか一匹の黒猫に向けられた。
「あらら。やっぱり、お見通しなんだ。うん、今回はちょっと椎名君に意地悪しちゃったかな。だって、そっちの方が断然面白そうじゃないか」
やはり独り言ではないかと思える独白は続けられる。
「そうなんだよ。あー、楽しみだなぁ。次にここに来るときはどんな顔して来るのかな――流石に嫌われないかな、僕」
窓から目線を外し、いつもの自分の椅子にもたれ掛り、新しい煙草に火を点ける。
「ふー。そういえば、一昨日、昨日の二匹と彼等の以外で残り≪・≫何匹だったっけ？ふーん。じゃあ、あと一匹はこちらで始末しちゃおうか。もちろん手伝ってくれるよね？」
にゃー。と一声鳴き、定位置である本棚の上から飛び降り、彼の肩の上に器用に乗る。

「さてさて。僕は僕で役割をしっかりとこなしますか。最近、動いてないし、準備運動にはもってこいだしね」
立ち上がり、もう一度窓からビルの前の道を覗く。今はもう視界に入らず、とっくに駅の方へ行ってしまったであろう二人を思い出し、その口元は不気味に上がる。
そして、パタン。とドアが閉まり部屋から人はまたいなくなった。

3章（1）　休日ー1

三章――？

携帯のアラームの音が聞こえ、僕は目を開ける。寝惚けながらも音楽を止めようと携帯に手を伸ばそうとした所で動きを止める。

――――というか動けなかった。

「さて、確かに今回は昨日と違って僕から言い出したことだし、仕様がないんだけど…やっぱ、朝から金縛りは正直きついわ！」

自分の置かれている立場をはっきりと認識したことで目が覚める。目線だけで隣を見るととても幸せそうな寝顔をした雪燈が寝ていた。

つーか、顔近っ！！

「ほ、ほら起きろよ。朝だぞ。早く起きてこの状況をどうにかしてくれ」

「お腹一杯だー」

「…なんでいつも飯食ってる夢なんだよ。」

まったく。と苦笑してしまう。

普段、そんなに良く見ないからあれだけど、こうやって改めて見るとやっぱこいつ綺麗な顔してるよなー。まぁ、性格さえよければ生きてりゃ、モデルとかになれたんじゃないのか。

『生きてたら』。

「はぁ。馬鹿なこと考えるなよ」

自分で想像したことを振り切るように呟く。

彼女の寝顔を見ながら物思いに耽っていると、視界の隅に光るものが入る。なんだ？と思い彼女の口元辺りへと視線を動かす。

それは彼女の口元から伸び、ベッドの上をに広がり、僕の顔のすぐ近くまで来ていた。

「うわっ！よだれ？ヨダレ！？涎！！」

慌てて頭を動かそうにも動かない。

ん？この場合、こいつの涎って僕に直接的な被害あるのか？そう

いえば今まで考えてこなかったけど、直接的な干渉で言えば、こいつと僕ってどのレベルまで存在するんだ？
「って、暢気に考えてる場合じゃない！例え直接的に僕に被害がないとしても、この状況はなんか僕の小さなプライドが許さない！雪燈、頼むから起きてくれ！」
案外とても重要なことの様な気がするが、取り敢えず目先の問題を解決することを優先し、僕は思考することを放棄し叫んだ。
「うぅん。ほへ？あぁ、良平君お早うございます」
一度、子供のように目蓋を擦り、目を開けすぐ隣にある僕の顔を見て、満面の笑顔で朝の挨拶をしてくる。もちろん、今も彼女の口元からは涎が絶賛大放出中だ。
「あぁ、お早う。それじゃあ、取り敢えずヨダレ拭け、そして離れろ」
一瞬、彼女の笑顔を真近に見て、思考が止まりかけるが踏み止まり、切り捨てるように言葉を続ける――――別に照れ隠しとかではない。
その後、彼女の起床と共に僕もベッドから起き、寝巻きからラフな部屋着へと着替え、リビングへと降りる。カーテンを開け、朝の日差しを室内へと招き入れる。
「伊織はもう起きているのか」
いつもは僕の方が起きるのは早いのだが、テーブルの上にある飲みかけのコップと、流しに溜まった食器類から彼女がもう起きていることがわかる。どうやら今朝は雪燈のおかげで少し遅い起床になったらしい。
自分も冷蔵庫から飲み物を取り出し、コップに注ぎ口元へと運ぶ。
「さて、折角の休日だし、お客さんも来ることだし、今日は家の大掃除と洒落込みますか」
飲み終えた空のコップを流しに置き、一度体を伸ばし、今日の予定を考える。
「まずは掃除機をかけて、窓も拭いて、風呂掃除とトイレ掃除もし

ときたいな…おっと、先に洗濯機を回しておかなきゃ」
「良平君って、基本的に家事好きだよね」
段取りを口にしていると呆れたような声で雪燈がつっこむ。
「別に好きでやってるわけじゃないよ。それに最初からやってた訳じゃないさ。どこかにいった馬鹿両親の不在中、妹はそーゆうの全くむいてなかったし、僕がやるしかなかったってだけだよ」
別に主夫になる気はさらさら無いし、やってる内にいつの間にか当たり前になってしまっただけだ。ちゃんと働いて家庭を支える大黒柱になることが僕の人生計画だ…といっても何に成りたいとかはまだ漠然としてるんだよなー。
久世探偵事務所で働く未来だけはあり得ないな。
ま、いっか。と思考を止め、大掃除を始めるため脱衣所に向かうと、ちょうど伊織が慌てて下に降りて来た。
「あ、おにーちゃん！今日、昼過ぎくらいに友達来るから宜しくね！それで、その前にその子と今から駅で待ち合わせしてて、ちょっと買い物してから、そのまま一緒に帰ってくるから！」
僕を見るなり、早口で捲くし立て、そのままの勢いで玄関に向かい、勢い良く外に飛び出して行った。
「はいはい。まったく忙しいこって。しかし、妹の友達が来るからって、僕が何かするわけじゃないし…。まぁ、おやつの一つくらいは作っといてやるか。何がいいかなぁー。久しぶりにクッキーでも焼いてみるか」
「本当に仕方なくやってんのかなぁー」
後ろからなんかつっこみが入ったような気がするが、気にしない気にしない。
その後、サクサクと掃除を進めていき（途中、暇すぎる！放置するな！構って！と雪燈の叫びを無視しつつ）一段落ついた所でキッチンに戻りクッキーの下拵えをしていると、玄関からただいまー。と妹の声が聞こえてきた。続いてトタトタと廊下の方から足音が聞こえ、リビングの扉を開け、妹が入ってきた。

「いやー、今日も外は暑いね！部屋の中は涼しくて極楽だよー」
帰ってくるなり騒がしい奴だな。
「お、お邪魔します」
部屋に入り、そのままドカッとソファーに飛び込んだ妹に呆れていると、入り口の方から小さな声がしたので、そちらを見ると伊織と同じくらい長い真っ黒な髪をツインテールにした背の小さな少女がリビングに恐る恐る入ってくる所だった。
この子が伊織の友達か。お転婆なあいつによくこんな大人しそうな子が友達になったな。まぁ、なんだ。兄として最初が肝心だよな、うん。
「いらっしゃい。暑い中良く来たね。まぁ、何も無いところだけど寛いでって」
変なところで兄として、年上としての威厳――――まぁ単純に良い格好を見せたいだけなんだけど。そんなもんを見せようと挨拶をすると、ソファーでだらしない格好をしてる妹を見ていた少女はびくっと反応し、こちらを見ると慌てて頭を下げる。
「お、お久しぶりです！」
「うわぁー、お兄ちゃんキャラ作ってる」
とりあえず、妹の妄言は置いといて、少女のその第一声に僕の取れたリアクションは極めて単純だった。
「へ？」
唯のアホ面を晒すだけだった。
最初の爽やかスマイルが台無しだ！
「ど、どこの女です！？」
何でお前も食い付く！ちょっと頭混乱しそうだから黙っててくれ！
「あれ？前にどっかであったっけ？」
「あ…すみません！いきなりそんなこと言われたらわからないですよね。それに私のことなんか覚えてないですよね」
「うわぁー、お兄ちゃんひっどーい」
一瞬泣きそうな顔になった彼女はもう一度頭を下げる。

ま、まずい！中学生を泣かしてしまう！思い出せ！妹の友達ということは僕が中学時代に会ったってことか？くそっ！こんな可愛い後輩と知り合っているのなら、この僕が忘れるわけないのに！記憶にないぞ！

「お兄ちゃん、卒業式のこと覚えてないの？」

「え？卒業式？」

「杏子ちゃんに第二ボタンあげたじゃん。本当に覚えてないの？」

「な、な、そんな簡単にボタンをあげたんですか！？」

あんなのただのボタンじゃん。

焦りながらも頭の中はフルスピードで回転する。

なるほど、覚えてないのも当たり前だ。思い出せないようになってるのだから。“あの日”にそんなことがあったのか…・。しかし、このままだと最悪、僕が記憶喪失であることがばれてしまう。

怪訝な顔をした妹と顔を真っ赤にして俯いてしまった少女を交互に見て、この状況をいかに切り抜けるか考える。

「あぁ、そうだそうだ。ごめん！その後みんなに揉みくちゃにされてボタンを全部捕られたり、色々とあったからちょっと忘れてたけど、ちゃんと思い出したよ。うん。久しぶり、杏子ちゃん」

決まった。我ながら完璧な演技だ、うん。

記憶を無くし雪燈との協同生活が始まったあと、浩市に問いただされ、其の時に卒業式のあの日のことはあいつから聞いていたんだけど――あの野郎！肝心なとこだけ伝えてねーぞ！絶対に故意的に話さなかったな！

とまたまた意味の無い思考に陥っていると今度は彼女の方が呆けた顔で此方を見た。

「え？」

あれ？なんか可笑しかったか？ま、まさかあの野郎、全くデタラメなことを僕に話したのか！？

「うわぁ、卒業式の時は五和さんって上の名前で、しかもさん付けで呼んでたのに、なんか慣れ慣れしー」

そ、そういうことか。確かに普通に考えたら、僕の性格で初めて話すであろう女の子に対して、いきなり下の名前で呼ぶはずがないな。

まぁ、これで彼女のフルネームがわかったことだし、結果オーライってことでいいか。

「あ、ごめん！つい、下の名前で呼んじゃった。嫌だよな、そんなに知らない男から下の名前で呼ばれるの」

「い、嫌じゃないです！そっちでお願いします！」

俯き加減だった顔を凄い勢いでこちらに向ける。

この子大きな声出せるじゃん。

「そ、そっか。じゃあ、今度こそ久しぶり杏子ちゃん」

「お、お久しぶりです」

うまく話が纏まったと思い、再度彼女に再会の言葉を掛けるが、またまた俯き小さな声の返事となってしまった。

うーん。最近の中学生と話すのはなんとも難しいなぁ。と自分も去年まで中学生だったという事実を棚に上げて物思いに耽っていると、彼女の口元から呪文のようにブツブツと言葉が紡ぎ出されているのが微かに聞こえてくる。

な、なんだ？

さらに耳を澄ませる。

「杏子ちゃん、杏子ちゃん。うふふふ。杏子ちゃん、杏子ちゃん…」

軽くトリップしている少女の隣で妹が「おーい。もしもーし。戻ってこーい」と呼び掛けている。

そ、そんなに気に入ったのかなぁ…別に伊織も同じ呼び方なのに――ま、いっか。

でもなんかどことなく雪燈に雰囲気が似ているなぁ…。もちろん昼間のだけど。

「りょ、良平君！この子敵だよ！敵！」

二人の光景を見ながら、不意にそんなことを思っていると当の本人が上擦った声で喚き出した。

「なわけ無いだろ。どこからも霊的なものは感じないぞ」
「そうじゃなくて！うー、そーゆうのじゃないんだけど…。と、とにかく敵なんだよ！私の！だからこの子には気をつけて！」
はい？
こんな良い子そうな子を捕まえて“敵”なんて呼ぶとか、全く意味がわからんわ。
取り敢えず、浩市の馬鹿を殴ることだけは決まったけどね。

3章（1）　休日ー1（後書き）

さてさて、連休も終わりですが休みもなくぶっ続けで馬車馬の如く、働かされたので、少し旅にでようと思います。なので、投稿が少しあくかもしれません。宜しくお願いします。

3章（2）　休日―2

三章―？

その後なんだかんだで、挨拶を済ませて伊織と杏子ちゃんは自分の部屋へと戻っていった。

そして、僕はと言うと…

「―――で、頼まれたからあげたと」

「い、いやだからですね、雪燈さん。あの日の事はご存じかと思いますが、僕は記憶ないんですよ」

「で？なんだと言うのです？」

「だ、だからなんも覚えてないんですよ」

「それでもあげたのは良平君ですよね？」

「…はい。たぶん」

何故かキッチンで正座をさせられていた。

なんで、たかがボタン一つで僕はここまで怒られなきゃなんないんだ。というか、下手したら夜の時より恐いぞ。

自分に記憶が無いのが更に性質が悪い。

やってないことで怒られてるような理不尽な状況にやり場のない感情が込み上げる。

しかし、彼女の説教は未だに終わる気配を見せない。

あ、そういえば薄力粉切らしてたんだっけ。買いにいかなきゃだし、ばれない様に…。

「いいですか、良平君。制服の第二ボタンというのはその人の心臓に一番近い位置にあることから、その人自身と言える代物なのです。だからこそ、好きな人の第二ボタンというのは乙女にとって―――って、どこいくのですか！！」

「ちょっとクッキーの材料を買いに行ってくるよ！とりあえず、反省してるから許して！」

彼女の隙をついて玄関に向かって走りきる。急いで靴を履き外に

飛び出した。
　後ろからまだぎゃーぎゃーと非難の声が聞こえてきたが、あんなの聞いていたら一日が終わってしまう。
　というかあいつ第二ボタンとかそういうの知ってんだな。

「まったく、話の途中で逃げ出すなんて酷いですよ」
「悪かったよ。もういい加減機嫌直せよ」
　買い物を終え、家に戻りクッキー作りに専念している隣で未だにご機嫌斜めな雪燈を宥める。
　話というか、唯の説教だったろ。
「べ、別に怒ってるわけじゃないんですよ。そ、そのあの子のことどう思っているのが気になるだけです
「ん？杏子ちゃんのこと？別に。唯の妹の友達じゃないか。まぁ、いい子だとは思うよ」
「そ、そう」
　お、クッキーが焼けた。
　オーブンからクッキーを取り出し、軽くグラニュー糖を塗す。
「よし完成！我ながら中々の出来栄えだな。まったく、そんなにボタンが欲しかったんなら、高校の制服のボタンはお前にやるよ」
「ほ、ほんと！？絶対だよ！」
「あぁ、ほんとほんと。じゃあ、このクッキーを届けに行っちゃおうぜ」
「はい！」
　まったく忙しい奴だよなー。ボタン一つで落ち込んだり、こんなに喜んだり———まぁ、高校の卒業式まであと二年以上。それまでこの関係が続いているのかは僕にもわからないんだけどな。
　つらつらと妄想しながら階段を上り、妹の部屋の前に着く。
「クッキー焼いたから、持ってきたけど開けるぞー」
「ほーい。どうぞー」
　軽くドアをノックし、応えと共に開ける。

――そういえば、妹の部屋に入るのも久しぶりだな。
部屋の中はパステルカラーで統一され、相変わらず、ぬいぐるみが其処彼処に散乱している。その中で唯一異彩を放っているのは彼女の趣味である写真が壁の一角を占めていることだ。
「相変わらず、なんというかカオスな部屋だよな。統一されてそうであって、実はされてないというか…」
「私の部屋のことはいいから！ほら、クッキー持ってきてくれたんでしょ」
「あぁ、ほら」
部屋の真ん中に置かれているテーブルにお皿を置く。
「あ、ありがとうございます。これ、良平さんが作ったんですか？」
「そうそう。見かけによらず、お兄ちゃんって家事系のスキル高いんだよねー」
誰のせいでそうなったと思うんだ。
「あ、美味しい」
「そう。そりゃあ、よかった。まだ下にあるから、足りなかったら持ってくるよ」
バクバク食べてる妹とは違って、やっぱ、いい子だなぁー。と小さな口でパクリと食べる少女を見て、自然に笑顔になっていると視界の隅にテーブルの上に乗っている写真が入り込んでくる。
「ん？なんの写真見てるんだ？」
「にしし。ちょうど今お兄ちゃんの卒業式の写真見てたとこなんだよ。お兄ちゃんも見る？」
卒業式だって！？
「見る！見せてくれ！」
「な、なんだか食付きいいね。やっぱ自分の卒業式ともなると思い出深いものなの？」
つい、声が大きくなってしまった僕の反応に怪訝な顔で妹がこちらを見る。
「あぁ、悪い。ちょっと気になることがあって…」

「また久世さん絡み？」
「！？」
突然、妹の口から出た予期せぬ名前に一瞬思考が止まる。
「久世さん？」
「なんか、お兄ちゃんのバイト先の人らしーよ。探偵みたいな胡散臭いことやってるらしいけど、お兄ちゃんもそこで助手？みたいなことやってんだって」
そういえば妹にはバイトしていることは言ってあるんだったな。
「あ！ちょうどいいじゃん！杏子ちゃんもなんか依頼してみれば？」
「え？」
「あのなぁ、依頼って言っても僕は久世さんの手伝いであって、別に僕も探偵家業を引き継いでる訳じゃないんだぞ」
「細かいことはいいの、いいの。勿論、タダなんでしょうね！」
自分の言ったことがとても良いアイデアだと自分で納得し、勢いは収まらないまま妹はテーブルから身を乗り出し、此方に詰め寄る。
「なんでだよ！」
「あ、あの依頼料はちゃんと払います！」
お前も依頼する気満々か！
「何々？なんの依頼？」
妹は彼女の食い付きに囃し立てる様に矛先を僕から杏子ちゃんへと変える。
「そ、その…最近失踪事件が流行ってるらしいので、今後誰かがそんな悲しい事件に巻き込まれないようにしてもらいたいんです。――あ！その！警察とかに頼むのが普通なんでしょうけど…」
彼女の言葉に部屋の空気の温度が少し低下した気がした。それを察したのか慌てて彼女は言葉を濁す。
その反応に対し、妹は相槌を打つ。
「あぁ、なんか最近全校集会でも言ってたやつね。」
やべー。
「そういえば、事件のこと伊織ちゃんに聞くの忘れてましたね」

一人、変な汗が出始めた僕に雪燈の突っ込みが容赦無く入る。
忘れてた。色々あったし、仕様がないだろ！それに、あれは無事に解決したし、大丈夫だろ。
「そ、その話なら僕も少し耳に挟んだけど、警察も動いてるだろうし、心配いらないと思うよ。なんだ？二人の知り合いとかが巻き込まれたのか？」
ちょっと動揺を隠すのに必死になりながら、応えると僕の質問に対し、伊織が手を横に振る。
「いや、なんか後輩らしいんだけど、まだ見つかってないらしいし、物騒じゃん。それに知り合いじゃなければいいって考え、お兄ちゃんらしくないね」
妹の辛辣な言葉に息が詰まる。
確かに今のは失言だったな。
妹にそんな所を突っ込まれるとは。
「そういう訳じゃないけど、今のは失言だったな。まぁ、その事件は解決に向かってると考えていいと思うよ」
「ほんとにー？なんでそう言い切れるの？」
「久世さんの方にも似たような依頼が来てたから少しその事件の経過については詳しいんだ。まぁ、僕に出来るようなことがあれば最大限努力するよ」
「お願いします！」
しかし、『自分が』じゃなく、『誰かが』ってきたか…。ほんと、良い子なんだな、この子。
「ふーん。まぁ、いいや。にしし。で！依頼料はどうするの？」
そう言うと伊織は何が楽しいのか嫌な笑い方をし、口を窄め突き出すようにして、杏子ちゃんに向ける。
タコだかヒョットコだかわからん顔するな。お前も一応女の子だろ！さっきの僕の感動を返せ！
「え？え！え？」
妹の顔を見て、杏子ちゃんの顔はみるみる赤くなる。

そりゃあ、こんなアホみたいな顔されたら、恥ずかしいわな。
「別に依頼料とかはいいよ。僕がやりたくてやることだしね」
「なんか、妙に優しくないですかー？実際に手伝うのは私ですよー？」
お前にもちゃんと感謝してるよ！
「あ、あの！お金とかは無理かもしれませんけど…私に出来ることでなら何でもします！」
どこか必死さが伺える雰囲気の中、その小さな肩を震えさせ、両手はスカートの裾を握り締めながらも、しっかりと此方を見てくる。
こんなに必死になるなんて、よっぽど今回の事件を気にしてるんだな…。これは、気持ちだけでもちゃんと受け取った方がいいよな。
「わかったよ。気持ちだけで十分だけど、杏子ちゃんの気が済まないっていうなら、その時までに何かしら考えとくよ」
「お願いします！」
「あぁ、依頼承りました」
人のためにここまで必死になれるんだ。こういう子が“世界”に弄ばれないようにしなきゃな。
少女の中身のその一端を垣間見れた気がして、少し心が温かくなる。
ふと隣を見ると伊織が未だにアホ面を晒していた。
だから、そのアホ面をやめなさい！お兄ちゃんは悲しいぞ！

その後、僕は妹の部屋から退場し、自分の部屋でゆったりと休日を満喫しながら時間を潰すと杏子ちゃんが帰るからということで妹と二人で玄関まで一緒に下りる。
玄関に立つ僕らに角を曲がって見えなくなるまで、此方を振り返り会釈しながら歩く彼女を見ながら、受けた依頼を思い出し、責任重大だなと口元が綻ぶ。
そんな僕を見ながら伊織がまたオッサン臭い喋り方で此方に話を振る。

「にしし。どうでした？杏子ちゃんは？」
お前はキャバクラのキャッチか何かか？
「別にとくには…。まぁ、良い子だよな。お前に似てなくて静かで優しいと思うよ」
「えー、それだけ？家にはまだ行った事無いけど、なんでもお屋敷らしいよ。玉の輿ですよ、お兄さん」
「それだけで十分すぎるほどです！」
僕の返答がどうやら二人ともご不満らしく、口を膨らませる。というかお前は兄に何を求めているんだ。
あと雪燈、お前もなんで不満そうな顔してんだよ。
「他に何があるんだよ――――ほら、僕は夕飯の支度するから、お前も手伝えよ」
「ほーい！」
そして、慌しい休日は過ぎていった。

3章（2）　休日ー2（後書き）

旅から帰還しました。
いつの間にか増えてる書類に眩暈が…
これからまた更新していきたいと思いますので、
宜しくお願いします。

3章（3）　学校

三章――？

ゆっくりと太陽が昇り、空気が持つ表情も次第に変化していく。今年の梅雨はどこへ行ったのか七月が近づくにつれ、気温もどんどん上昇してきている。セミたちも少しフライングした奴等が元気に音を奏でる。

そんな中、やっとのことで教室の前まできたことで一息吐き、ドアを開ける。

「おはよう」

「お、体はもういいのかよ？」

いつもより少し早い教室の中、一人目的の人物が僕の隣の席に座っていた。

「あれから二日間も寝てたし、昨日は一日ゆっくりしてたから、もう流石に大丈夫だろ」

「ならいいけどよ。いやー、駅前歩いてたら雪燈ちゃんがすげー血相変えて現れた時はビックリしたけど…。夜のあの子も意外と可愛いとこあるのな」

「あの時は一杯一杯で…。恥ずかしいです」

お前、そんなこと言ったらいつか憑り殺されるぞ。

「まぁ、それで言われるがままに追いてったら、お前と女の子が道の真ん中でぶっ倒れてるは、民家の塀は崩れてるわ、更にビックリさせられたぜ。まぁ、一昨日のお前からの電話で事情は掴めたけどよ――と、それで今日は早く教室に来いなんてメール送ってきたりして、どうした？」

そう一気に捲くし立てる様に浅井浩市が応える。　会話の通り、僕が今日の朝起きたときにこいつにメールを送ったのだ。それもこれも少し二人きりで話したいことがあったからなんだけど。

「あの後のことは感謝してるよ。ありがとな」

素直に感謝の言葉を口にすると、浩市は照れくさそうにポリポリと頭を掻く。
「別にいいけどよ。あんま無茶すんなよ。顔面なんか、ゴリラに殴られたのかスゲー腫れ方してたぜ。まぁ、そのお陰で伊織ちゃんも俺の話を信じてくれたんだけどさ」
当たらずとも遠からずだな――――そう言われると未だに殴られた頬に違和感を感じる。
「まぁ、ちょっと無茶したけど、無事に解決したから――」
「いたー！！」
「うおっ！？」
浩市への返答は僕の後ろ――――つまり教室の外からの大声によって遮られた。
「あ、茜？」
慌てて後ろを振り替えると鬼の様な形相をした茜がこちらへ猛ダッシュで突っ込んできた。
こわっ！様にじゃなくて、鬼だ！
「ちょっとちょっと！金曜日いきなり休むなんてどうゆうことよ！それに私に連絡なしってのはどうゆう了見よ！」
走ってきた勢いそのままに僕に詰め寄ってくる。
なんで休むのにお前の許可が必要なんだよ！
「お、落ち着けよ。詳しい話は昼休みにするよ。ほ、ほらもうすぐみんな来るし、今はそんなに時間無いだろ」
「何言ってんの！こんな朝早くにこそこそ登校してきて！まだ、時間はあるわよ！」
その朝早い時間になんでお前も登校してきてるんだよ！
「早い奴はそろそろ来る時間だし、とりあえず、落ち着いて話ができる時にしようぜ」
ナイス！浩市頑張れ！
「あによ！なんであんたがいるのよ！」
「へへーん。俺は良平に呼び出されたんだよ！」

馬鹿野郎！僕の名前を出すな！
しかもなんで微妙に自慢気なんだよ！
「へー。二人だけで内緒話をしたかったわけねー。そーなんだ。私は仲間外れなんだ」
おい！なんか状況悪化してるぞ！
火が点いたように問いただす茜を落ち着かせようと、必死になっている所に見かねた浩市がフォローしようとするも、馬鹿では火に油を注ぐだけだった。
「あんた達は最近そーやって私を除け者にしようとするんだから！」
「俺等がいつしたって言うんだよ！」
「今よ！だいたい――」
冷静な会話もできず、いつの間にか二人の言い争いに成りつつある会話を聞きながら、ふと教室の入り口を見ると、早めに登校してきた真面目な生徒や、朝練を終えて戻ってきた生徒達が呆然とした顔でこちらを見ていた。
ヒソヒソと話す声の中たまに『またかよ』やら『あの三人は』とか痛い言葉が聞こえてくる。
もう勝手にしてくれ。

あれから二人の言い争いは終わりをみせず、あきほちゃんが教室に入ってきたことで、やっと決着をみせた。
何故かというかやはりと言うか、僕も二人と同様にあきほちゃんに怒られた。
しかも気に入らないのが、僕と浩市の方がこっ酷くやられた。
あきほちゃんに文句を言った所、茜は委員長で信頼してる。お前等は馬鹿だから。
ぐうの音も出ないほど、落ち込んだのはここだけの話である。
そんなこんなでいつもの様に学校という箱庭の日常は流れていき、やっとのことで昼休みになり、僕等三人は中庭へと場所を移し、朝の話の続きをすることになったのだけれども――

「なるほどねー。うん！浩市が悪い！死ね！」
粗方の説明は妹にしたのと大体同じで、放課後に久世さんの所から帰るところを偶然浩市と出会い、そこで話の流れで組手をすることになり、見事僕の失神ＫＯで幕を閉じたって感じだ。
「なんでだよ！」
お前の意見は最もだ。
「そんなのあんたは全国大会出場者なんだから、少しは手加減ってものをしなさいよ！手加減！」
「したわ！話聞いてなかったのか？たまたま当たり処が悪かっただけって説明したろ！」
「それでも、二日間寝込むとかどんだけよ！大体あんたは――」
うわぁ、また始まった…。
多少無理がある説明かと思ったけど、納得してくれたのは助かった。それでも、これじゃあ話が進まないなぁ…。
「ね、ねぇ、良平君。今日のこの後のこと話さなくて――」
この状況でどう切り出せって言うんだよ！はぁ…。また注目されてるよ。
周りを見ると中庭にいる他の生徒はもちろんのこと校舎の窓から此方を見ている生徒もちらほらいることがわかる。
全く、なんでこいつらはこうなるんだよ。
中学の頃から変わらないこの二人の関係を思い出し、溜息がこぼれる。
仕様がない。この手段は使いたくなかったけど、そうも言ってられないし。
「わ、悪い！ちょっとまだ病み上がりだから、頭フラフラしてきたし、保健室行ってくるわ！」
我ながら嘘臭い言い訳を口にし、二人の意識が此方から外れているタイミングでその場を逃げ出すように後にする。
「あ！こら待ちなさいよ！」
「おまっ！この状況で逃げんなよ！」

後ろからすぐに非難の声が上がるが知ったこっちゃ無い。無視だ、無視！
浩市、お前のことは忘れないよ。だから、僕のために犠牲になってくれ！
「あきほちゃんに宜しく言っといて！」
そのまま僕は校舎まで猛スピードで走り抜けた。
「頭フラフラしてる奴の動きかよ…」

校舎に入り、後ろから二人が追いかけてこないことを確認して、ようやく立ち止まる。
「やれやれ、あいつ等の夫婦漫才に付き合ってたら、僕の高校生活が台無しになるな」
乱れた息を整えながら、近くに誰もいないことを確認し、雪燈に話しかける。
「ほんと、あの二人は似た物同士というかなんというか仲が良いですよね」
まったく、あんな感じな奴らが集まるのは僕に原因があるのかね。
「で、肝心な話をしないで逃げてきちゃったけど、この後どうするの？」
「んー。今から戻るのもなんか恐いし、取り敢えず本当に保健室に行くかな。おっと、その前に浩市にまたメールしとくか」
再び歩きだし、携帯をポケットから取り出す。
「なんで？話なら教室ですれば良いんじゃないの？」
「まぁ、それでもいいんだけど、やっぱ今回の話には茜まで巻き込みたくないんだ――うし！これでよし」
簡単に本文を打つ浩市にメールを送り、携帯を閉じる。
「さて、本当に放課後まで保健室で寝てますか」
「サボタージュってやつだね。悪いんだ」
ぐ、戦略的撤退と言ってくれ。

その後、やはり未だに疲れが抜けてなかったのか、はたまた朝が早かったせいかあっさりと保健室の真っ白なシーツの上で優雅な午後の睡眠をとり、授業終了のチャイムを目覚ましに、今はベッドの上で浩市を待っていた。

最近寝てばっかだな僕。

保健室の先生は目を覚ました際にすぐに出て行くと伝えると、会議があるからとかで職員室に向かい、都合の良いことに今は一人だ。

暫くしてドアが開き、僕の顔を見るなり浩市が呆れ顔で入ってきた。

「まったく、マジで午後の授業サボりやがって。あの後、茜といい、あきほちゃんといい大変だったんだぞ」

容易にこいつが二人に責められる姿を想像でき、つい苦笑してしまう。

「悪いな」

「まぁ、いいけどよ。んで、なんだよ話って」

浩市がベッドの横に置かれている椅子に座った所で話を切り出す。

「いや、昼の続きなんだけどさ、茜には聞かせられない話だったからさ」

「あー、まぁな。んでも、そろそろ限界じゃねーのか？いくらなんでもあいつもなんか勘付きだしてんぞ」

それはわかってる。でもだからと言って割り切ることなんか絶対にできない。

「話さなきゃならなくなったら、話すさ。ただなるべくあいつも含め、関わる必要の無い人達の日常を壊してまで巻き込みたくないんだ」

「まぁ、そこらへんはお前の自由だけどよ」

そう言って、困ったように頭に手を持っていく。

「悪いな」

「で、続きってのは？」

「木曜のことと休日のことは大体話したろ？それで、今日その事後報告と依頼料回収ってことで、これから中学に行かなきゃなんないんだけど――お前も付き合えよ」
「へー。ってなんでだよ！」
「いやー、校長に会うんだぞ。僕一人とか正直気まずいじゃないか」
「俺も気まずいわ！」
「そこをなんとか！それに、杏子ちゃんのこと僕に黙ってたこと許した訳じゃないんだからな」
「いや、あれはお前が羨ましくて…ついな」
わりぃ、わりぃ。と頭を掻きながら誤魔化す様に笑い出す。
「そのお陰で、僕は昨日大変だったんだからな！」
「鼻の下伸ばしてたくせに」
「伸ばしてない！」
ぼそっと雪燈の突っ込みが入るがそこはきっぱりと否定する。
「しかし、お前が杏子ちゃんのことを全く知らないとはなぁー。一個下のアイドルだぞ、あの子。別にあの日以外でもなんかしらの情報が入ってきてもいいものなのによ」
「別に中学の頃はそーゆうのに興味が無かったんだよ」
それにあの当時はまだ自分に過去の記憶がないことで世界に絶望して、一人でいじけることしかできなかったほど子供だったしな。
「それは今はあるってことですか！？」
ベッドを挟んで浩市と反対側に居た雪燈が身を乗り出して、話に食付いてくる。
「あ、あぁ確かに中学の頃のお前は人のこと避けてた感じがあったなー。茜から聞いた話じゃ、小学校の頃なんてもっと酷かったらしいじゃん」
「それで、それで？」
「俺と初めて会ったときも――」
「別に僕の話はいいんだよ！それで、来るのか来ないのかどっちだよ？」

本人の目の前で話を進めるな！
　自分で話すのでも恥ずかしいのに、余計に恥ずかしいわ！
「や、やけに強気だな。まぁ、ついて行ってもいいけど――待てよ。中学に行けばＯＢとして可愛い後輩にチヤホヤされるかも…。それに久しぶりに雫ちゃんの顔を見たいし――よし！俺は行くぞ！」
　いい加減纏まらない話に痺れを切らした僕の強引な質問に対し、急に自分の顎に手を当て考えだしたかと思うと、勝手にやる気になってくれた。
　おまけにこれでもかってくらいの良い笑顔で、親指を突出したハンドサイン付だ。
　というか思考がダダ漏れだ、馬鹿野郎。
「最低ですね」
「僕はお前が馬鹿で良かったよ」
「なんだよ二人して」
　放課後の保険室に溜息が二つ重なった。

3章（4）　そして転がりだす

三章――？

「やべー、懐かしいな！」

「ほへー。ここが良平君が通った中学ですか」

日が落ちかける夕暮れ空の下、清稜中学校と書かれた校門の前に立ち止まり、浩市がアホ面で感傷に浸る。

下校時間を多少過ぎた時間であるというのに未だにちらほらという生徒からの視線が痛い。突然来訪してきた見知らぬ高校生二人はさぞかし場違いも良いところだろう。

というか完全に目立ってしまっている。

こんな所でいきなり立ち止まるな！やっぱりこいつを連れて来たのは失敗だったか？

「いやー、ここに来るのも久しぶりだなー。卒業して以来だから、もう三か月くらいか。毎日通っていた所なだけあって懐かしさも二倍だなー」

「まだ、ほんの三ヶ月だろ。ほら、久世さんから話は通ってると思うし、この時間なら流石に校長室にいると思うから、直接行くぞ」

いつまでもこんな所にいるわけにもいかず、先に歩き出す。

「りょーかい。にしてもやっぱ中学生はいいよなぁー。こうなんかフレッシュな感じがさ」

「はいはい」

「最低ですね」

浩市はすれ違う女の子達を見ては鼻の下を伸ばし、後ろから着いてくる。

正直、他人のふりしたくなってきたな。

「なんだよ。二人してつめてーな。――伊織ちゃん達に会わねーかなー」

一瞬、普通の顔に戻るが、スグにアホ面に変わり、キョロキョロ

と周りを見渡しだす。
頼むから、あんま変な行動とらないでくれよ！
気のせいだと思いたいが、すれ違う生徒達から聞こえてくる会話の中に僕の名前が含まれているのを下の学年に妹がいるからだろうと結論づける。
「今の時間ならもう下校したんじゃ――」
「良平君！」
「あぁ、わかってる！」
投げやりに浩市に返答しようとし、言葉が詰まる。
それというのも突然襲ってきた耳鳴りのあと、全身を包んでいた大気が豹変し、ねっとりと体にへばり付く重いものになる。
「おい、良平。お前木曜日にちゃんと祓ったって言ったよな？」
「あぁ」
流石に浩市も気づいたか。この感覚は――――間違いなく近くに霊がいる！
「じゃあ、これは新手かなんかか？」
「そう思いたいけど――」
「この感覚…間違いなく前回のと同じ匂いがしますね」
一瞬、頭に過る言葉を雪燈がきっぱりと否定する。
「だろうな」
「マジかよ。頼むぜ、大将」
「こっちです！」
やはり感知能力に関しては唯の人間である僕や浩市よりも遥かに優れている彼女が先行する。
真っ直ぐ校庭を抜け、校舎の入り口まで来るが内部に入らずそのまま通り抜け、校舎の裏を目指す。
相手に近づいてきているのか、次第に僕等にもはっきりと感覚が掴めて来ると、目的の場所が中庭であると確信する。
三ヶ月ぶりと言っても、その前に三年間通っていた場所だ。
ある程度の場所がわかり、雪燈を追い抜き、浩市と同時に校舎

の角を曲がり、中庭の景色を視界に入れる。
「おいおい、勘弁してくれよ」
「な、嘘だろ」
校舎からの影が落ち、薄暗くなった中庭に生徒が一人此方側を見ながら佇んでいた。
二つに結ばれている筈の髪の毛は今は解け、ボサボサのまま好き放題に風に吹かれ、その両目は光を失っていた。
「三ヶ月ばかり見ない間にすげーイメチェンしちゃったじゃないの。まったく、お兄さんは悲しいよ――杏子ちゃん」
冗談めかした口調でそう喋る浩市の言葉も動揺を隠せないでいる。
「そ、そんな」
そこにいたのは昨日会ったばかりの杏子ちゃんだった。
此方を呆然と見る顔からは彼女の意思が欠落していることがわかる。
そして、奴等にとり憑かれたことも。
「良平！呆けてる場合じゃねーぞ！」
「良平君！」
「な、なんで彼女が。そ、それにあの日ちゃんと祓ったじゃないか…」
与えられた目の前の現実に頭が考えるのを拒否し、豹変してしまった彼女の惨状に耐え切れなくなり、雪燈達の呼びかけにも反応できないまま地面に膝から崩れ落ちる。
「良平！」
それと同じタイミングで先ほどまで動く気配のなかった杏子ちゃんが予備動作なく、僕目掛けて一直線に飛び込んできた。
そこへ浩市が僕と彼女を結ぶ直線上にギリギリの所で滑り込むように体を入れ、彼女の突進を止める。
「おいおい、つれないねー。目の前にこんな良い男がいるってのに浮気ですか？」
軽口をつくが彼女の体重を支えたその足元は地面に減り込む。

「雪燈ちゃん！」
「はい！」
「取り敢えず、俺が時間を稼ぐから早いとこそこで呆けてる馬鹿を叩き起こしてくれ！俺には霊なんかを祓う力はねーからよ！」
「わかりました！」
彼女の意識がこちらに向いた一瞬を見逃さず、彼女の体を往なす様に地面に叩きつけ、横へと転がり膠着状態から逃げる。
「なるべく早く頼むぜ――くそっ、最近の中学生は皆こんな馬鹿力なのかね」
「うわぁぁあぁぁ！！！」
崩れた体勢を整えようとしたところに容赦なく文字通り必殺の拳が彼を捉えようとする。
それを一瞬の判断で上段受けで払い飛ばす。
「いってー！んでも、全国大会出場者を舐めて貰っちゃ困るぜ！」
そうして後退しつつも上へ下へと彼女の連打を往なし続ける。
その光景を現実と認識できずにただ呆然と見つめていると雪燈が目の前に寄って来る。
「良平君！しっかりしてよ！」
嘘だ。嘘だ。嘘だ。嘘だ！
「良平君！うっ…」
彼女の呼びかけもどこか遠くに聞こえてくる。目に映る視界はフィルターがかかり、現実感を喪失させる。
「嘘だ。嘘…、ぶはっ！」
呪詛のように呟いていた言葉は突然の顎への衝撃で上半身ごと弾け飛んだ。
そのままの勢いで地面に頭を叩きつけ、視界に靄のようにかかっていたフィルターも綺麗に吹き飛ぶ。
「いい加減に目を覚ませ、このど阿呆！それでもチンコついてんのか！」
間髪入れずに上から叩きつけられるように自分へと向けられた言

葉に意識と現実がリンクする。
　もう、もう一人の雪燈に変わる時間か。
「お、女の子がそーゆうこと言うなよ」
　痛む頬を押さえながら上を向くと、そこには両手を腰に当て、悪戯が成功した時の子供の様な顔をした雪燈がいた。
「はん！目は覚めたのか」
　頬を触る手からの痛みに彼女が自分の腕を操り、思いっきり殴ったんだと理解する。
　まったく。こっちの意識がしっかりとしてないのに、勝手に体を動かすなんて離れ業をされたら敵わないよ。
「あぁ、お陰様で。悪い、迷惑掛けた」
　意識がはっきりとした所で浩市の方を見れば防戦一方ながら、なんとか耐えてくれている。
「浩市！」
「おぉ、やっと目が覚ましたか。おせーんだよ！おっと」
　此方をチラリと見ながら、杏子ちゃんの拳をかわす。
「大丈夫か？」
「大丈夫って言えば大丈夫なんだが、どうにも手加減できねーレベルの相手に手加減しなくちゃならないこの状況は正直きちーな…、うわぁ！」
　話しながらも杏子ちゃんの攻撃は止まらない。
　浩市の腕を見れば、所々腫れて紫色になっているのがわかる。
　相手は悪霊に取り憑かれたといっても、肉体は杏子ちゃんなんだ。攻撃することも出来ないんじゃ、拙いぞ。
　正直、時間がないな。
「取り敢えず、あの子が逃げないように足止めしといてくれ！――雪燈、いけるか？」
『りょーかい！』
　僕の呼び掛けに二人の声が重なる。
「まだ、完全に日も落ちてないし、時間帯的には本調子じゃないが、

やるしかないだろ」
「よし！行くぞ！」
両の足に力を入れ、地面を踏み込む。
さぁ、さっきの失態はここから巻き返しだ！
彼女は助ける、絶対にだ！
「お兄ちゃん！！」
「え？」
突然、聞き慣れた声がして、足が止まる。
「良平！」
「馬鹿！」
意識が離れたその一瞬をついて、僕を狙い杏子ちゃんが飛び出す。
それに反応した浩市が身代わりになる様に間に飛び込むも、まるでそれを最初から狙っていたかのようにすぐに反応した杏子ちゃんが浩市を殴り飛ばす。
そして文字通り、飛んだ。
「ぐうわぁぁ！」
「おい！浩市！おい！」
そのままの勢いで僕らの真横まで転がってきた浩市に慌てて駆け寄るが、意識を失っているため反応がない。
「くそっ！あの子は…」
「逃げたな」
彼女がいた場所を振り返るもその場にはもう誰もいなかった。
「悪い。最初から最後まで足引っ張った」
「取り敢えず、珍しく働いたこのグズと小娘の対処をしなければな」
「…あぁ」
声のした方――もう一度渡り廊下に目を向けると伊織が震える体で此方を見ていた。

3章（5）　始動

三章――？

「杏子ちゃんが校門の前にお兄ちゃんがいるって言って、走り出したから追いかけてたんだけど、見失っちゃって…それで、探し回ってたら、中庭から大きな音が聞こえたから――」

そう泣きながら伊織は震える声であの時のことを話す。

今は中学校から椎名家のリビングと場所を移している。

あれから意識を失った浩市を担ぎ、応急処置をするために僕らの家へと場所を移した次第だ。

道中、僕も伊織も一言も発することなく、家に着き僕の部屋で浩市を寝かせた。

そのあと、リビングに降り彼女が座っているソファーの正面に僕も腰を据えるとせきを切ったように話し出したのだった。

「一体あれはどういうことなの？浩市さんのことをいきなり殴り飛ばすし、杏子ちゃんはどうしちゃったの？」

くそっ！どうする。何て言えばいい！

悪霊に憑りつかれた。なんて荒唐無稽な話を信じさせなければならないことよりも、このままでは妹を此方側に引き込んでしまうという事実に言葉が詰まる。

「ねぇ！お兄ちゃん！」

「詳しいことは話せない。ただ、彼女を助ける最大限の努力はする」

「そんなんじゃ、わかんないよ！」

妹を巻き込みたくない気持ちが僕の思考に枷をつけ、この場を乗り切るための案が何一つ出てこない。

「取り敢えず、待っててくれ。今はまだそれだけしか言えない」

空気に耐えれなくなり、堪らず座っていたソファーから立ち上がる。

何か彼女を安心させるようなことを言わなければならないこと

はわかっているのだが、それからも逃げ出すようにそのまま足をドアへと向ける。
「彼女見つかるよね？戻ってくるよね？だって、なんもしてないんだよ？」
「そこにいたから。そんな理不尽なことが平気で理由になるんだよ」
言葉が背中に圧し掛かる。
彼女の救いを求める言葉を僕は振り切るように自分の口が自分の物で無いかのように、己が最も嫌悪する言葉を吐き出し、逃げるように外に出た。
「くそっ！僕は僕で救い様がないな」
外部に出ると救いを求めるためなのか、はたまた単純に苛立ちを抑えるためなのか、自分でもわからない感情のままに力任せに塀を殴る。
勿論、超人と言う訳ではなく、唯の一般人。殴った塀はビクともせず、握り締めたその手からはポタリと血が落ちる。
「落ち着け。今回は私にも落ち度がある」
「いや、僕の責任だ」
懺悔をする様に壁に額を押付ける。
あの日、しっかりと除霊できたのか確認しとけば。
あの時、パニックにならずに、速やかに少女を救う努力をすれば。
取りとめない後悔が襲う。
――――ただ…
まだ、終われない。
「よぉ、気分はどうよ？」
突然の呼びかけに後ろを振り向くと、浩市が玄関のドアにもたれ掛かりながらこちらを見ていた。口元に苦笑を浮かべて。
恥ずかしい所を見られたな。
「起きたのか。体は大丈夫か？」
「まぁ、ぼちぼちだな。伊達に鍛えちゃいねーよ。んで、どうするんだよ？」

そう言うと首の骨を鳴らしながら僕の目の前までゆっくりと歩いてくる。
そんな浩市の顔を正面から見ることができず、下を向く。
「このままじゃ、終われない…いや、終わらせちゃいけないんだ」
「私もこのままでは少々寝覚めが悪いな」
目線は地面を向き、吐き出すようにそう応えると背中からも僕の言葉に重ねる様に応えがある。
「んじゃあ、話ははえーや。行くんだろ？あの人のとこ」
「あぁ、ちょっと聞きたいこともあるしな」
「で、近接戦闘が全く使い物になんないお前にちょうどいい、フォワードがここにいるんだけど、お客さんどうよ？」
その言葉に顔を上げると浩市が自分の拳を僕の顔の前に突き出していた。
子供の様な笑顔を浮かべて。
その拳が、その顔が、『やってやろうぜ』と僕の事を後押ししてくれている気がした。
「ありがとう」
まったく、僕は良い友人を持ったよ。
僕はそれだけ言うと彼の拳に自分の拳を軽く打ち付け、その上から照れ臭そうな顔して雪燈が手を重ねる。
「さぁ、リベンジだ」

3章（6）　ゆずれない想い

三章――？

完全に街が闇に染まる頃、目的の場所へと辿り着く。繁華街はちょうどこれからが本番とでも言う様にネオンの光を街へ発信している。

そんな賑やかな建物と対照的に目の前のビルには何一つも目立った装飾がない。

「さて、俺はここに来るのも久世さんに会うのは実は初めてだな」

「いくぞ」

薄気味悪い寂れたビルの中でただ一つだけ灯りの点いた三階のフロアを睨み付ける。

内部へと入り、階段を上がる。目的のドアの前に来ると、ノックもせずに戸を開けた。

「いらっしゃい。あれ？今日は一人じゃないんだね。誰だい？椎名君の友達かい？」

そのまま室内に入ると、久世さんは何時もの様に自分の椅子に深く腰を据え、煙草を口に咥えていた。

室内は換気が不十分なのか紫煙で満たされ、快適とは程遠い環境になってしまっている。

予想はしたけど、全くと言って良いほど何時もと何も変わらない反応だな。

「こいつは――」

「浅井浩市と言います。良平とは中学からのダチで実家は寺をやってるので、“そっち”関係の話にも少しは精通してるつもりです」

僕の言葉を遮り、一歩前に出ると浩市自身が自己紹介をする。

その会話の中、ほんの一瞬ではあるが、ニヤケ面で細められた瞳の中に不気味な光を見た気がした――まぁ、気のせいだろ。

「へー。確かに中々面白そうだね…。というか、椎名君友達いたん

だ。いやー、ビックリビックリ。万年ぼっち君のアダ名は返上だねー」
やはり気のせいだったのか、何をそんなに楽しいのか手を叩き、笑い出す。
『そんなアダ名付けられた覚えはない！』といつもなら久世さんの冗談にリアクションするんだけど…。
「――久世さん」
「ん？」
「悪いんですけど、今日は冗談を聞きに来た訳じゃないんです」
ニヤニヤと笑っていた瞳がより一層細められる。
「と言うと？」
「お前の軽口に付き合ってる暇はないって言ってんだよ」
彼のいつも通りの反応に我慢できなくなった雪燈が吐き捨てる様に応える。
「それはそれは。どうしたんだい？今日はやけに喧嘩腰じゃないかい。あぁ、そうだ。依頼料は貰ってきてくれたかい？」
「それなんですが、状況が変わりまして、木曜日に祓ったタイプと同種の悪霊がまだこの街に潜伏してるんです」
「へー。ちゃんと祓ったんだよね？」
「あの日、祓ったことは間違いない。だとすれば別の奴と解釈するしかないが、実際に見た感じからすれば同系統の存在ではあった」
「それで、今日浩市と中学に行った時に遭遇して、運悪くそこに居合わせた女の子が襲われました」
雪燈の補足も交えながら、今日の出来事を簡潔に話していく。
「なるほどねー。だからそんなにピリピリしてるんだ。それで、すぐに追わないで僕のところに来たのはなんでさ？」
口元に咥えていた煙草を灰皿に押付け、新しく出した煙草を咥えなおし火を点ける。
「色々あって、取り逃がしたんです。正直この街の何処にいるかもわからない女の子をすぐに見つけるのは厳しいです。だけど、今回

はそんな悠長なことは言ってらんないんです！今こうしてる間も彼女の精神は霊によって侵食されてるんだ」
今日のことを話すことであの時の悔しさが鮮明に思い出される。
また話を聞きながらも淡々とした久世さんの変わらない反応に苛立ちを覚え、抑えていた感情が溢れ出してくる。
「それで、僕の力を借りたいと…。うーん。やっぱりこうなったか」
「だから僕は――やっぱり？」
歯を食い縛り、強く握り締めていた拳が彼の言葉に思考が追いつかず一瞬力が抜ける。
それも一瞬のこと、どこかで予想していたが脳が信じたくなかった結論に辿り着く。
「あんたまさかっ！最初からこうなることをわかってたのかよ！」
「おいおい。落ち着きなよ。これでも僕はちょこちょこヒントは出していたんだよ。例えば『今回の犠牲者は二人』とか、『君は彼等から見たらご馳走』とかね。完全に全てを祓いきってない状況で君がそんな人混みに行ったら、そうなることは大体想像できるじゃないか――それに君も良く知ってると思うけど、中学生くらいまでの子供達はその感受性から、取り憑かれやすいとかね」
頭の中が沸騰したかのように煮えくり返り、身を乗り出し、久世さんの胸倉を掴む。
「あんたが僕に学校に行けって言ったんだろ！！」
それでも久世さんは変わらぬ口調で淡々と語る。それがとても耳障りで仕方がない。
付け加えられた言葉が記憶にないはずの自分の過去を抉る。
「ちょっと待てください」
浩市が落ち着けと言う様に僕の肩にポンと手を置く。
「なんだい？」
「久世さん、俺の気のせいなら切り捨ててもらっていい想像なんですが、俺には今回の件は話を聞く限り、どの角度から見てもあなたの仕組んだ通りに動いてるとしか感じないんですけど――」

「うん。そうだよ」
「んな！？」
決壊寸前でなんとかギリギリで支えていたものが壊れた音がするとともに頭の中は真っ白になる。
久世さんの胸倉を掴んでいた手を引き、無理矢理立ち上がらせる。
「ふざけんな！俺はあんたの人形じゃない！」
「良平、私もそろそろ我慢の限界だ。いい加減こいつを黙らそう」
すぐに雪燈との精神の定着を感じ、血が滲むほど握り締めた拳が僅かに光りだす。
瞬間、その僕の腕を久世さんの手が掴む。
「おいおい、君らしくもないなぁー。それに一人称変わってるよ」
「つっ！」
指摘された言葉に対し、それを発した自分が驚き久世さんから手を離し、震えるその腕を自分の胸元に持ってくる。
僕は…、俺は…、俺？
その一瞬の動揺で雪燈との定着が外れる。
「おい！どうした良平！」
「俺と僕ね。君の処世術の一つかな。それとも――――」
僕の動揺に追い討ちを掛けるように彼の言葉が続く。
「僕の話は、今関係ないでしょう！」
なんだ？なんなんだよ！
この話は嫌だ。聞きたくない！
「良平！」
「くっ！」
肩に置かれていた浩市の手に力が入り、僕の肩を強く掴む。その僅かな痛みが混乱する頭の中を落ち着かせ、体全身を包んでいた不快な物は四散するように消えていった。
「落ち着けよ」
ふと我に返り隣の浩市を見ると、更に落ち着かせるように言葉を

掛ける。
「悪い。助かった」
「はぁー、ちょっといいかの」
「んな？」「え？」「なに！？」「あれ？」
空気が落ち着きだした所での突然の溜息交じり声に全員が全員それぞれの反応をする。
浩市、僕、雪燈、久世さんの順番である。
声がしたのは僕の後ろ――つまり、本棚が置かれているだけなのだが、その上にいつの間にか黒猫さんがちょこんと乗っていた。
うお、なんか久しぶりに見たな。んでも、誰もいないじゃないか。
「どうしたんだい？黒猫ちゃん？自分から喋るなんて」
一番遅れて反応した久世さんがそれが当たり前かの様に黒猫さんに話しかける。
流石にそれは…。
「お前等、人間の思考回路が余りにも不憫なもので、黙って見てられなかったんだよ」
ピョンッと飛び跳ね、本棚からソファー、テーブルと跳び跳ね久世さんの机の上に着地すると、黒猫さんも当たり前のように返事をしやがった。
「あぁ、紹介するよ。僕の使い魔の黒猫ちゃん。ご覧の通り、人語を解す化け猫さ」
久世さんを除いた三人が三人ともアホ面を曝け出し、放心している僕等を見て彼は苦笑する。
「しゃ、喋った…」
突然のことにさっきまで混乱していた頭の中が落ち着いてくる。
「あれー？椎名君にも言ってなかったっけ？」
「聞いてないよ！」
絶対にこの人ワザと今まで黙っていたな！
幽霊が普通にいるんだ。喋る猫が居たって――――普通か？

「貴様！やはり悪魔の類いか！」
「だから、落ち着けよ。おい、小僧」
「な、なんだよ」
雪燈などいないようにあしらうといきなり此方に話を振られ、一歩引いてしまう。文字通りに。
猫に小僧って…。
「今回の事件を良く考えろよ。相手は憑依型の悪霊だ。確かにお前の言った通り、只の人間であるお前にその子を見つけるのは困難だろう。私ならわけないことだが…まぁいい。しかし、奴等は人に取り憑いてない時はどうしてると思う？」
「それは…」
答えを導き出そうと思案しようとすると、黒猫さんは有無を言わさず言葉を続ける。
「答えは簡単。霊的な存在として、世界にいるだけだ。しかし、ここが問題でな。私にもその場合の奴等を捉えることは至難なんだよ。今回の奴等だって貴様に話をする前から主は追い続けていたんだ」
「…なんだよそれ」
「そして、これでもお前が二日間馬鹿みたいに寝てるときも、アホみたいに休んでいるときも主と我は計四体の同種の悪霊を祓っておるのだよ。取り憑くまでわからないため先手が打てない状況から何匹かは取り逃がしてしまったがな。それでも今までの数を足せば十体はくだらないだろう」
な、なんだよそれ。そんなの聞いてないぞ。一体だけじゃないって知っていたなら何故教えてくれない。
「じゃあ、なんで其れを僕に教えてくれなかったんだよ！知っていれば――」
「手伝えたか？」
「な！？」
黒猫さんの金と蒼のオッドアイが鋭く僕に突き刺さる。
「答えは無理だったな。前回貴様がここを訪れた際に、主が貴様等

を挑発して憑依させたが、定着事態しっかりとされてないわ、三分もせずに限界がくるわで酷いものだったではないか」
あの日のあの時にそんな思惑があったなんて――あの時、感じた久世さんの喋り方への違和感はそれだったのか。
「使えなければ切り捨てる。その言葉通り我等はこちらだけで処理をしようとしたんだよ。我は貴様の霊に好かれる体質を利用することを提案したが、主はその作戦を却下したんだよ。だが最終案で貴様が学校など餌が多く居る場所に行けば捉えられるのではないかという可能性に賭けたんだ」
ぐうの音もでなかった。
今までの僕のしてきたことは、自分の力量も知ろうとしないで喚き散らし、其れだけでは飽き足らず上手くいかないのを的外れにも尻拭いをしてくれていた久世さんの責任だと罵った。
これじゃあ、ただの子供じゃないか。
「君たちがあのタイプの奴等を一体祓うのが限界だというのがわかったから、この件はこちらだけで解決できればと思ったんだよ。まぁー、でもやっぱりこうゆう状況になっちゃったのは僕の失態だからね。それになんだかんだ最後には騙す様な事をして中学校に向かわせたんだ。椎名君達に嫌われても仕様がないよ」
ちらりと久世さんのことを見る。
僕に呆れるわけでも責めるわけでもなく、ただ何時もの様にヘラヘラとした顔で僕を見る。
自分が酷く惨めに感じた。
「なんだよ、それ！そんなの言われなきゃわかんねーだろ！」
「自分の無知を恥ずかしげなく披露するだけで飽きたらず、責任転嫁か。傑作だな」
そんなの僕が一番自分でわかってる！
だからって、はいそうですかで引き下がれるかよ。
「黒猫ちゃん」
窘めるような声で久世さんが呟く。

「貴様の小さな尺度ごときで世界を語るな小僧！」
「黒猫ちゃん！」
二度目は彼には珍しい大声だった。
黒猫さんもその声にハッと驚き、彼女から発せられていた圧迫するような空気も萎む。
「す、すまん。我もつい熱くなってしまった…。ただ、こんな世間知らずの小僧に主が非難されるのは見てられなかったのだ」
「やれやれ、言いすぎだよ。まったく、普段は無口で良い子なのに、熱くなると口数が多くなるのは君の悪い癖だよ。今回の彼の言い分は尤もだ。僕等だけで処理できなかったのは事実であり、彼を囮に使ったのもまた事実だよ。その責任は僕にある」
慌てる黒猫さんの頭をポンポンと優しく叩く。
「あ、あのー。話に入ってもいいですかね？」
もう俯くしかなかった僕の横でこの空気を壊すように浩市がいつもの口調で割って入ってきた。
「あぁ、ごめんごめん。黒猫ちゃんが話の腰を折っちゃったね。それで、なんだい？」
僕より一歩前に出る。
「今回の件はお互いのすれ違いで起きたってことでいいんすよね？」
「んー、まぁそうなるのかなぁー」
どうなんだろ。っと困ったように頭を掻く。
「なら話は早いです。もともとその話をするためにここに来たわけですから」
「というと？」
「最初に良平が言ったと思いますが、俺等は少女が今どこにいるか知りたいんです。力を貸してください。俺がフォワードで、椎名達がバックスのコンビでリベンジさせてください。正直、それまでの経緯なんて今は関係ないんですよ。今、一人の少女が悪霊に憑りつかれてる。これだけあれば十分なんすよ」
ハッとなり浩市の顔を見ると、向こうも此方を強い目線で見返す。

そうだ。まだなんだ。
今までの行動が全て僕の失態だったとしても、諦める理由にはならない。
「んー、それもいいんだけど、僕も一応責任者ということで、一度無理だったとわかった時点で、これ以上君達を危険な所に放り出す訳にはいかないんだよ。これでも成人した大人だしね」
「それでも、彼女を助けたいんです！」
「今回はちょっと難しいかもしれないね。現に君たちは一体で精一杯だったわけだし。それに最後の最後まで捉え切れなかった彼女と憑依した奴は言わば今回の親玉。僕が最後まで捉えきれなかった奴だしね。形は彼女と魂レベルで定着してるはずだよ。癒着と言ってもいい。べったりだ。厳しいようだけど、君には彼女は掬えないし、救えない。僕が責任もって対処するから、今回は諦めなよ」
「…対処？」
「そう、対処。僕と黒猫ちゃんなら祓えなくても消滅させることは簡単だから――――」
彼女ごとだけどね。と冷たく最後の言葉を紡いだ。
ま、待ってくれよ。大事なのはこれからどうするかなんだ。
「ふざけんな！彼女はまだ戻れる！それにこっちはもう返せないほど、高い依頼料もらっちまってんだよ」
そうだ。僕は彼女に頼まれたじゃないか。
今後“誰も”巻き込まれないようにしてほしいと。勿論、その中には彼女だって入っているんだ！
「やれやれ。あまり我儘言うなよ。初めに言ったろ？君には荷が重いって」
「なんかある！まだ、何もやってないんだから！」
端から見たらガキと大人の口論だろう。久世さんも困ったように頭を掻く。
それでも、どんなに見っともなくても諦めちゃ駄目なんだ。
「まったく、どうしたんだい？君の立ち位置はもっと中庸なものだ

ったはずだろ？」
中庸…、中庸ね。
その言葉に自嘲するように笑みが零れる。
『そこにいたから。そんな理不尽なことが平気で理由になるんだよ』
伊織に吐いた台詞を思い出し、一人自嘲する。
全く、その通りだよ。その筈だったよ。僕はいつもどこか自分が置かれている立場を直視しないで俯瞰して見ている癖があった。
自分は本当は関係ないって。
それでも、こんなのが僕が望んでいたものだと言うのなら、そんなのは癖喰らえだ。
「当たり前のように、それが当然かのように平気で突然壊されるのが堪らなく吐き気がするだけです」
今わかった。世界っていう糞野郎から逃げてちゃ駄目なんだ。僕はもうそんな所まで深く入り込んでしまっているのだから。
「今回のことは私にも責任がある。こやつだけで無理でも、私達ならその無理を通し、世界を抉じ開けるための喧嘩ができるはずだ！」
「おいおい、三人だろ。三人」
二人の言葉が僕の背中を後押ししてくれる。
もう迷わない。
ハッキリとした意思を持つ瞳で久世さんを見る。
「まったく、若いってのは良いことだね。んー、仕様がない。僕もなにも彼女が助からなければいいなんて思ってないよ。そこまで言うなら頑張ってみればいい。僕には無理だけど或いは“君達”なら出来るかもしれないしね」
「え？」
久世さんはもうお手上げだよ。と両手を上に挙げる。
「だから、今回は全力で裏方に当たらせてもらうってことだよ――それでいいね？黒猫ちゃん」
「我は主に従うだけだ」

そう黒猫さんに話を振ると、やれやれと言う様に溜息をつきながらそう応えた。
「だそうだ。やれるかい？」
此方に視線を移した久世さんの瞳が僕等を射抜く。
上等だ！もう逃げない！
「やります！やらせてください！」
三人の声と気持ちが重なった。

3章（6）　ゆずれない想い（後書き）

ちょっと仕事がピークです。
多少、更新が遅れるかもしれませんが、
宜しくお願いします。

4章（1）　作戦会議

第四章―？

「…んで、やるとは言ったけど、流石にこれは酷くないか」

「くくく。餌は黙って、大人しくしてろ」

都心という訳ではないので、僕の住む町から徒歩圏内で人の気配の無い森なんかはざらにある。今もその森の一角で胡座をかいている状況だ。

周りには人の気配はない。

いや、実際は少し離れた林の中に浩市が、そしてかなり離れた丘の上には久世さんと黒猫さんがスタンバイしているのだが。

「まったく、これで上手くいかなかったら恨むぞ」

「大丈夫さ。お前には何もさせないよ。その為に私がいるんだ」

「はぁー。頼りにしてますよ」

どこまでも楽しそうな雪燈の反応に、御座なりに手を振る。

さて、何故に現在この状況にいるのかと言うと、まだ事務所にいた三時間前にまで話は遡る。

「よし。じゃあ、そうと決まったら悪霊退治なんだけど…、君たちは何か良いプランはあるかい？」

三人が三人とも珍しく息の合った所で、一度ソファーに腰かけ、落ち着いた所で久世さんは僕等に話を振る。

「手当たり次第に探していくのは駄目なんすかね？」

これは浩市の意見。

「不本意だがそこの糞猫と私で範囲を潰していくのはどうだ？」

こちらは雪燈だ。

「貴様！」

全身の毛を逆立て、飛びかかろうとした黒猫さんを寸での所で久世さんが止める。

――――おいおい、誰彼かまわずに喧嘩を売るなよ…。
「どうどう、黒猫ちゃん。うーん。どちらも手間と時間が掛かるし、少女を救う確率を少しでも上げる為には時間は掛けられない。それに確実性がないなぁ――――椎名君と黒猫ちゃんはどうだい？」
乱暴な作戦だしね。と困ったように苦笑するとこちらにも話を振ってくる。
「あれ？ピンポイントで見つけることってできないんですか？」
その為に事務所に来たのに。
「それなんだけどね。まぁ、僕等も残り一体となって遊んでたわけじゃないんだ。」
あはは。と頭を掻きながらポケットからタバコを取り出す。
「んで、黒猫ちゃんに網を張っていてもらってたんだけど、他のやつらと違って今回の場合は引っ掛からなかったんだよ」
「な、何でですか？」
黒猫さんがそんなのも解らないのかと言いたそうに溜め息を吐く。
うるせー。此方は素人なんだよ。
「先程、主が言っておったろ。今回の奴は言わば親玉。霊としての格がそれなりに高いのだよ。それに魂レベルで定着していると。つまり、そうゆうことだ」
やれやれと頭を振る。
サッパリわかんねーよ！
ポカーンとアホ面をぶら下げていると久世さんが笑いながら捕捉する。
「つまりね。さっき黒猫ちゃんが言ってたように唯の霊であれば探すのは難しい。ただ霊と人が定着する際に世界に対して歪みが生じることはわかるね？」
「はい。その歪みをお互いの性質と繋がりの強さで最小限に押さえているのが僕と雪燈みたいな奴ですよね」
「その通り。まぁ、でも普通に定着したら歪みは絶対に生じる。君達は特例だよ。だから今回その歪みを捉えることができる網を張っ

ていたんだけど――――」
「捉えられなかった」
うんうん。と頷く。
「つまり…、僕等と一緒ってことですか！？」
「その通り！」
ビシッと人差し指を僕に向ける。
「だけどちょっと違うんだな。結果は同じだけど、過程が君達とは全く違う。一方的なもの――――だからさっき癒着って表現したんだよ。君等の場合はお互いの性質によって、天秤の上の危ういバランスをうまく保っている。それに比べ、悪霊と少女は浸食され、少女自身の存在が悪霊自身に上書きされかけているんだ」
成る程。今回の依頼の困難度と少女の危険度がヤバいってことだけは良くわかった。
だけど、どうする？
見つけるのが困難だからって、此所で指をくわえてるだけなんて論外だ。
どうする？どうする？
「――――どうすれば。」
ふと俯いていた顔を上げると久世さんと黒猫さんがニヤニヤ此方を見ていた。
「だから私は最初から提案していたろ。確実でかつ手間もかからん作戦を」
「まぁー、こうなっちゃったら仕様がないかな。一度やってることだし…。それに何より、今回は椎名君も珍しくやる気だし」
「え？まさか…」
二人のその反応に嫌な予感が襲ってくる。
隣で「つまり、どうゆうこと？」と頭を抱えてる浩市の言葉が酷く耳に残った。

4章（2）　作戦開始

第四章―？
「で、これだもんな。何が釣りをしようだ」
餌って僕かよ。とブツブツ文句が口をつく。
「くくくっ。餌にはもってこいじゃないか」
「うるへー。他人事だと思いやがって」
隣で楽しそうに笑っている雪燈を不貞腐れる様に睨み付ける。
そんな僕を見つめ彼女は笑う。
「大丈夫だ。お前は誰にもやらんよ。今回の奴は勿論のこと今後そんな身の程知らずがいたら、私が全員消滅させてやる」
「お、おう」
なんだよ。いきなりそんなこと言われたら反応に困るだろ。
あ、あれだよな。器としての俺が居なきゃ困るってことだよな。
ポリポリと少し赤くなった鼻先を掻く。
『はいはーい。いちゃつくのはいいけど、そこまでねー』
「おわ！」
「どうした！？」
突然頭に響いた声に跳び跳ねる。
―――し、心臓が止まるかと思った…って、
「久世さん！？」
『そうだよー。そろそろ相手も君を見つけるだろうし、何時までもノロケてないでシャキッとしてね』
聞き慣れたこの不真面目な声は確かに久世さんだ。
でも、この頭に直接聞こえてくるのはなんだ？
「なんだ？誰かと話してるのか？」
僕の反応に雪燈が心配そうに聞いてくるが、手で制す。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。久世さん、この声って何なんですか？」

『あぁ、そっかそっか。君に使うのは初めてだったよね。これは黒猫ちゃんの魔力を媒介にして、僕の声を君に直接伝えているんだよ』
魔力って…。
ほんとこの世界ってのは僕が知らないだけで、何でもありだな。少し頭が痛くなってきた。
――しかし、これ便利だな。僕も使えるようにならないかな。
『さて、作戦通り君が餌役。雪燈ちゃんが隣で待機。浩市君は何時でも飛び込める位置で、僕と黒猫ちゃんは離れた所で待機』
隣で雪燈も「声が聞こえるぞ」と驚いている。
『そして、君の周囲１００ｍに標的が侵入してきた所で僕等は結界を張り、逃がさないようにそれの維持に努める』
サラリと言ったけど、実際その規模の結界を二人だけで維持できるなんて、やっぱ化物クラスだよな。
『そして、直ぐに浩市君が飛び出し、フォワードとして標的の足を止める。その間、君等は完全な定着をし、渾身の一発をぶちかましてやれ』
ちらりと森の奥を見るとうっすらと浩市の姿が見える。
更に久世さんの言葉は続く。
『最後に標的を結界内に閉じ込める前に定着を始めないこと。これは万が一の保険だけど、警戒してこの罠に乗ってこない可能性があるからね』
いいね。と最後に久世さんからの言葉は途切れた。
さて、あとは待つだけなんだけど…
「本当に僕なんかに飛びつくのか？」
先程から疑問であり、その答え次第ではこの作戦を根本から覆す言葉が口に出る。
「まぁー、私が言うのもなんだが、お前は良く解らんが美味しそうなのは確かだな」
おいおい。雪燈さん、冗談になってねーすよ。
「てか、仮にそうだとして、僕の何処にそんな惹き付ける物がある

んだよ。そこら辺にいる普通の高校生だぞ」
「私にもわからんよ。ただ――」
『きた！』
「「！？」」
突然の久世さんの声に会話を中断し、身構える。
――マジかよ。本当に来たのかよ。僕はそんなに美味しそうなのか？
『君から見て１０時の方向。２００ｍ…いや、１５０ｍ！』
言われた方向を見るが何も視認できない。
くそっ！こう暗くちゃ、何も見えない！
黒猫さんが言ってた通り気配すら感じないや。
てか、今久世さん千里眼みたいなことも使ってないか？
標的の急な接近に対し、慌てるも思考は嫌に冷静になる。
『距離１００ｍ！結界を張るよ！！ちっ！思ったより、速い！』
「来たぞ！」
雪燈の声と同時に林の中から標的が飛び出す。間違い無く彼女だ。
学校で会った時よりも更に服はボロボロで、そこから覗く肌にはいたるところに切り傷や擦り傷が見える。
――全く吐き気がする。
飛び出した勢いのまま、周りを気にすることなく一直線に僕へと向かってくる。しかし、その直線上に割り込むように浩市が飛び込み、彼女をギリギリのところで止める。
「うおぉ！夕方の時よりパワフルになったじゃねーか！」
片膝をつくも完全に彼女の勢いを止める。
「浩市！大丈夫か！」
「問題無し！今日は家から拳サポも持ってきたし、いけるぜ！だから、お前はさっさと憑依に集中しろ！」
僕の呼び掛けにちらりと此方を見て答えを返すと、拳を覆うようにつけられた白いサポーターを見せてくる。
「あの馬鹿の言う通り、さっさと始めるぞ」

「お、おう」
浩市達のことも気になるが、今は彼女を救う為に今できる最大限の定着をしなければならない。
目を瞑り、精神を落ち着かせる。精神と精神、魂と魂をリンクさせ、自分の境界と彼女の境界を重ね合わせる。
―――そして、繋がる。
「よし！」
『早速力を一点に集中させるぞ！』
彼女の意志が鮮明に頭に響く。
今日の憑依はいつもより調子が良いな。これならいけるはずだ。
大丈夫。僕等なら彼女を救えるはずだ。
始まりだした浩市と杏子ちゃんの戦いをを尻目に左手に力を込める。
「一発だ。一発で彼女から霊を祓いきる力を溜めるぞ」
『溜まったとして、どのタイミングであいつらに割り込むのだ？』
現在、二人の戦闘は前回と同じで浩市の防戦一方だが、違うのはサポーターのお陰なのか繰り出される拳の一つ一つを丁寧に受け流している。
これならまだいけるはずだ。
「それはあいつに任せるよ」
『はは。丸投げだな』
うるへー。と一言返し、右手に意識を戻す。
集中しろ。彼女を救うために。
あの日の休日の様な日常を取り戻すために。
糞ったれなこの世界から奪い返すために。
「良平！まだか？」
「もうちょい待ってくれ！」
「りょーかい！」
彼女が放つ格闘家顔負けの右ストレートを上段に受け流し、続きざまの左足のミドルを逆の手で受け止める。

「あぁぁっ！」
雄叫びと共に受け止めた左足を無理矢理引き抜き、その足を軸として、ハイキック放つ。
「おいおい。制服でそんな攻撃したら、パンツが丸見えですよ！」
腰を落とすことで必殺の一撃をかわし、軽口を吐く。其処へ空振りしたはずの右足が角度を変え、垂直に降り下ろされる。
「嘘だろ！？」
突然の変化に、バランスを崩した体勢から初めてまともに攻撃を支える。
「うがっ！痛ってー」
両腕を交差させ、直撃は避けたが、あまりの衝撃に片膝を着いてしまう。
更に追い討ちを掛けるように右足を引き戻し、左足が顔面を捉える軌道で襲いかかる。
それを一瞬の判断で後方に転がるように避けることで、危機を回避する。
「はぁ、はぁ。今のは危なかったー」
互いの距離が５ｍくらいになるまで離れ、一息つく。相手も猛烈な応酬の後、ピタリと動きを止め、お互い様子を窺うような体勢になった。
「おい！良平！」
「なんだよ！」
彼女が動かないのを見ると、視線をそのままに僕を呼んできた。
「杏子ちゃんは空手の金メダリストとかなんかか？」
「こんな時に何馬鹿みたいなこと言ってんだよ！」
まったく。あんな大人しい子が空手なんかやってるわけないだろ。
「んでも、夕方の時は単調だった動きが今は読めなくなってきてんだよ！」
「どういうことだ？」
「だから！普通に空手の全国…いや、社会人レベルを相手してるみ

たいなんだよ！」
経験者が言うのならばそうなんだろうが、一体どういうことなんだ？
彼女は普通の中学生だったはずだ。とりつかれたことによって、パワーやスピードは肉体の限界まで無理矢理引き上げられたとしても“技術”まではそうはいかないはずだ。
「なんなんだよ…」
『不味い状況だね』
「久世さん！？」
杏子ちゃんの登場を最後に結界の維持に徹していたはずの彼の声が念話により聞こえてくる。
「不味いって、何がですか？」
『彼女が強くなっているんじゃなく、霊側の元々の性質が強まってるんだ。つまり、憑依が悪い方にどんどん進み、彼女の自我は無くなりかけているってことだよ。彼女にとりついた霊が生前空手の有段者かなんかだったんだろうね』
何時ものように淡々と語られる口調と反対にその内容は到底聞き流すことのできないものだった。

4章（3）　避逅

第四章――？
――――糞ったれ。
「雪燈」
『よし！今出来る最高の状態だ！いけるぞ！』
気づけば自身の右腕が今まで以上に蒼く輝いているのがわかる。
これなら！
「浩市！」
「やっと準備できたか！おっしゃあ！タイミング合わせろよ！」
その言葉とともに緊迫状態だった二人の空間を初めて浩市の方から詰め寄る。
一瞬遅れて杏子ちゃんの方も駆け出し、その勢いのまま左腕を突き出す。
其れを流石の反射神経で顔半分左側に反らすことで、ギリギリ避けると共に彼女の懐へと入り込む。
「杏子ちゃん、悪い！一発だけ当てるぞ！」
意識などとうに無いであろう彼女に断りを入れると、掌底を彼女の腹部に撃ち込む。
拳ではなく掌を、体の部位の中でも腹部を選んだことから、冗談めかした態度の中にあの馬鹿の躊躇いと優しさが伺える。
――――悪いな、嫌な役を押し付けて。
しかし、掌底と言っても放つのは空手有段者である浩市。
受けた彼女は苦悶の表情を浮かべ、一瞬動きを止める。
その一瞬を見逃さずに、伸びきった彼女の左腕を利用し、自身の背中を起点として彼女の体を投げる。
柔道の投げ技に近いが、どちらかというと喧嘩技なのだろう。
そのままの勢いで地面に倒すと、彼女の後ろをとり、羽交い締めにする。

今だ！
「良平！」
『行け！ノロマ！』
二人の呼び掛けと同時に右足に力を入れ一歩を踏み出す。
雪燈の暴言も気にせずにそのまま駆け抜け、一直線に彼女の元へと走る。
「うぉぉぉぉ！！！」
暴れだす杏子ちゃんの動きを何とか止める浩市の姿を視界に映し、その暴れる彼女の額へ向け自身の右腕を突き出す。
「さっさと消えろぉ！」
一声と共にぶつける様に己の掌を彼女の額に押し付ける。
「がぁぁぁぁ！！」
右腕と同様に彼女の頭部も蒼白く光りだし、獣の様に叫びだす。
『見苦しく、この世にしがみつくな！それにこれは私のモノだ』
「こんな悪い夢はいい加減終わりだ！あの平凡な日常に帰ってこいよ！」

瞬間右腕に激痛が走り出す。

『良平！』
「な！？」
痛みと共に急激に蒼い光が失われていく。
彼女の体からも、そして自身の右腕からも。
「ふ、ふざけんな！」
再度、右腕に意識を集中させる。
それでもあたかも右腕が自分のモノではないかの様にピクリとも動かない。
雪燈との定着にずれはない…。むしろ最高の状態と言ってもいい。
じゃあ、なんでだよ！
自問自答しながら、歯を食い縛る。

「こんな未来誰も望んじゃないんだよ！」
『椎名！これ以上は無理だ！私の力の伝達も上がらんし、何よりも悪霊ごと小娘の存在が壊れる！』
「くっそ野郎！！」
「良平、まだか！？」
思考の殆んどが真っ白になるほど血が上った頭を無理矢理にでも落ち着かせて現状を把握しようとする。
雪燈との定着化によって、一時的に霊感が強まり、彼女に取り付いた霊ははっきりと見える。
そして、その霊の精神と彼女の精神すら視れる状態の中、悪霊の精神に無理矢理引っ張られ、歪みをきたす彼女の存在すらも。
――こんなのってあるかよ！
しかし、あざ笑うかのように最高の回答を叩き出すため限界まで回転させていた頭に追い討ちをかけるように事態は目まぐるしく急展開する。
苦しみ出す彼女を視ていた視界は突如光に包まれたかと思うと、その視界全てを見たこともない膨大な文字列が浮かび上がった。
その一つ一つはどんどんと膨れ上がり、空間全体を包み込む。
理解はできないはずなのだが、意味としては直接脳に叩き込まれるように頭に響く。
『――容認できない歪みを感知。直ちにこれを補正または修正し、正しい形に在るべき姿に世界を戻せ――』
「な！？」
『こ、これは！』
雪燈からも驚きの声が発せられたことから、彼女にもこの不思議な光景は見えているのであろう。
『――再度警告。現状変わらないままならば歪みの原因を指摘から排除にかかる――』
再び響く声。
それからの変化は劇的だった。

痛みを通り越して感覚すら無くなりかけていた右腕が再度痛みを伴い、それと共に夥しい裂傷が生まれる。
「あぁあぁぁぁぁ！！」
『椎名！』
「良平！」
嘘みたいに吹き出す血液。
現状が見えていないのであろう、浩市からも叫ぶような声がする。
僕の足掻きも空しく、僕と雪燈の定着が外れ、体から彼女の意志が抜けていくのを感じながら、終わらない激痛にパンクした脳は自ら意識を手放した。

4章（4）　舞台裏にて

第四章――？

時間は少し遡る。

場所は良平達がいる所から少し離れた小山の山頂付近である。

そこで気だるそうに胡坐をかいている男がいた――久世である。

肩には器用に一匹の黒猫が乗っており、二人？はお互いに一点を見つめていた。

『彼女が強くなっているんじゃなく、霊側の元々の性質が強まってるんだ。つまり、憑依が悪い方にどんどん進み、彼女の自我は無くなりかけているってことだよ。彼女に憑りついた霊が生前空手の有段者かなんかだったんだろうね』

ここにはいない良平に向けて淡々と起こっている現象を述べる。

唯の説明。

そう締め括ると良平とターゲットの接触を確認した久世はよれよれの自身の黒いスーツの胸ポケットから煙草を取り出し、口に咥え一息つく。

「ふー。さて、思いの外予想通りの展開だね。まったく、これだから憑依型は面倒なんだよ。さて、これからどうなるかな」

「主には大体見えているのではないかね？」

また深く息を吸い込み、紫煙を吐き出す。

「いやー、彼は特別だからね。僕の予想を裏切ることは平気でやってくれるんじゃないかな」

黒猫さんはふん。とつまらなそうに鼻息をつく。

「前々から思っていたが、いたくあやつを過大評価するよな、主は。あんなのそこら辺にいる小僧だろうに。確かにあの小娘自身の霊力は相当なモノだろう。しかし、小僧自身にそれほどの価値があるとは思えないのだが――――」

「あるよ」

目線は一点から外さずに彼女に応えを返す。
「彼は…いや、彼等は【創り手】に至る素質があると僕は考えているんだよ」
先ほどと変わらず淡々と説明口調で話される言葉に不機嫌そうに毛繕いをしていた黒猫さんの反応は劇的に変化した。
「な！あやつ等如きが主が成り得なかった【創り手】になれると！？」
「まぁー、まだ推測の域をでないけどね。ただ…」
「ただ、なんじゃ？」
彼女のいつもは見ない焦っていると言っていい程の素早い応えに思わず苦笑してしまう。
まぁ、落ち着きなよ。と吸い殻を携帯灰皿に放り込むと彼女の頭をポンポンと優しく叩く。
「それを判断するには期は熟したんじゃないかな。彼等の【アクセス】の安定は勿論のこと、今回のターゲットは当に打ってつけだよ。あれなら…」
「あやつの干渉があると？」
「あぁ。本来、僕等人間は力を求めるにあたって3つのアプローチを目指した。僕や黒猫さんのような関係の隷属型。椎名君や雪燈ちゃんのような関係の憑依型。そして、己自身の力のみを追求した発現型。これら3つはそれぞれ異なるが根っ子の所は全て一緒さ。何かを代償にして、“ヤツ”に媚び諂うことで力を得ている」
「主よ…」
主の口から“ヤツ”という言葉が吐き捨てるように発せられたことで、黒猫は心配するように声を掛けるが、構わずに久世は話を続ける。
「結局、僕等人間はどこまで行っても、定められた・決められた条件でしか力を振るえない【読み手】なんだよ。それでも、ほんの一握りだけだけど、それに抗い、壊し、己の道を自身で創れる存在――それが【創り手】だ」

「主だって、まだそこに至る可能性は０ではないであろう！」
主の弱気な発言に毛を逆立てながら、声を荒げる。
その反応に苦笑すると黒猫さんの頭を優しく撫でる。
「あはははは。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ただ、彼が道は一つじゃないと教えてくれたんだよ」
「一つじゃない――――まさか！？」
長年の付き合いからなのか、久世の言葉の意味するとこを理解した黒猫は驚きの声を上げる。
「あぁ。あの人が僕に彼を紹介するだけあるよ。彼は面白い。そして、僕の夢を実現するには必要不可欠な存在かもしれない」
彼の頭の中ではこの先の出来事をどう想像しているかは分かり得ないが、その口元は自然と持ち上がる。
とても愉快そうに。
ただ、一つの違和感はその中に少し影がブレンドしていることだけだ。その表情を見て黒猫さんは視線を彼から下へと落とす。
「主は…いや、なんでもない。すまぬ、忘れてくれ」
「なんだい？途中でやめるなんて君らしくないじゃないか…、きた！」
表情を何時もの様などこか気怠く、飄々としたものに戻し彼女に話しかけたまさにその時、森から突如光が溢れ出した。
その光の洪水は少し離れた彼らの元まで辿り着く。
「はは！やっぱり君は最高だ！さて、あの光景を…、あの声を聴いて君はどう動く？――――椎名良平！」
その光景を見て久世は少年の様な笑顔で叫ぶ。あの光の中心にいるであろう良平に対して独り言の様に。
本当に愉しそうに。
世界を嘲笑うかのように。

4章（4）　舞台裏にて（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます。
さて、これが厨二病全開というやつでしょうか…
今回はほんのさわりですが、登場人物の能力について触れてみました。
ただ、更に風呂敷を広げただけかもしれませんが…
もう少し話が進んで来たら、用語集というか設定集というか、そんな様なものを作るべきですかね。

5章（1）　再動（前書き）

ペースが落ちてきてますが、なんとか定期的に更新していきたいと思いますので、宜しくお願いします。

5章（1）　再動

第五章――？

世界を塗りつぶす程、混じり気の無い緑が何処までも続く草原。

その自然が作り出したカーペットの上で僕は目を覚ました。

起き上がり、辺りを見回しても他人の気配は勿論のこと、生物と分類されるモノ全ての気配を感じることができなかった。

「また、ここか…」

そう。『また』だ。

俺はこの世界を知っている。そして、この世界が現実ではなく夢の中――――己の内なる心であることを。

つまりは俺の原風景というやつなのかもしれない。それでもここは確かに存在した一つの記憶。

僕が失ったものの一つ。

「やっぱり駄目か。ここへ来るとどうもそれまでの現実の記憶が曖昧だ」

ここに来るまでの経緯――――この世界に来たのだから俺は寝ているのだろう。を思い出そうとした所で届きそうだったものが離れていく感覚に襲われる。

溜息を一つし、立ち上がり背伸びをする。

「んー。どうせ今回も目が覚めたらここの事は忘れてしまうんだろうし、大人しく現実の俺が起きるまでここから動かないのが得策かな」

そう置かれた現状と対策を考えたところで、ふと自分の口に手を当て、苦笑してしまう。

「あぁ、そうだったな。毎度毎度、頭が混乱するけど、今の俺は俺であって僕じゃないんだよな」

ポリポリと頭を掻く。

「まったく、僕のヤツもこんな面倒なことにならなければよかった

のに…」
　まぁー、仕様がないか。
「さてと、いつもならもう少しで光に包まれて現実に戻ると思うんだけど・・・」
　さらに独り言を重ねるとこの世界の奥、視界のその先の方から緑のカーペットが光に包まれてきた。
「お、きたきた。さてまたこっちの俺は眠るとしますかね」
　ついに光は彼をも飲み込み世界は光に満たされた。そして、彼の体もその光の中に消えていった。
「僕がこの壊れた世界にどんな回答を出すのか楽しみにしてますか」
　最後に言葉を残し、全ては白く染まった。

　深い海の底から浮上するみたいな感覚と共に僕は目を開けた。まず最初に飛び込んだのは其処彼処にシミや汚れ、はたまたヒビなどがある汚い天井だった。
「ここは・・・」
「起きたかい？」
　無意識に呟いた言葉に誰かからの応えがあり、驚きつつも声のしたほうに視線を向ける。
「久世さん？」
「あれ？まだ寝惚けてるのかな？まったく、君は呑気だねー」
　視線の先、僕の寝ている場所からテーブルを挟んだ位置にあるソファーに久世さんは座っていた。それから自分の寝ている場所を確認すると彼が座っているソファーと形も色も同様なソファーであることがわかった。
　ここは…事務所か。
　靄がかかっていた頭が段々とすっきりしていき、自分が何処にいるのか把握していく。
　ふと自分の腕に包帯が巻かれているのに気が付く。一瞬の疑問と共に今の自分がこの場所で寝ていたことの違和感に突き当たる。

「あれ？なんで僕は事務所でなんか寝てるんだ…そうだ！彼女だ！久世さん！彼女は？杏子ちゃんはどうしたんですか！？そ、それに雪燈や浩市はどこだ？今は何時だ？この腕は…」
「あー！ストップ！ストップ！」
思考の覚醒と共に溢れる様に押し寄せる疑問の数々に頭がパンクしそうになりかけたところで慌てたように久世さんが手を叩く。
「まったく。君は落ち着きがないなー。そんなに一編に質問されたら答えられないじゃないか。ちょっとは落ち着きなよ」
やれやれ念の為に起きててよかったよ。と呆れたように首を振りポケットから煙草を取り出し火をつける。
「ふー。さてどこから答えればいいかな」
まるで普段と変わらない久世さんの様子に淡い期待が頭に過るが、続く言葉にそれは脆くも崩された。
「結果から言うと何も解決していないよ」
「な、何も？」
「まぁ、待ちなよ。順を追って説明するよ。あの森での少女との接触後、君は意識を失い倒れた」
その言葉にあの森での不可思議な現象を思い出す。
「そ、そうだ！あの光は…あの文字や言葉はなん――――」
突然、顔の前に久世さんの掌が突き出される。
「あれの説明は今は置いとこう」
有無を言わさないその言葉と見たことのない彼の真剣な顔に出かかった疑問が止まる。
それを確認すると満足そうに話を続ける。
「じゃあ、続けるよ？その後、現場に駆け付けた僕と黒猫さんで君を回収し、君との接触でターゲットである少女も意識を失って倒れていたからついでに僕の札で拘束し、ここへ連れて来た。そして、次の質問の他の皆のことだけど、君をソファーに横にしたあと雪燈ちゃんは否定したけど、消耗が激しかったから無理矢理に隣の部屋に寝かしているよ。寝かしているというより、僕の結界内に入れて

霊力の回復をしているってことだけどね。そして、浩市君と黒猫ちゃんは拘束した少女と共に上のフロアにいるよ」
そう淡々とした口調で一息に説明すると咥えていた煙草から深く煙を吸い、一気に込み吐き出す。
「あぁ、そうそう。それで今はあれから2時間経った午前3時で、その腕については最初の質問と同じで後回しにさせてもらうけど、治療は僕がしといたから心配ないよ」
もう一度包帯の巻かれた自分の腕を見る。痛みは既に無く、丁寧に治療してくれたのか包帯には血が滲んだ後も無く、清潔な真っ白な状態である。
「大まかですが現在の状況はわかりました。細かいことも納得のいかないことも今は置いときます」
散らかり放題のグチャグチャだった情報を一つ一つ噛み砕き、整理するように言葉を紡ぐ。そして、一息入れると俯いていた顔を上げ、久世さんの顔を真っ直ぐに見て決意を告げる。
「少女の…いや、杏子ちゃんに会わせて下さい。今の話じゃ、まだ悪霊が彼女に憑りついたままなんでしょう？なら一秒でも早く取り除かなきゃ」
「それはまだ駄目だよ」
「は？」
少女を一秒でも早く、この理不尽な世界から救い出すために当然了承を得られるものだと確信していた思考は彼の口から出た否定の言葉を認識するために一瞬固まる。
「だ、駄目って…じ、時間がないんですよ！？むしろここへ着いた際に直ぐにでも僕の事を殴ってでも叩き起こしてくれたら良かったんですよ！」
「はい、またまたストップ」
思考が戻り、加速度的に熱くなる頭を気にせず言葉を投げかけるとそれでも依然として変わらない態度のまま先程と同様に掌を顔の前に向けられる。

「僕は『まだ』って言ったろ？そりゃー、僕だってさっさと解決して大円団を迎えたいところだけど現状はそんなに甘い状況じゃないんだよ。実際に一度失敗している訳だしね」
言葉を止められ、次第に冷静になりつつも先程の己の身勝手差に萎縮していく僕を見つめつつ、新しい煙草を口に咥えると子供にモノを教えるようにゆっくりと落ち着かせるように話す。
「まったく、君らしくないじゃないか。この件に関しては君はどうも熱くなりやすいようだけど少し落ち着きなよ。そんなんじゃ解決するものも解決しないよ」
また、やってしまった。
熱くなると周りが見えなくなって、思考も普段と比べられないくらい低下するのは僕の悪い所だ。
———落ち着け。彼女を救う為に色々なものを見失うな。
「解決するものも…って、手段はあるってことですか？」
「その通り。少し落ち着いたみたいだね。じゃあ、いいかい？『まだ駄目だ』と言ったのは今の君の言葉への答えにもなるんだけど、ここへ戻ってきた時の君と雪燈ちゃんの消耗は本当に酷いものだったんだよ」
その言葉につい数時間前のあの森での光景がまたフラッシュバックする。
一度こちらの顔色を伺うように見ると久世さんは話を続ける。
「特に雪燈ちゃんの方は強がっていたけど、酷いものだったんだ。無理矢理に定着化を続けたために彼女の精神の領域はとても不安定なものになっていたんだよ。それで僕は時間が無いのを承知で君らの回復を優先することにしたんだ」
静寂が痛いと感じる中、ただ淡々とした口調で久世さんの言葉は続く。
その言葉一つ一つが己の心に響く。
「杏子ちゃんだっけ？彼女と悪霊との癒着は変わらずに酷い有様だよ。流石に明日の夜を迎えることはできないと思う。正直もう僕の

手札には勝てるカードが無い。もともと僕は祓う側じゃなく、使役する側だからね。だからこそ君達に賭けるために少しでも君らのコンディションを高い状態にしたかったんだ。初めから言ってたように可能性として君だけじゃ駄目だし、彼女だけでも駄目なんだ。君達二人でなければね。これが理由じゃ弱いかい？」

彼には珍しく長々と語ると最後に苦笑しながら僕に質問を投げかける。

どうするのかと。問いかける様に。

そんなの決まっている。

決意は十分だ。反省も後で嫌というほどしてやる。ただ…ただ後悔だけは死んでも御免だ。

もう一度彼の顔を見る。

「杏子ちゃんに会わせて下さい。ただ、その前に———雪燈と話をさせてください。過去最高の定着をするには一度アイツと話さないとならない気がします」

先ほどと同じ言葉を紡ぐ。違うのはその言葉に込められた思いの違い。そして、続けるように自分のパートナーとの対話を求める。

その僕の様子に久世さんは一瞬目を見開くも直ぐにいつものニヤケ面に戻す。

「やっぱり若いっていいね。流石の僕も羨ましいという感情を抱いてしまうよ。いいよ。ちゃんと向き合ってきなよ」

「はい」

そう言うと彼は咥えていた煙草を灰皿に押付けて消すと、事務所の入り口とは反対にある奥の扉を指差す。

「タイムリミットは日の出の5時まで。だから、与えられる時間はギリギリで見ても今から30分しかないけど、これがラストチャンスなんだし、後悔のない様にね」

5章（2）　僕と彼女と

第五章―？

久世さんに指し示されたドアの前に立つ。

何処にでもありそうな無機質なスチール製のドアではあるが、ドアノブに伸ばした手が止まる。

部屋に入ることを躊躇っているのは、なにもこの事務所に出入りする様になってから初めて彼のプライベートの断片でも感じられる空間に立ち入るからではない。

ただ単純にこの扉を開け、彼女の顔を見て、彼女に伝える言葉が見つからないのだ。

今更、何を躊躇ってるんだ僕は。

「どうしたんだい？早く入らないのかい？時間はそうあるわけじゃないよ」

後ろから掛けられた言葉が背中を押す。

多分、今後ろを見たらヘラヘラとしたニヤケ面が視界に飛び込むのだろう。

こんな僕の心情なんてお見通しなのだろう。

唯、僕と彼女の関係を今一度再認識するためには必要なことだし、杏子ちゃんを救うためには通らなければならないことなのだろう。

―――そうだ。今は時間が無いんだ！

「今、入りますよ！」

多少、投げやりな言葉とともに勢いに任せて扉を開け、室内へと歩を進めた。

パタンと開けた時とは正反対に静かに扉を閉める。特に理由は無いが中に入った部屋は電気が消え、雪燈が寝ているという事実を思い出し、無意識的にそうなってしまった。

明るい所から突然――といっても自分から入ったのだが――の暗闇に視界は狭くなり、つい反射で電気のスイッチを探してしまう。

「点けないでくれ」
有無を言わせないその声にスイッチを探すために上げた腕が止まる。
「なんだ、起きてたのか」
「貴様と私は憑依してなくてもリンクはしているんだ。お前が目を覚ました時には私も目を覚ましたよ」
雪燈だけじゃなく、僕も起こさなかったのはそういう理由もあったのか。ん？でも朝のあいつは寝起き悪いぞ。
場違いな思考を止める様にふーっと溜息を一つ吐く。
「なんで、電気を点けちゃ駄目なんだよ。これじゃあ、何も見えないぞ」
「私は見える」
だから、僕は見えないんだよ！
彼女の短い返答に反論しようとした言葉を飲み込む。
よくよく考えればこれで顔を見なくて話せるからいいのか――――
雪燈からは見えてるっぽいけど。
「まぁ、いいや。じゃあ、このまま話させてもらうよ。気分はどうだ？」
声のした方向で大体の位置を掴み、暗闇の向こうに居るであろう彼女に話しかける。
「？」
しかし、雪燈からの応えが中々こないことに頭を捻る。
「お…」
「こっちへ来てくれ」
再度の呼びかけを遮る様に応えられた言葉は、先の自分の質問への答えとはまったく異なるものであった。
――――なんか調子狂うな。
まともな会話のキャッチボールができない状態につい頭を掻く。
「そっちへ行くにも、こっちはお前が何処にいるのかも正確にはわからないんだぞ」

「その向きのまま前に5歩、右に1歩」
「…なんなんだよ」
変わらずの彼女の自分勝手な言葉ではあるが取り敢えず指示に従い、暗闇の中、歩を進める。
うおっ！今なんか蹴っ飛ばしたぞ。全く久世さんのことだから、どうせこの部屋も散らかってるんだろうな。
「次はどうするんだ？」
指示されただろう位置まで来ると投げやり気味に次の指示を仰ぐ。
「そのまま後ろを振り向き、腰を落とせ」
先ほどとは異なり、声が目の前から聞こえたことから直ぐ傍にいることがわかる。
「はいはい」
大人しく言われた通りにすると柔らかいモノに座ることができた。
ベッドか。
「私は…私の力は通用しなかったのか？」
「は？」
腰を据えた所でやっと会話らしい言葉が投げかけられたが、その中身に思わず素っ頓狂な反応をしてしまう。
「よく分からん現象に邪魔されたとは言え、私の力は小娘を助けることができなかった」
あれ？これはもしかしなくても雪燈さん落ち込んでらっっしゃる？
場違いな状況ではあるが珍しい彼女の態度につい不真面目な思考に陥る。
「口では大きいことを言っても、現実ではどうだ」
自嘲するように、独白の様に彼女の言葉は更に続く。
こりゃあ、重症だな。
「お前にも大きな怪我を負わせ、私自身もこの様だ」
背中に掛けられる後ろから聞こえるその声に耳を傾けていたが、今の彼女の状態を想像すると何故か段々と腹が立ってきた。
「私のこの力はなんの為にあるのだろうな。肝心な時に役に立たな

い力なんて、あっても仕様がないよな」
――苛々する。
「私は…」
「ばーか」
「わ…なんだと？」
彼女の呪詛の様に続けられる言葉を投げやりに止める。
なんだか無償に腹が立ってきたぞ。こっちはこっちで色々と悩むことがあったけど、もうそんなの糞食らえだ。
「馬鹿に馬鹿って言って何が悪いんだよ。何度でも言ってやる。ばーか」
一度口にしたら、そこからは止まらない。いや、止める気なんて更々無くなった。
「貴様っ！」
「だって、馬鹿だろ！」
「っ！？」
「何勝手に一人で落ち込んでんだよ！何勝手に一人で抱え込んでんだよ！何勝手に終わらそうとしてんだよ！」
相手に話しかける言葉ではなく、それはもう殆ど叫びに近いものだった。
少しはこの暗闇に目が慣れてきたといってもまだ視界がはっきりしない中、雪燈がいるであろう場所――自分の後ろ――を振り向く。
「そんなキャラじゃないだろ、お前は。らしくねーよ。全然らしくないじゃないか。あれ位の事で諦めるのかよ？」
視線を逸らさずに、ただ一点を見つめる。僕からは見えないけど、あいつには僕のことが見えてるんだ。
「し、しかたないだろ！私は、私の力は届かなかった！ただ、あの小娘を苦しめただけだった！どうすればいいんだ！お前は私にどうさせたいんだ！！」
「“僕”が居るだろ！」
「！？」

それはいつもどこか余裕がある素振りを崩さない雪燈の本当の叫びだったのだろう。ただその紡ぎだされた言葉には先ほどからそうだが“足りないモノ”がある。僕にはそれが堪らなく我慢ならない。

「今までだって僕等二人でやってきただろ。今回は偶々上手くいかなかっただけじゃないか。確かに結果だけ見たらお前の力が届かなかったってことになるけど、僕もいたんだ。今は唯お前の受け皿にしかなってやれないし、それしかできない僕の力不足も原因だろ！」

更に僕は言葉を続ける。ちくしょう！こんなの僕のキャラですらない！でも、駄目なんだ。ここが多分僕等の境界線なんだ。言わば分水嶺。

ここは、ここだけは間違えちゃいけないんだ。

「も、元から私はお前だけでどうこうできるとは思って…」

「そうだよ！唯の平凡な高校生に除霊？できるか！って感じだよ。というか出来てたまるか！ただ、ただそれは僕一人の時だろ！僕等は二人だろ！さっきからのお前の言葉には一つも“僕”が入ってないじゃないか！」

「実際のとこ、こんな幽霊に憑りつかれて、お前だって迷惑だろう！どうだ？この際―――」

「それ以上言ったらぶん殴るぞ！！」

もう自分で何を言ってるのかすらわからなくなってきたけど、一々言葉を選ぶのすら面倒だ。

「いいか？僕はまだ諦めてない。あの少女を助ける気満々だ。ただそのためには僕一人じゃ無理なんだ。お前の力が必要なんだよ。ウダウダ言ってたって何も始まらないし、何も解決しない。だから、力を貸してくれ！」

一気に捲くし立てる様に喋り、そこで言葉を止める。ほとんど叫びに近い言葉だったために頬は上気し、多少の息苦しさすら感じる。

「…く、く…くっ」

一瞬だけ静寂が戻った部屋に彼女の押し堪える声だけがする。

「お…」

「あははは っ、ははっ。あはははははっ！」
「雪燈さん！？」
先程までの息苦しいまでに張り詰めた空気を綺麗サッパリぶち壊す様に彼女の笑い声が部屋に響き渡る。
予想外の事態に流石の緊迫した感情を忘れ、つい上擦った声を上げてしまう。
「どうし…」
「あはははははっ！！悪い悪い。くくっ。いや、これが笑わずに居られるか！貴様如きが私に説教などそれだけで片腹痛いのに、散々宣った挙句に結局最後は力を貸してくれだと？面白すぎるわ！」
「うるせー！だって、その通りなんだから仕様がないだろ！」
本当に可笑しげに、楽しそうに彼女は笑う。
姿や表情は見えない状況ではあるが、暗闇からでも感じるその雰囲気は先程の重い空気を微塵も感じさせなかった。
「あはははっ！確かに私らしくなかったな。貴様の言葉を聞いたら、悩んでいた自分が馬鹿らしくなるわ！」
「なんだそれ！」
反発する言葉とは異なり、己から張り詰めた空気が無くなる――もちろん彼女からも――のがわかる。
――なんとかなったかな。
「いや…あははっ。すまんすまん。くっくくっ。先程の私は忘れてくれ」
「まったく…。いや、結構良い物見れたよ。うん」
「記憶を無くすのは得意だろ？」
「冗談になってねーすよ」
先程までの会話が嘘の様に自然に何時も通りの会話が戻ってくる。
顔は見えないことから、彼女が今どんな表情をしているかはわからないけど、想像できる。
自分の顔を自分で見ることはできないけど、どんな表情しているかは想像できる。

――たぶん…いや、絶対同じ表情をしているはずだ。
「よしっ！馬鹿みたいに足踏みしてるのは終わりにしよう。椎名！」
「ん？」
「もう一度さっきの言葉を言ってくれ」
「さっきの？んー、僕はまだ諦めてない？」
頭を捻りながらも先程の自分の言葉を思い出す。
「違う違う。その後だ」
「その後…なんだっけ？」
「殺すぞ」
「わかった！わかった！」
何時もの様に戻ったのはいいけど、こえーよ！
すぐに思い出しはしたが、改めて先程の自分の台詞を口にするのは抵抗――というか単純に恥ずかしい――があったため一度惚けてみるも洒落にならない後ろからのプレッシャーに命の危険を感じてしまった。
たくっ。冗談の通じない奴だなー。
この暗闇が不幸中の幸いかと考えたところで相手には丸見えだという事実に絶望する。
「はぁー。一度しか言わないぞ」
「あぁ。十分だ」
「お前の力が必要だ。力を貸してくれ」
一瞬の静寂の後、頼もしい言葉が空気を伝わり、僕の耳にまで届く。
「ふん。私はいつもの様にいつもの如く、お前の望みのためにただ力を貸すだけだよ。あとはお前次第だ」
やっぱり敵わないな。なんだかんだ言ったって、いつも最後はこの台詞の様に助けられる。救われる。許される。
「雪燈」
「なんだ？」
自身の緩んだ口元を直そうとはせずに僕は言葉を口にする。

「ありがとう」

5章（2）　僕と彼女と（後書き）

ここまでお読み頂きありがとうございます。
取り敢えず、第一章というのかこの話までは今のペースで進んでいきたいと思いますので、稚拙な文ですが、これからも宜しくお願いします。

5章（3）　予期せぬこと

第五章―？

話も終わり、相変わらずの暗闇の中、耳元から聞こえる雪燈の誘導の元になんとか無事にドアの前に辿り着く。

耳元と言うとなんか甘い状況を連想させるが、単純に顔を見たら殺すなどと嘯き、僕の背中に張り付くようにして彼女が動かないからだ。

「大分時間も経ってるだろうし、行こうか」

「あぁ。準備は十全であり、万全だ」

最後の確認をし、勢いよくドアを開ける。

今まで暗いところに居たことで突然の光に目を細めるが、最初に飛び込んできたソファーに座る久世さんの表情を見た瞬間、勢いが止まる。

「…なんですか？そのニヤケ面は」

「いやー、若いっていいねー。青春だねー。僕と黒猫ちゃんの間にも君達の様な時代があったんだろうねー。ん？あったかなぁ…」

なおもヘラヘラと笑いながら吐き出された言葉に空気が固まる。

本人は途中から独り言に変わり、何かブツブツと言い出す。

そんな、久世さんを置いといて、チラリと視線を後ろのドアに移す。

そう何処にでもありそうな無機質なスチール製のドアだ。

防音性なんて、これっぽっちも考慮されて作られたものじゃない。

「よし！取り敢えず、僕等は置いといて…これこそパートナーってやつだよねー。信頼関係ってやつ？聞いててこっちが恥ずかしくなったよ」

「貴様！盗み聞きしてたのか！？」

久世さんの言葉に耐えられなくなった雪燈が僕の背中から飛び出

し、実体に干渉できないのも忘れて殴りかかろうとするが、その拳は彼がポケットから出した一枚の札とぶつかり止まる。
おぉ、あんな使い方もあるのか。
「ぐぬっ！！」
「嫌だなー。あんな大声出されたら、聞く気がなくても聞こえてくるよ」
「やはり貴様は死ね！今死ね！すぐ死ね！」
一人全く違うことに感心していると更に二人の衝突は激しさを増す。
ソファーに座ったまま、一歩も動かずに札だけで彼女の雪崩の様な攻撃を受け切ると、一瞬の隙を見てソファーの背もたれを使い、器用にバク転し、ソファーの後ろに着地すると彼女から距離をとる。
なんてアクロバティックな。というか、避ける必要もないのに避ける久世さんも久世さんだが、殴ることができないのに、殴り続ける雪燈も雪燈だ。
「君と遊ぶのも楽しいけど、タイムリミットの３０分だ。彼女の元に行かなくていいのかい？」
「くっ…！」
久世さんの言葉にピタリと雪燈の動きが止まる。
その光景を見て、満足した様に笑みを浮かべると入り口のドアへと足を向ける。
慌てて彼の後ろに続くように追いかけると、雪燈も大人しく僕の背中に張り付いてきた。
「はぁ…。取り敢えず、目先の目標をさっさと解決しちまおう。というかそれが一番重要なんだから、余り余計な力使うなよな」
「殺す。殺す。殺す…」
こえーよ！！
前門の虎である杏子ちゃんの問題もあるのに、まさか味方陣営に後門の狼がいるとは聞いてないぞ———頭痛い。
自分の置かれている状況に頭痛がし、堪らず頭を抱える。

「どうしたんだい？早く着いてきなよ」
そんな僕を見て呆れた顔をしながら久世さんが話しかける。
———あんたが原因の一つなんだよ！
もう悩むのすら面倒になってきたため、溜息一つと引き換えに気持ちを切り替え、階段に足を掛ける。
「言われなくとも今行きますよ」
未だ何処かの世界にトリップ中の雪燈も一応、僕の後ろに着いて来る。
その後は三人とも会話もなく、黙々と階段を昇る。
このビルは六階建てで久世さんの事務所があるのは三階である。四階、五階と上がり、そして遂に最上階である六階まで辿り着いてしまった。
それまでのフロアは事務所のある三階も含めて一フロアにドアは一つだけという贅沢な作りをしていたのに対し、このフロアだけはドアが三つあった。
階段を上がりきった所で浩市と黒猫さんが待っていると思っていたが、果たして———そこにいたのはそこにいるはずではない人物であった。
椎名伊織が其処にはいた。

5章（3）　予期せぬこと（後書き）

今回も短いですね。
話数ごとに文章の長さがまちまちなのをどうにかしないと…
正直、エディタで作成→話毎にチェック→章毎にチェック→投稿時にチェック→投稿。という流れなのですが、どれもがその日の気分に左右されるという欠点が…。
継続してある程度の文章が書けるようになりたい。

5章（4）　兄妹

第五章――？

階段を昇りきった所にいたのは浩市でも黒猫さんでもなく、妹の伊織だった。

「え？は？な、なんで？」

「こ、小娘」

後ろを振り向けば僕と同じ様にアホ面の雪燈が見れるだろうけど、それよりも問題はこの状況だ――――なんでお前がいるんだよ。

「お兄ちゃん」

「なんでお前がここにいるんだよ！？」

此方を見る妹の目は強い力を宿している。ただ真っ直ぐに。

はぐらかされない、逃がさないとその瞳には様々な感情が含まれているのがわかる。

「お。起きたんか？」

「全くノンビリしおって、この無能が」

タイミング良く三つある扉のうち、一番右にある扉が開き、そこから浩市と黒猫さんが出てくる。

「お前等！」

この良くわからない現状を説明してくれる、もしくは打破してくれることを期待して二人に目を向ける。

「雪燈ちゃんとはちゃんと話せたか？」

「まったく、小僧にこんな出来の良い妹がいるとはな」

「あ！浩市さん、黒猫さん」

しかし、妹の姿を見た二人は驚くこともなく自然に話し出す。

え？ちょっと待ってください。なんですか、ここに伊織がいることがあたかも当たり前な様なお二人の反応は！というか伊織も猫が普通に喋ってることにはスルーですか！？

結構、オカルト関係には耐性があった僕でもびっくりしたんだぞ。

「こんな妹がいるなら早く紹介してほしかったよ。まったく水臭いなー、椎名君は」
アンタもか！
「ま、待ってくれ！なんで皆この状況を普通でいるんだよ！色々と突っ込むことあんだろ！というかまずなんで此処に伊織がいるんだよ？」
「あぁ、悪い俺が教えたわ」
あはは。と浩市が手を挙げる。
おっけー！なんか良くわからないけど犯人だけはわかったわ。
「ちょっとこい！」
「お兄ちゃん、違うの！私が浩市さんに連絡したの！」
「お前は黙ってろ！！」
「！！」
突然の僕の大声に、びっくんと体を反応させ、口を閉じる。
混乱する頭の中、つい出してしまった大声に、後悔するように自身の唇を噛む。
———コイツにだけは知られたくなかったのに…
「悪い」
「うお！」
一言そう呟くと、有無を言わさず浩市の首根っこを掴み、黒猫さん達が先ほど出てきた一番右の部屋に連れ込み二人っきりになると勢いよくドアを閉める。
「あのー。良平君？」
「とりあえず全部話せ」
「やだなー。顔が怖いですよ」
「は、な、せ！」
「は、はい！」
それから慌てたように浩市は僕が倒れたあの森から今までのことを話し出した。
久世さんの話の様にこの事務所に戻り、僕と雪燈を寝かし付け、

杏子ちゃんをこの部屋の隣――真ん中の部屋に久世さんと黒猫さんが結界を張ったあと閉じ込めた。
そしてその後残った三人で今後のことを話し合おうとしたところで浩市が自身の携帯への着信に気づいたそうだ。勿論、相手は伊織。
当初、折り返しの電話をかけることを渋ったそうだが久世さんと黒猫さんの突然の食付きと「彼女も部外者じゃないんだろ？寧ろ被害者に近いんじゃないかな」という彼の言葉に意を決して連絡したそうだ。
そんなこんなで伊織が事務所に来て、それぞれの自己紹介――流石に最初は黒猫さんに驚いたらしい――を踏まえ、事の真相を全て話し、今に至るらしい。
「兄と話をさせてください」
全てを聞き終えたあと隣の部屋において、杏子ちゃんの姿を見た伊織はそれだけ呟いてあの場所から動かなかったらしい。
「といった所です。あのー、良平さん？」
浩市の口から出た内容に頭を抱えていたが、吹っ切れたように馬鹿を見る。
――この日が来たのかな。
「状況は良くわかった。納得いかないことだらけだけども時間がない。それにはぐらかし続けられる内容でもないしな。浩市」
「は、はい！」
「覚えとけよ。それと逃げられない機会を作ってくれてありがとな」
溜息と共に扉を開け、浩市と外に出る。そこには先ほどと変わらない表情のまま伊織が静かに僕を待っていた。
「悪い、待たせた」
「ううん」
「全部聞いたんだな」
「うん」
「なんか落ち着いてんだな」

「ほんとは頭の中まだグルグルしてるし、聞きたいことなんか山ほどあるよ」
「そっか」
ほんと出来た妹だわ。僕が妹の立場なら喚き散らしてんぞ。
「それでも今は時間がないんでしょ？杏子ちゃんを救ってくれるんだよね？お兄ちゃんならそれができるんでしょ？」
「あぁ。それだけは約束する。この糞みたいな現実から彼女を救うよ」
妹の強い視線から真っ直ぐに逃げずに応える。
「じゃあ、待ってる。全部終わったら覚悟しといてよね」
「あぁ。もちろんだ。全部丸く収まったら土下座でもなんでもしてやるよ」
———まったく、これから大仕事が待っているってのに、さらに追加で難題が増えたな。
伊織はこれで会話は終わりとでも言うように一度目を瞑ると、辺りをキョロキョロと見渡す。
「どうした？」
「雪燈さんだっけ？此処に居るの？」
「あぁ。僕の後ろにいるよ」
そう応えると彼女には見えないであろう雪燈に対して———僕の後ろの壁に目を向ける。
「な、なんだ」
「お兄ちゃんと杏子ちゃんを宜しく御願いします」
そう応えると伊織は深く頭を下げた。
「できればちゃんと会話してみたいし、どんな人なのか見てみたいけど、これからもお兄ちゃんを助けてあげてください」
「ふん！い、言われんでもそのつもりだ」
あたふたしながらも雪燈が返答する———まぁ、聞こえてないんだけどね。
これじゃあ、どちらが年上だかわかんないな。とポリポリと頬

を掻く。
　妹の普段見せない一面に兄貴だからなのか、照れ臭い台詞だよな。と思っているとなんのことはない言われた本人である彼女も少し挙動不審だった。
「雪燈さん、なんだって？」
「任せろ。だってさ」
「そっか。良かった」
　僕の返事に満足そうに笑顔になる。
　もう失敗は許されないし、赦されない。
　その笑顔を見て改めて自分の心の奥底にズッシリと重みが加わる。唯それは不快なものではなく、自分の芯を曲げないよう、補強するように加わるものである。
　待てよ。
　流されそうになる会話の中で一つだけ違和感を見つける。
「なぁ、伊織。雪燈っていう名前に何か心当たりはないのか？」
「ん？心当たりって？お兄ちゃんが今まで黙ってたんだから知るわけ無いじゃん」
　なにかがおかしい。
「いや、そういうのじゃなくて！その幼少の頃に聞いたことあるとかそういうのは…」
　雪燈が僕の幼い頃の知り合いならば、今まで一緒に生活してきた伊織が知らないのは少し考え難いんじゃないのか…
「そろそろ時間だよー」
　タイミング良く久世さんが喋る。
　その声に現実に戻され、この階に上がってから相当時間が経っていることに気づく。慌てて久世さんを見ると楽しそうに笑いながら自身の腕に着けている時計を指差している。
「シスコンの君の事を考えて２０分余裕見てたたんだけど、流石にそろそろ時間だよ。お話の続きは全てが終わってからにしないかな」
「はい――――って、シスコンじゃねー！」

「お兄ちゃん…」
不審者を見るような目を実の兄に向けるな！
「やはりお前そっちの――――うがっ！」
頭の可笑しなコメントを良いかけた馬鹿には問答無用で殴る。
「あんまり遊んでると本当に時間がなくなるよー」
「誰のせいですか！」
僕のツッコミにあははは。と悪ぶりもせずに笑い出す。その笑いが重くなりかけていた此処の空気を少しだけ和らげた気がした。本当に気がしただけで、あの人の中には場を和ませようなんて気は更々無くて、ただ単純に何も考えていないだけな気がするけど。
「はぁー、全く！わかりましたよ。取り敢えず、杏子ちゃんを助けるまでは難しい考え事は無しの方向でいきます！」
とりあえずは全て置いとこう。まずは目先の問題を片付けなければ。
全くこんな日常会話をしていると今の現状が希薄になっていく。
「でもそれが君の取り戻したいものだろ？」
「！？」
久世さんの言葉に息が詰まる――――あれ？心の声が聞かれた？
「ならさっさと解決してきなよ」
「そうだぞ。俺はまだ杏子ちゃんの笑顔をみてないんだからな」
「ふん。能無しなりに足掻く事だな」
言いたい事言ってくれる。
三者三様の言葉に、はいはい。と御座なりに手を挙げることで返事にし、ドアノブに手を掛け様とした所でもう一度雫に呼び止められる。
「お兄ちゃん」
「ん？」
「頑張ってね」
「あぁ」
振り返りはせずに再度手を上げ、その勢いのまま扉を開ける。そ

して、少女と三度目の邂逅をするために部屋の中に入った。

5章（4）　兄妹（後書き）

絶賛ネット環境不良の蒼井です。
福島は今日は台風ですね。ずぶ濡れです。
全く、内蔵型で山奥に行っても問題なくネットができるＰＣが早く発売しないですかね。

5章（5）　咆哮と伸ばした両手

第五章――？

扉を閉めるとまず目に入ってきたのは部屋全体を埋め尽くすように置かれた蝋燭だった。そのおかげで部屋の中は電気が点いてなくてもそれなりに明るい。

「いやはや、これはなんというか趣きがあるというか――――」

「物々しいな」

「だな」

部屋の中心、蝋燭に囲まれる――蝋燭は部屋の周りを囲うように置かれている――その中心には幾何学的な模様が描かれており、そこに少女は眠るように倒れていた。

これもあの人が得意とする魔術ってやつなんだろうな。まったく、オカルト何でもこい。って感じだな。

「さて、色々と言ってきたけど、実際問題どうすっか？」

「またまたノープランか？」

「うるへー」

頭に思い出されるのはあの森での不可解な現象。久世さんからは何も情報を得ることができなかった。

あの光景。

あの声。

答えを聞くことはできなかったが、なんとなくあれこそが普段、口にしている『世界』というものではないかと予想する。歪みを正すために働いた抑止力。抵抗することすら、足掻くことすら許されなかった。ただ、それならば尚更負けるわけにはいかない。

しかも少女に霊が取り憑き、こんな状態にさせてしまうのは見過ごして、救うのには修正するなんてことふざけてやがる。

そんな気紛れなことに振り回されるのはごめんだ！

「ふー」

脳裏に焼き付いたものを振り払うかのように一度頭を振り、床に倒れている少女に目を向ける。
その汚れた制服、ボサボサな髪の毛を見ると胸に痛みが走る。
「取り敢えず全力全開だ。僕等にやれることなんて、はなからそれしかないんだ。もし万が一あの森での現象が起きたとしても次は抵抗してみせる――――いや、絶対にしてやる。個人的に色々と恨みもあるしな」
「文字通り世界と喧嘩か」
僕の言葉に楽しそうに雪燈が笑う。
「いきますか！」
「あぁ！」
瞼を閉じ、雪燈の精神を探す。そして自分のモノに其れを重ね合わせる。慎重に、けれど力強く。歯車がかみ合ったようにカチリと二つの精神――――それが作り出す境界が定着する。
「ふー。状態はどうだ？」
『問題ない。寧ろ良いくらいだ』
彼女の声が鮮明に聞こえる。そこから、あの森での定着よりも良い状態であることがわかる。
「気のせいかもしれないけど、なんかここ最近で一気に憑依の状態が良くなってきてるな」
『気のせいではないだろ。それほど私たちも経験値を稼いでるってことだろ』
「そうゆうもんかねー」
頭を捻りながらも少女の元に歩いていく。すぐ傍まで来ると膝をつき彼女の額に手を当てる。傍まで来ることで薄暗い部屋の中でも少女の表情を見ることができた。その顔は意識は無いにしろ未だ苦痛に歪んでいる。
「今、解放してやるからな」
『いくぞ！』
彼女の声と共に少女の額に当てた手に光が宿る。その光は次第に

大きくなり杏子ちゃんの体全体を包み込む。
『いいぞ！そのまま力を流し続けろ！』
「はあああぁぁ！」
少女の精神にべったりと憑りつく元凶を視界に入れる。少しずつではあるが杏子ちゃんと悪霊の定着が剥がれていくのがわかる。
このままいけるか？
刹那。部屋全体を光が包み込む。
『きたぞ！！』
「やっぱ、そううまくはいかないか！」
視界を光の洪水が埋め尽くし、左腕に忌々しい激痛が走る。
「くっ！」
『――容認できない歪みを感知。直ちにこれを補正または修正し、正しい形に在るべき姿に世界を戻せ――』
部屋全体を埋め尽すかのように生まれる文字列。そして一語一句、あの森の時と変わらない言葉が告げられる。
「「邪魔をするなぁああ！！！」」
僕と雪燈の声が重なる。
それは無意識だった。いや、そう言うと多少語弊があるかもしれないのだが杏子ちゃんの額に当てた左手とは逆の手である右手をただ単純に目の前に現れた壁の様になった文字列を振り払うように叩きつけた。
それだけなのだが、取り敢えずその効果は絶大ではなかったが、無意味ではなかった。
その無数の文字列の中、叩きつけた部分の文字が欠けたのだ。
「これは…」
『椎名！』
雪燈が僕を呼ぶ声に今の一瞬で弾き出した考えが彼女を助ける可能性があるものだと確信する。
「あぁ！いけるかもしれない！この際、理屈とかは置いといて、この文字列壊せるぞ！」

そう応えている間も掌が触れている部分から文字列は粉々になり消失していく。
「あぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁぁあっぁあああああああああっぁあああ！！！！！！」
とっくのとうに左手は勿論、右手すらその感覚は無い――――ただ、見つけたんだ。
やっと少女を救えるかもしれない方法を。
それも僕好みの一番シンプルな作戦だ。
この糞みたいな状況を容認したのは誰だ？――――『世界』だ。
その状況を解決しようとするのを邪魔しようとしてるのは誰だ？――――それも『世界』だ。
なら、はなから殴る相手は決まっていたんだ。
杏子ちゃんに憑りついている悪霊なんかじゃない、それは――――
『――原因不明な損傷を確認。自己補修と共に要因を再検サ。補シュウ速度ガ追いツカない。ゆ、ユウ先順位を再セッテい。原インとみられるモク標を殲めツ――』
今までの人生、どれだけ弄ばれてきた？どれだけのものを奪われた？
誰に？
こいつだろ？
なら、お前のとる行動はひとつだ。
そうだろ？――――椎名良平。
「消えるのはてめぇえだぁあああぁぁ！！！」
全身の裂傷など気にせずに文字列を握りつぶす。瞬間爆発が起きる。
『椎名！』
やばい。全く力が入らないや。
それでも――――両膝をつき、両の手は血だらけになり重力にま

かせるようにただ垂れ下がっている。感覚など微塵もない。霞む視界で部屋を見渡すと先程までの光景は消失し、この部屋に入った当初の殺風景なものに戻っていた。
「それでも、一泡吹かせたかな」
視点を下に向けると杏子ちゃんが変わらない姿で横たわっている。
『椎名！おい！馬鹿』
頭の中で雪燈の必死な声が響く。
その声に場違いながら笑みが零れる。
「そんな叫ばなくても聞こえてるよ」
『だ、大丈夫なのか？』
「体が動かない以外は概ね問題なしかな。取り敢えずこれで――――」
『小娘を救える』
「あぁ。邪魔者はいなくなったはずだろ。というか、流石に今のをもう一回やれと言われてもできないわ」
『ならば早速――――』
「あぁー。雪燈さん？水を差すようで悪いんだけど一つ問題があるんですけど」
『なんだ？』
「そのーですね。申し上げにくいんですが、先程申し上げたように僕これっぽちも体が動かないんですけど」
静寂。
「あれ？おーい。雪燈さーん？」
さらに静寂。
「あのー。流石に反応が無いと…」
『馬鹿かー！！！』
「ぎゃー！！！」
不意打ちの様に脳内に響いた大声に溜まらず此方も叫ぶ。
『お、おま…。お前はなんでそんなになるまで無茶してるんだ！』
「仕様がないだろ！ここまでしなきゃ、アレをぶち壊すことなんてできなかったんだから！」

お前だってあんなのセーブとか考えてたらできなかったのはわかってんだろ！
『それで貴様は大怪我か？挙句に悪霊を小娘から祓う力も残ってないのか？本末転倒じゃないか！貴様は馬鹿か？阿保なのか？』
「だから――」
『余り無茶をするな』
僕の反論を遮るように続けられた言葉は先程の大声の罵声ではなく、呟くように唯単純に心配するように紡ぎだされた。
「ごめん」
くそ。行き成りそんなのは反則だろ。
『まぁ、動けないんじゃ仕様がないだろ。一時的に体の所有権を我に寄越せ。それで祓うだけならなんとかなるだろ』
「いいけど。それってどうやるんだ？」
またまた静寂。
『はぁあー』
溜息が痛々しく部屋――といっても僕の脳内だが――に響く。
「だー！！仕様がないだろ！いつもいつもなんか感覚？良く分からないなりにやってきたんだから！久世さんはなんも教えてくれないし！むしろそれでここまでやってこれたことを褒めてくれよ！どうしようもないみたいな反応すんなよ！泣きたくなるだろ！」
『わかった！わかった！私が悪かったよ。そのなんだ…お疲れ様？』
「なんで疑問形なんだよ！しかも求めてる言葉じゃねーし！」
なんかヤケクソになってきた。
――閑話休題
『さて、落ち着いたか？』
「悪い。取り乱した」
もうなんか体が動かないからあれだけど、動けたら穴に入りたい。
『ま、まぁそんな落ち込むな。これから色々と慣れていけばいいじゃないか！』
「慰めの言葉が今は痛い。しかも、そんなの慣れたくないわ」

『お、お前は良くやってるよ。うん。そ、それに今は小娘を助けるのが先決だろ？ほら、力を抜いていろ。あとは私の方から貴様の精神に干渉するから』
「おう」
雪燈の言うとおり、ここまではなんとかうまくいってるけど、あんまり馬鹿できる状況でもないしな。
言われた通りに強張っていた体の力を抜き、なんとなく目も瞑る。
頭の中には自分の精神と彼女の精神が重なりあっているのがイメージできる。
前々から不思議に思っていたが、雪燈と憑依すると、“人の精神”と思われるものを目にすることができるようになった。当初はモヤモヤとした漠然としたものであったのが最近では憑りつかれている時間の長さ故なのか、ハッキリと視界に入れることができる様になっている。それらは人により円や四角、はたまた楕円形など形はそれぞれであり、それらを構成する色をもっている。もちろん無意識的にではあるが、こうやって目を瞑ると僕と彼女の精神の形を見ることができる。
円と円。
蒼と白。
その中の白い円が蒼い円を包み込むように広がっていき、最後には蒼い円は白い円の半分の大きさになり白い円の中心になることで形は安定した。
『いいぞ。お前の体の所有権を借りたぞ』
「おぉ」
目を開けると自分の腕であるのに自分の意識とは関係なく左腕が杏子ちゃんの額に触れる。
「いやはや、なんか不思議な感じだな…って、痛ってーーー！！！」
『うるさい！』
「なになに！？体の所有権を奪われても、痛みだけはちゃっかりコッチ持ちですか！？そこは痛覚さん空気読んでくださいよ！」

『男なら少しくらい我慢しろ！』
「意識飛びそうなくらい痛いんですよ！？」
半泣きになりながら叫ぶも無情にも雪燈さんは更に左腕に力を込め、杏子ちゃんから悪霊を引き剥がす作業を続行する。
まぁ、馬鹿みたいなこと言ってるけど、実際のところはやめると言われてもやめる気は更々無いんだけど。ただ、こうやってヘタレたこと言ってなきゃマジで意識飛ぶ。
直ぐに右腕は蒼白く発光し、少女の体も光に包まれる。
視界には彼女の精神を捉える。四角い桃色の精神に紫色の楕円形をした精神が包み込んでいる。次第に紫色の精神が桃色の精神から引き剥がされていくのがわかる。
「痛いけど…我慢！いいぞ！このまま杏子ちゃんから引き剥が――――うえ！？」
少女の精神に集中していると突然紫色の精神が少女の精神から剥離し、勢い良く体から飛び出す。それとともにそれは人型を成し、目の前に現れる。
『まずい！』
そいつは最後の悪足掻きなのか、飛び出した勢いのまま僕等へと突進してきた。
はい。僕、終わった。
最大の難問を通過したことで、確かに気が緩んでいたのであろう。僕は勿論の事、雪燈も突然の事に反応できずに僕の体は動かない。そのまま悪霊に喰いつかれる瞬間、諦める様に目を瞑ろうとすると僕の体に触れるか触れないかの所で爆発が起きる。いや、正確に表現すると僕の体の目の前に見えない壁があり、それに悪霊は勢いついたままもの凄い音を鳴らしぶつかったのだ。
「雪燈！？」
直ぐに雪燈の仕業だと分かり、己の中にいる彼女の名を呼ぶ。
内から低い声が響く。
『はぁ、はぁ。今のは危なかった。低級霊風情が余り調子に乗

るなよ。それにあの森で言ったようにこれは私のモノだ』
　僕が女でお前が男なら惚れちゃうセリフだな、おい。
まるで他人事の様に悪霊が目の前で足掻く姿を見る。
『それにな』
彼女の言葉は更に続く。それと共に僕の右腕が持ち上がる。
　雪燈さん！？痛い！死んじゃう！
　僕の心の叫びも空しく、現状は更に進む。
『ココは既に私だけで定員オーバーなんだよ！醜く足掻いてないで、さっさと消えてなくなれ！』
　雪燈の叫びと共に拳を握った右腕は蒼白く発光したまま悪霊を殴りつけた。
　痛ってーーーーー！！！
　追加の痛みは僕の許容量を簡単にオーバーし、僕はそのまま意識を手放した。
　まったく、何回倒れれば気が済むんだろ。

5章（5）　咆哮と伸ばした両手（後書き）

さてさて、久しぶりの連投です。
あと少しで一段落です。
もう少しお付き合いください。

6章（1）　取り戻したモノ

第六章――？

「また意識なくしたのか」

目を開けると知らない天井とかでもなく、はたまたヤニと埃で薄汚い事務所の天井でもなく、ほぼ毎日の如く見ている良く見慣れた天井がそこにはあった。

というか此処は僕の部屋だ。

窓に目を向けると、夏に向けて元気になっていく太陽が燦々と部屋内部へと光を伸ばしている。

「昼くらいか？っつ。体が痛い。あぁ、そっか」

寝返りをうとうとした際に全身に鋭い痛みが走る。その痛みと共に今更になって、意識をなくしたその原因を思い出す。

事務所のソファーではなく、こうやって自分の部屋で寝ているということは誰かが運んでくれたのだろう。

「あれ？」

先程の動きから体を動かすことは当分無理だとわかり、頭を動かし部屋全体へと視線を移すことであることに気づく。

「雪燈？」

憑りつかれていると言っても常に一緒にいるという訳ではないのだが、ここ最近目を覚ますと隣に彼女がいること――実際困ったものだが――が続いていたためにどことなく違和感を感じてしまう。

「それにしても最近の僕の生活はどうなっちゃったんだろ。バトル漫画の主人公ってわけじゃないのに毎回毎回、ぶっ倒れて意識飛ばして――――」

「お兄ちゃん！！」

「うえ！？」

一人ブツブツと愚痴を溢していると突然、僕の部屋のドアが盛大に開け放たれ、伊織が駆け込んできた。

「ど、どうした？そんなに慌てて」
「あ、起きたんだ。って、どうしたじゃないわよ！今朝、事務所で久世さんが終わったっていうから部屋に入ったら、杏子ちゃんとお兄ちゃん二人とも床に倒れてたんだよ！しかもお兄ちゃんは全身血だらけだったし。もう！ほんとビックリしたんだからね。また浩市さんがお兄ちゃんのことここまで運んでくれたんだよ。というかなんでそんなに落ち着いてんのよ！意識無くしてからのこと全く分かってないんでしょ？あのあと――」
「杏子ちゃんは無事なんだろ？」
「そ、そうだけど」
「なら大円団じゃないか。そっか、やったんだ。それにということはまだあれからそんなに経ってないのか」
勝手にヒートアップする妹とは対照的に僕の心は至って落ち着いている。意識は無くしてしまったけど、最後に見たあの光景と自分の拳に僅かに残る感触がなんとなく無事に終わったということを教えてくれていた。
ゆっくりと、それでも力強く手を握りしめる。
――また浩市に借りを作っちゃったな。
あいつに借りを作ったままというのはなんとなく釈然としないし、早急に対策を練らなければ。
「それはそうなんだけど…なによ！コッチはどうせお兄ちゃんのことだから起きたら、大騒ぎするだろうって思って、あれからずっーと起きていてあげたのに！雪燈さんがお兄ちゃんが目を覚ましたって教えてくれたから慌てて部屋に来たのに！」
僕の反応がいまいち彼女の望むものとは異なったらしく、更に加熱していく。
言われてみれば、妹の瞳は軽く充血しているのがわかる。
「悪かった！悪かった。ありがとうな。だけど、こうやってぶっ倒れて起きるのもいい加減慣れたというか場数を踏んだというか、まぁ唯の高校生がそんなスキルを持つことは嘆かわしいことなんだろ

うけどさ。というか、ちょっと待て。雪燈が教えてくれたってどういうことだ？」
「ん？言葉の意味通りだけど？」
妹は首を捻り、キョトンとした顔で返事を返す。
ちくしょう。我が妹ながら可愛いリアクション――――じゃなくて！！
「まさか、お前にもあいつのこと見えるように――――痛てぇ！！」
それならば、今まで有耶無耶にしてきた、あいつと僕との関係が何かわかるのではと期待を込め早口気味にまくしたてると、横たわる体勢から起き上がろうとした所で、激痛が走り巻き戻しするようにまたベッドに倒れるように横たわる。
それを見た伊織は一瞬、怪訝な顔をするも納得いったように手を叩く。
「あぁ。違うよー。鈴を鳴らして教えて貰ったんだよー」
「へ？…鈴？」
「見て見て！良平君！」
「どわっ！？」
妹の答えに意味が分からず、呆けていると、いきなり壁から雪燈が勢い良く部屋の中――というか、僕のベッド――に突撃してきた。
「ん？雪燈さん来たの？」
やはり見えていないらしい。
「というか、何だよ！いきなり」
「あのね！あのね！私ね、ポルターガイストってやつ？出来るようになったの！」
「はい？」
突撃した勢いの元、僕が横たわるベッドの上に乗り嬉しそうに話し出す。意味が分からないという僕の顔を見ると、何がそんなに嬉しいのか、自慢気な顔をすると両手を合わせ掌でお椀を作る様に自分の前に持ち上げる。
「な！？」

「おぉ！凄い、凄い！」
薄っすらと彼女の掌が白く光ると、部屋にある時計やら本やらが宙に浮き出した。
流石に雪燈自体は見えなくても、実際に起きてる現象はその限りではないのか、その光景を見て伊織が楽しそうにはしゃぐ。
「どうどう？」
「お、おぉ。確かに凄いな」
自分が起こした現象を見て、満足顔でこちらを見る。
いやー。幽霊と一緒に生活しだして、まだ3ヶ月くらいだけどポルターガイストなんて初めて見たな———というか、こいつ益々幽霊らしくなってきたな。
「こんなのも出来るんだよ！」
僕の反応にご満足できたのか、更に浮かび上がったもの達を一度自分の周りに集めると、自分を中心にして円を作り、グルグルと回し出した。
「器用なもんだな」
「これで、見えない人にも私がいることがわかってもらえるようになったね」
そっか。“教えて貰った”というのはこうゆうことか。
———更に回る勢いは増す。時計に教科書に貯金箱にエロ本に筆箱に…は？
ちょ！？僕の宝物が入ってらっしゃいますよ、雪燈さん！！
だ、大丈夫だ。伊織はこの現象自体に気を取られてるし、雪燈本人も何を操ってるかまではわかってないっぽい。
それにカバーは当然の如く差し替えてあるんだ。その名も『苦手な科目を得意にする』。一般の高校生ならこうゆう嘘くさい参考書の一冊や二冊持ってるもんだ。偽装は完璧だ！落ち着け。中身さえ見られなければいいんだ。雪燈がこの現象やめて、一人になった後回収すれば…いや！駄目だ！伊織の事だ、僕がすぐに片付けないのをみて、勝手に片付けないとも限らない。考えろ！この状況をいか

に自然に安全に乗り越えるかを！
はしゃぐ二人を尻目に冷汗ダラダラで一人真剣に状況を分析する。
飛んでる物は時計に教科書に貯金箱にエロ本に筆箱…はっ！そうだ、貯金箱だ！あいつがこの現象を止め、床に物を置いた瞬間に貯金箱に飛びつくとともに自然に隣に置くであろう目標も回収すればいいんだ。貯金箱は陶器で出来たやつだし、割れると思ったと言い訳すればいいんだ。よし！自然だ。これで行ける！
「雪燈さん、もう止めた方が良いんじゃない？」
「そうだね」
そうそう。ほら今すぐ止めるんだ！
勢い良く部屋の中を回っていた物はピタッとその場で止まる。
よし！そのまま…そのままゆっくりと置くんだ。
獲物の位置をしっかりと見定める、いつでも動ける様にする。そして、目標はゆっくりと――――普通に落下した。
「なぁあああぁ！？」
雪燈さん、それは予想外です！
慌てて飛び出そうとしたとこである事を思い出す。
「痛ってぇーーー！！！！」
「良平君！？」
身体全身に激痛が走り、そのままベッドから落ちると勢い良く床に顔面をぶつける事で止まる。ガチャンと追い討ちを掛ける様に貯金箱が虚しく割れる音が続く。
踏んだり蹴ったりだ。ちくしょう。
「だ、大丈夫！？お兄ちゃん…！？」
「お、おう。なんとか…伊織？」
身体を動かすことができないため顔だけを妹に向けると、伊織は僕の方とは違う所を見つめて、固まっていた。
「どうした…うげっ！？」
不思議に思い、彼女の視線を追って見るとそこには粉々に砕けた貯金箱が――――その隣に目標が落ちていた。

ページが開かれた状態で。
「お、お兄ちゃん…」
「は、はい」
「良平君？」
「…はい」
あぁ、良い人生だったな。お前は良くやったよ。頑張った。この世界は優しくないんだ。お前だって良く知ってるだろ？努力したってどうしようも無いことなんて嫌になる程あるもんだよ…。
「「最低！！」」
二人の声が仲良くシンクロした。

6章（2）　還ってきた日常（前書き）

今回も少し短めです。
六章はエピローグの扱いですが、
一つにするとキリが悪かったので、三分割してます。

6章（2）　還ってきた日常

第六章――？

世界からの理不尽な扱いに雄叫びを上げた日から翌日、場所は学校。

授業も全て終わり、日は傾きかけた夕方時。

校内に居るのは部活動に励んでいる奴か、家に帰ってもやることがないと、校内をブラブラしている物好きな奴だけだろう。

おっと、まだ居たな。僕ら生徒を親御から預かる教職員の皆様だ。まぁ、顧問でもないかぎりほとんどの人が職員室にいるんだけど、その職員室で一際異彩を放っている奴がいる。

床に直接正座して、教員に教科書で頭を小突かれている生徒がいた――――というか、僕だ。

対する教員はもちろんあきほちゃんだ。

「で、なんか言い訳はあるのか？」

「…御座いません。痛っ！ちょ！頭叩かないで」

「先週の金曜日の欠席は、まぁいいとしよう。浅井から理由も聞いてるし、あいつをこっ酷く絞ったからな」

「はぁ…、痛いっ！」

僕の殻返事に更に教科書という凶器が何度も落とされる。

「更に昨日の無断欠席はなんだ！？温厚な私も流石に頭にくるぞ」

それは絶対嘘だ！――――まぁ、こんな状況になっている説明は今あきほちゃんが言った通りだ。

素直に悪霊と闘い、全身怪我だらけになって意識を失い、朝起きたら痛みで動けず、一日中寝てたなんて理由にすらなりしないだろう。馬鹿にしてるのかと頭を叩かれて終わりだ。多少理不尽でも、大人しく怒られてるのがいいだろう。

体も完全復活とまではいかず、所々痛みは残っているが、このままあきほちゃんの機嫌が戻るのを待つ。

「全く、お前は浅井と違いそこら辺は弁えてると思ってたんだがな」
「はぁ…、返す言葉もありません」
「何か事件に巻き込まれたのかと心配したんだぞ」
「はい」
俯きながら応えると肩にあきほちゃんの手が置かれ、見上げると彼女が真剣な顔で僕を見つめていた。
「椎名」
「はいっ！」
ヤバイ！これは真剣に怒られるかも！？
「お前が何の理由もなく休むなんてことをする人間じゃないことくらい、私にもわかってる。だから、だからこそ私はお前を本気で心配したんだぞ！」
「へ？」
「これでも私は教師だ。そして、お前は私の大切な生徒の一人だ。お前がこの学校を卒業するまでの間くらいは、お前の面倒を私に押し付けたってかまわない。それでお前が真っ直ぐ道を歩めるというなら、教師として本望だ。何かあるなら――――私を頼れ」
「！？い、いや。本当に…、問題は解決しました。もう大丈夫です。ただ、すみませんでした。それと、ありがとうございます」
これは流石に――――
「そうか。いや、わかってもらえればいいんだ。今後はちゃんと連絡の一つくらい入れてくれ」
そう言うと、真剣な顔からいつもでは想像できない優しい表情を浮かべる。
流石に――――ずるいよ。
「失礼しました」
そう言葉を残し、職員室の扉を閉め、廊下へと出る。職員室の中とは違い痛い程の静寂に包まれる。
とぼとぼとそのまま歩き出すと今まで後ろにいた雪燈が目の前に

移動してくる。
「なんか意外だったね」
「あぁ。あれには流石にお手上げだよ。普段、やる気なさげな暴力教師なくせして、あーだもんな。まったく生徒から人気がでるのもうなづけるよ。正直、反則だよなぁー」
僕の言葉にクスクスと楽しそうに微笑うとこちらをじっと見つめてくる。
「なんだよ。僕の顔になんかついてるのか？」
「そうゆう訳じゃないんだけど…なんか、良平君の言う普通の日常ってやつが戻ってきたのかなって思ってさ」
その言葉とは裏腹に彼女の表情が曇る。
「？なに当たり前のこと言ってんだよ。普通万歳。日常最高ってことでいいじゃないか、そうだよ、これこそ僕が求めてたやつだ」
「うん。こうやって良平君と普通に会話しているこの現状には本当に感謝しているよ。本当だったら私はこの世に居てはいけない存在なのにね。傍から見たら私はあなたに憑りつく幽霊なのに」
今にも泣きだしそうな子供のような表情でこちらを振り向く。
馬鹿だなぁ…。
あの日、事務所の奥の部屋で弱音を漏らした夜の雪燈といい、まったくこの幽霊様は世話が焼けるよ。
「まぁ、憑りつかれて病院のベッドの上で目覚め、お前と対面したときは正直ふざけるなって思ったりもしたさ。ただそんな話は本当だったら憑りついた時にするもんだ。それにな雪燈、お前は一つ勘違いをしてるよ」
「勘違い？」
「お前が感じているように僕も心の――精神の奥底でお前のことを他人だとは思えないんだ。そしてこんなの今更言うことじゃないけど決意するまでに時間がかかり過ぎたな」
本当に僕は馬鹿だ。今まで関係ないふりを必死に演じ続けて。本当は僕が一番の当事者であり、もう戻れないところまで来ていたと

いうのに。
一呼吸おいて自分の決意を告げる。真っ直ぐに彼女――相棒を見つめて。
「僕はこの壊れかけの世界から杏子ちゃんの様な人達を助けたい。個人的に色々と恨みもあるしな。ただ僕は何も力を持たない。だから、そのためにはお前の力が必要だ。」
長い廊下に夕焼けの日差しが入り込んできた。

エピローグ

第六章――？

「だから僕はこれからも逃げません。この道を進むにあたって久世さんも片棒担いでるんだ。というか、無理矢理引っ張り込んだのはあんたなんだから、そこんとこ宜しくお願いしますよ。目標は僕と雪燈の記憶の回復ってことなんで」

場所は変わり、学校の廊下からこの寂れたビルの一室で久世さんを目の前に僕の決意を告げる。

当初、いつもの様にへらへらとした表情で話を聞いていた顔は目を丸くしながら呆然とした表情で固まっている。

「久世さん？」

「いやー。なんというか、驚いたなぁ…。僕はてっきりあんな目にあって、君の事だ『もうやめてやる！』って駆け込んでくるくらいを想像していたのに…。全く持って予想外だよ。いやはや、これだから人間は――――いや、君は面白い」

「？それは、褒め言葉として受け取っていいんですかね？」

「もちろん褒め言葉だよ。うん」

そう言うと、何時ものへラへラとした表情に戻る。嘘くせー。

「しかし、まぁ正直な話僕はこれからの君達の在り方には少なからず頭を悩ましてたからね。君の口からそんな答えが出たのは本当に嬉しい限りだよ。『もう二度とあなたの前には現れません』とか言われる覚悟だったのに」

久世さんは椅子から腰を上げると、後ろの窓から夜の暗闇がかかり始めた街を見渡す。

「まぁ。これでやっと、次のステップに進める」

「ん？」

言葉に釣られ、僕も久世さんの背中越しに街を眺める。

「いいかい、椎名君。この街にはね、君が今まで知らなかった事が

山程あるんだよ。そして、君が今から踏み出そうとしてるその場所は決して安全でもないし、ましてや君がいう所の平凡なんて言葉はないかもしれないよ」
「それは重々承知ですよ。それに――」
「こいつには私がついてるしな」
背中から実に頼もしい言葉が重なる。
「ははっ、そうだったね。雪燈ちゃんがいるしね。ただ、君達の想像以上のことが待ち受けてるかもしれない。そんな事を平気な面で用意してるのが、この世界なんだよ。って話さ」
「そんなの嫌というほどこの身で味わってますよ」
苦笑すると包帯の取れていない自身の両腕を見る。
「君等には本当に沢山のことを教えなければならない。この世界で君達が君達でいられるようにする力の使い方なんかをね。まぁ、それはまた今度だ」
「世界が私達を否定するならば、そんな世界はいらないわ。それにそんなことをしてもぶち壊すだけだ」
雪燈さん、女の子の言葉じゃないよ。
「やれやれ、怖いもの知らずほど、救い様の無い奴は居ないな」
ふと見ると、何時の間にか黒猫さんが久世さんの肩に乗っているのに気がつく。
「ははっ、いやー、君達には愚問だったかな。まぁ、取り敢えず――」
そう言うと、街の灯りからこちら側に振り返る。
「ようこそ夜の世界へ。いや、昼と夜の境界へ」
楽しそうにそう言って言葉を締めくくった。

エピローグ（後書き）

取り敢えず、この章で第1話終了です。
ここまでお読みいただきありがとうございます。

さて、今後の活動ですが、第2話にいくにあたり、第1話のチェック、第2話の前説などを載せる予定です。（それより何より、ここの使い方をマスターせねば）

本格的に第2話を載せるのはちょっと間隔があきますが、これからも宜しくお願いします。ではでは

前節

うっとおしい梅雨も明け、刻々と夏の匂いが近づきつつある七月。
今までの自分と雪燈との在り方を見直す為に久世に教えを乞う良平。
雪燈との付き合い方も多少の変化を見せ、少しずつではあるが確実に一歩を踏み出した。
そんな中、式森新という転校生が清陵高校にやってくる。
『式森』には関わらない方がいいという久世の助言にも、引き合うかのように良平と新は邂逅する。
清陵高校生徒会、旧校舎の怪談、霊関係専門の刑事。
様々なものが混じり合い物語は進む。
「なんで、俺とお前はそんなにも違う！」
不自由な快楽者は自身の置かれた立場から、語り部を憎む。
「お前に僕の生き方をとやかく言われる筋合いはない！」
自由な語り部は快楽者から有り得た自分を見ることで反感する。

プロローグ1　―　語り部―（前書き）

第2話スタートです。
更新がここまで遅くなり、申し訳ありません。
とりあえず、活動報告に書いときますね。

プロローグ１　―　語り部―

ｐｒｏｌｏｇｕｅ－１

連日連夜の様に雨を降らしていた雨雲はどこかに消え、初夏の蒸し暑さが漂い始めたある日の夜。

日中けたたましいくらいに大合唱していた虫達すらも寝静まったかの様な森の中１人の青年が走り抜ける。

途中躓きながらも、ある一点を目指しているかの様にがむしゃらに走り続ける。

森を抜け、そこだけ穴が開いたようにぽっかりと何もない空間に飛び出した所でたちどまり初めて後ろを振り返り叫ぶ。

「アクセス！」

前後の意味合いも無く、ただの単語として口にした言の葉は青年に急激な変化を与える。

突き出した右腕は青白く光り、目を凝らして見れば、腕全体を薄い膜の様な物が覆っているのがわかる。

「雪燈！一気にきめるぞ！」

「日の出まで時間がないぞ！さっさと終わらせろよノロマ」

青年の独り言かの様に思えた言葉に内容はともかく、しっかりとした応えがある。

瞬間。ぽっかりと開いたその場所に月明かりとは別に光が降り注ぐ。

「おぉ。今回はちょっと大物ですなー」

「寝ぼけた事をほざいている暇があるなら、さっさとやれ！」

「なんか前にもこんな事があったような…」

光の塊は青年を中心にぐるりと廻ると、一旦跳ね上がり宙に浮き、そのまま自由落下する様に青年に突進してきた。

「きたぞ！」

「なめんなっ」

一直線に向かってくる光の塊に向かって、空地の四方から鎖が飛び出し、目標を雁字搦めにする。
勢いが停滞したその瞬間、自身の右腕を振りかざし、その掌をぶつける。
すると、右腕に纏っていた青白い光はその掌を伝う様に光の塊を侵食し、すっぽりと包みこんでしまう。
「いっけーーー！！！！」
青年の雄叫びと共に光の塊からキラキラとした光の粒子が巻き上がり、次第に塊自体は小さくなっていき、最後には全てが空に消え、消滅してしまった。
「なんか、この世に残った怨念の塊なのに消える時は綺麗なもんだよな。恨み辛みも何もかもみんな綺麗に消えちまってるのかな」
「感傷に浸るのもいいが、さっさと戻らないと小娘に怒やされるぞ」
「怒った伊織…。それは怖いな。んじゃあ、さっさと帰りますか。あーあ、今日も寝不足ですよ」
ふと見ると、青年の後ろに寄り添うように綺麗な女性が居るのが薄っすらとわかる。
雪の様に白い肌を持ち、その長い黒髪は流れる様に肩までのびている。
家路へと向かう様に歩き出した彼らに林の間から朝の柔らかい光が届く。
「お！日が出てきた」
「さぁ、良平君帰りましょう」
どこか浮世離れしたその表情は先ほどまでの青年への言葉遣いや厳しい表情とは真逆に暖かみのある顔で青年の事を見ている。

平成２３年７月上旬。
この壊れかけの世界の中を歩くとやっと決意した２人。
椎名良平と雪燈である。

プロローグ2　―　快楽者　―

prologue－2

　ネオンが眼に痛いくらいに光る繁華街の賑やかさとは反対に本道から一歩逸れるとそこは一般人など簡単に呑み込める程の深みがある闇がそこにはあった。
「くそ！なんだよ！なんなんだよ！」
　その闇の中を1人の男が走りぬける。
「俺が何をしたっていうんだよ！ふざけんな！」
　雑居ビルによって作られた迷路を右往左往しながらも進んで行く。
　走りながらもチラチラと後ろを気にする様に振り向くが、そこはただ闇だけが広がっている。
　その奥に潜む何かを見てるかの様に男は脅えた様に走る。
「くそ！くそ！がぁあ！！」
　曲がり角に差し掛かった所で、走っていた事もあるが、注意が散漫になっており、足元に置かれていたゴミの山に気づかないで男は盛大に転倒する。
「はぁ、はぁ、くそ！なんでこんな…」
「なんだぁ？鬼ごっこは終わりかよ？」
「！？」
　這い蹲りながらもゴミの中、必死に立ち上がろうとした所で、男の頭上から声が降り掛かる。
　それは子どものように。
　そして、異常者のように。
　ただ楽しくて、愉快で仕様がない程に。
「くそがぁ！出てこいよ！ぶっ殺してやる！」
　男は恐怖という感情が振り切れ、這い蹲りながらも狂った様に叫び散らす。

ストン。と、男の後ろから物が落ちる音がし、慌てて後ろに身体ごと振り返るが、そこには何もない。闇があるだけだ。
「ほら、出てきてやったぞ」
瞬間、男の耳元で声がする。
「ひぃ！」
男はもう一度後ろを振り返ろうとした所で、　自身の身体の異変に気づく。
首が回らないのだ。
「あれれ？頭と胴体切り離したのにまだ生きてんの？」
「なっ！？」
声と共に、頭を後ろから小突かれる感触がすると、男の視界は男の意思とは関係無く下を向き、そのまま１８０度ひっくり返った世界の中、自身の頭がついていない身体と、その後ろで手に持ったナイフを手を降る様にして動かしている青年を視界にいれた所で男の視界は真っ暗になった。

また静寂が戻った裏路地を青年は歩く。鼻歌を歌いながら、右手で遊ぶ様にナイフを回す。
「ご機嫌だね」
突然の声に青年は足を止める。
「なんだぁ？覗き見とは趣味が悪いじゃねーか」
「そう言うなよ。始様からの命令だからね。君の監視は」
声だけが返答をする。
「はっ。式森の犬っころが」
「君もだろ？」
「てめぇ！」
青年はニヤニヤとした表情から、一変ケモノの様な表情になると、目の前の闇の中にナイフを投げつける。
「危ないなぁ。犬というより、獣だね」
その闇の中から青年が投げたナイフを指の間に挟んだ状態で全身

真っ黒のスーツを纏った長身の男が表れる。
「なんなんだぁ？用はすんだろ。心配しねぇでも、大人しく屋敷に帰るよ」
「私も少しでも早く始様（はじめ）の元に戻りたいのは山々なんだけど、どっかの野良犬が夜の散歩に出かけるから、始様からの用件を伝えないと帰れないんだよ」
「てめぇ、喧嘩売ってんのか？」
２人の間の空気が豹変する。
「まぁ、落ち着きなよ。用件さえ済めば大人しく帰るよ」
長身の男の方が両手を上げ、空気を和らげる。
「ちっ。んで、用件ってーのはなんだよ？」
「これだよ」
そう言うと、長身の男はどこからか一冊の薄い本を取り出し、少年に投げる。
少年がそれを受け取るのを見ると現れた時と同様に音もなく闇の中に姿をくらませた。
「ちっ！全く、気味の悪りぃ奴だな。んで、なんなんだぁ？こりゃ？始の野郎、なんかの冗談かよ」
少年の手にある本には清綾高校転入案内という文字が書かれていた。

彼はまだ知らない。
この先、自分にどのような運命が待ち受けているのかを。
語り部と快楽者。
自由であることを望み続ける語り部。
不自由であることが当たり前になりつつある快楽者。
二人の出会いは近い。

1章―1　初めの一歩

1章―？

「全く、君は物覚えが悪いなぁ。もう一度言うから、良く聞きなよ」
「…はい」
廃れた雑居ビルの1フロアをぶち抜いたような一室に置かれたソファーに向かい合うように2人の男が座っていた。
一方はまだ、7月上旬とはいえ、夏の日差しが強くなってきており、それは日が暮れた現在においても名残惜しむことなく、残る気温の中、ヨレヨレな黒いスーツを上着まで着ている。
まぁ、着こなしとしてはダラしないとしか言えないが。
方や、ポロシャツに七分のパンツ、サンダルと相当ラフな格好だが、この場合こちらの方が季節に合っていると言えるだろう。
「だからね。君と雪燈ちゃんとの間では元々、精神的な所でリンクしているんだよ。『とりつく』っていうのは、言葉の意味通り繋がっているって事なんだ。それを『憑依』というレベルに引き上げるのを僕らの言葉ではアクセスと言っている。まぁ、この場合言葉は何でも良いんだけど、その『言葉』がどんな『意味』を持ち、どの様な『方向性』を持たせているかが、大事なんだけどね」
「はぁ…」
うん。良くわからん！
スーツの男―――久世暁良は困った様に頭をかく。
「何よりも大切な事はイメージなんだよ。それをより強固な物にするのが、言葉なだけなんだよ。そうだなぁー。君はほとんど無意識にやってるだろうけど、除霊する際に右手が光るだろ？」
「ん？これすか？」
そう答えるとポロシャツの少年―――椎名良平の右手が青白く光る。

「そう、それ。本来これ迄説明してきた事を理解してなきゃ、出来ない芸当なんだけどね。まぁー、感覚で出来てるから、良いかなって後回しにしてた僕自身にも責任はあるし…」
「馬鹿なのは馬鹿な奴の責任で、主のせいではないわ」
「うるせぇー」
頭を悩ませてると、久世さんの肩に何時の間にか一匹の黒い猫が乗っている。
蒼と金のオッドアイ。
美しい迄の黒い毛並み。
「本当の事を言われて、腹が立ったか？小僧」
「こいつは馬鹿ではない！理解力がないだけだ！」
猫が喋るという事実はさて置き———喋るんだから、そういう物として受け入れよう。
ちゃんと説明すると、何というか久世さんの『使い魔』という奴らしい。これでも齢五百年という歳月を生きている化け猫だ。
そんな訳でその長い年月が人語を解し、霊力をもたらし、使い魔として変貌を遂げたらしい。猫に小僧と言われても、なんも言えないのが哀しい所ではあるけど。
んで、そのお猫様に反発した声の主はと言うと、これまた俺の肩に乗っかっている。
違うのは猫ではなく、女の子ということだけど。
肩に乗っていると言っても重みは感じない。
なにしろ実体がない。
世間一般でいう所の『幽霊』ってやつだ。
喋る猫やら幽霊やら、現実というか、今迄の僕の日常の中には多分関わらないだろうと思っていたものが何時の間にやら、逃げ出せないとこまで日常の中に組み込まれてしまっている。
多分と表現したのは、元々僕には多少なりとも霊感というやつがあり、普通の人よりはそれなりにニアミス的な体験はしてきたからだ。

まぁ、それがどうゆう訳かこの隣の幽霊様に取り憑かれ――――気に入られ――――気を失ったら、バリバリの霊能力体質になってしまっていたというのだから、救いがない話だ。
この幽霊――――雪燈とはどうやら幼いころに知り合いだったらしい。
らしいと言うのも小学四年生から以前の記憶が僕にはないからだ。

記憶喪失。記憶障害。

そんな訳で失った記憶を取り戻す為にと雪燈との奇妙な二人三脚を続けていたのだけども、先月頭に起きた妹の友達が巻き込まれた事件をきっかけに新たな目的が追加され、この生活が続いている。
僕の手の届く範囲の人達はこの世界の理不尽な事から救って見せると。
これが、今現在の僕の日常である。

1章―2　初めの一歩（2）

1章―？

「で、話を元に戻すけど、本来霊やそれらに准ずるモノを使役し、力を引き出すためには三つのステップを踏んでるんだよ。一つ目は『アクセス』。これは君も意識しているだろうけど、定着を表す。君と雪燈ちゃんとの繋がりを強固にすることだね。『憑依』とも言える」

そう言うと、目の前に指を一本たてる。更に二本目をたてる。

「次に『リード』。これもそのままの意味なんだけど。自身にアクセスした媒体がどの様な特性を持っているか読み取ることだね。君たちの場合は雪燈ちゃんに元々除霊の力があったんだろう。それが、君の右手に宿るようになっているんだ」

更に指を立てる。

「そして、最後にその力を実際に扱うのが『トレース』。君も含めて『器』側にとって1番重要になってくるのがここだよ」

「器側ですか？」

「そう。前の二つのアクセスもリードもどちらかと言うと雪燈ちゃん側――媒体のウェイトが大きいんだ。しかし、トレースは全くの別物と考えた方がいい。と言うのも、媒体が同じであれば誰が行なってもリードまでは力の強弱はあれど、ほぼ同じ現象が起きるのに対し、トレースだけはその限りじゃないんだ」

「はぁ」

「というのも…うーん、今日はこの辺にしとこうか？」

話を続けようとした所で、久世さんはふと言葉を止めると困った顔をしながら、会話を打ち切った。

と言うか、僕のせいなのは言うまでもない。

頭から湯気がでそうだった。

「君の場合は実戦で覚えてく方がいいのかもね。まぁ、まだトレースできていない君にその先まで理解しろって言う方が酷かな」
「使えてないんですか？じゃあ、霊を祓う時に使ってるこの力はなんなんですか？」
「それは単純に雪燈ちゃんから漏れ出す力をそのまま垂れ流してるだけと言えるね。まぁ、ちょっと言葉が悪いんだけど、だからこそ君がしっかりとそこら辺のことを理解して、１００％雪燈ちゃんの力を使いこなせるようになったら、すごいことになると思うんだよね」
　久世さんの言葉に目に生気が戻る。
「じゃあ、俺はもっと楽に霊を祓うことができるようになるんですね！」
「理解できるようになればだけどね」
「うぐっ」
「単純馬鹿は楽でいいのー」
　自分の理解力の無さに落ち込んでいると、黒猫さんが更に追い討ちをかけてくる。
　いいんだ！久世さんもあぁ言ってるし、僕は実戦タイプの人間なんだ！
「さっきも言ったが、良平は馬鹿じゃないぞ！あまり頭が良くないだけだ！」
　ブルータス、お前もか！
「くくくっ。ほら、時間は大丈夫なのかい？明日も学校があるんだろ？」
「僕なんか…僕なんか…ん？ヤバい！今何時だ！？明日の宿題があるんだった！」
　実は僕以外みんな敵だったという事実に頭を抱えていると久世さんの声で我に返る。
　今日は金曜日で通常なら明日の土曜日は休みなのだが、この前の事件の無断欠席の罰として、振替えであきなちゃんの授業がある

ことをすっかり忘れていた。
あきなちゃんとは僕等一年二組の担任兼国語の教師である矩境あきな先生だ。
三十路に片足突っ込んできたのに彼氏の一人もできないのが最近の悩みである。
取り敢えず、怒らせたら危険な人物だ。しかし、生徒の受けは良いし、基本的に真面目な性格ではある。
今回の講義にしたって「お前だけ他の生徒より授業を遅らせるわけにはいかない！同じ学び舎で学ぶ者同士、そこに不公平があってはならないんだ！」とかなんとか熱く語り、僕の補習は決定したのであった。
まったくこちらとしてはいい迷惑だが、真剣に僕の事を心配しているだけに無下にできないというのが更に性質が悪い。
「久世さん、すみません！今日はこれで失礼します！」
「いいさ。いいさ。勉強は学生の本分だよ。まぁ、またまた君用の依頼が溜まってきたから、放課後にでももう一度寄ってくれればいいよー」
慌てて隣に置いてある鞄を肩に掛け、出口まで向かうと、気の抜けた声で返事がある。
「すいません！じゃあ、失礼します！」
「待って！良平！」
そのまま止まることなく、外へと飛び出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5845v/

君と僕の壊れかけの世界

2011年11月24日16時45分発行